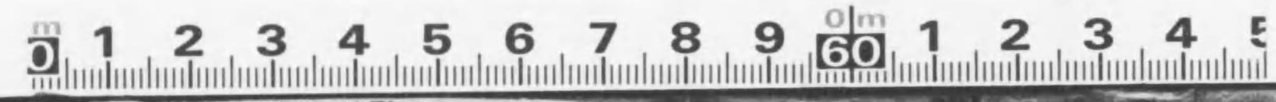
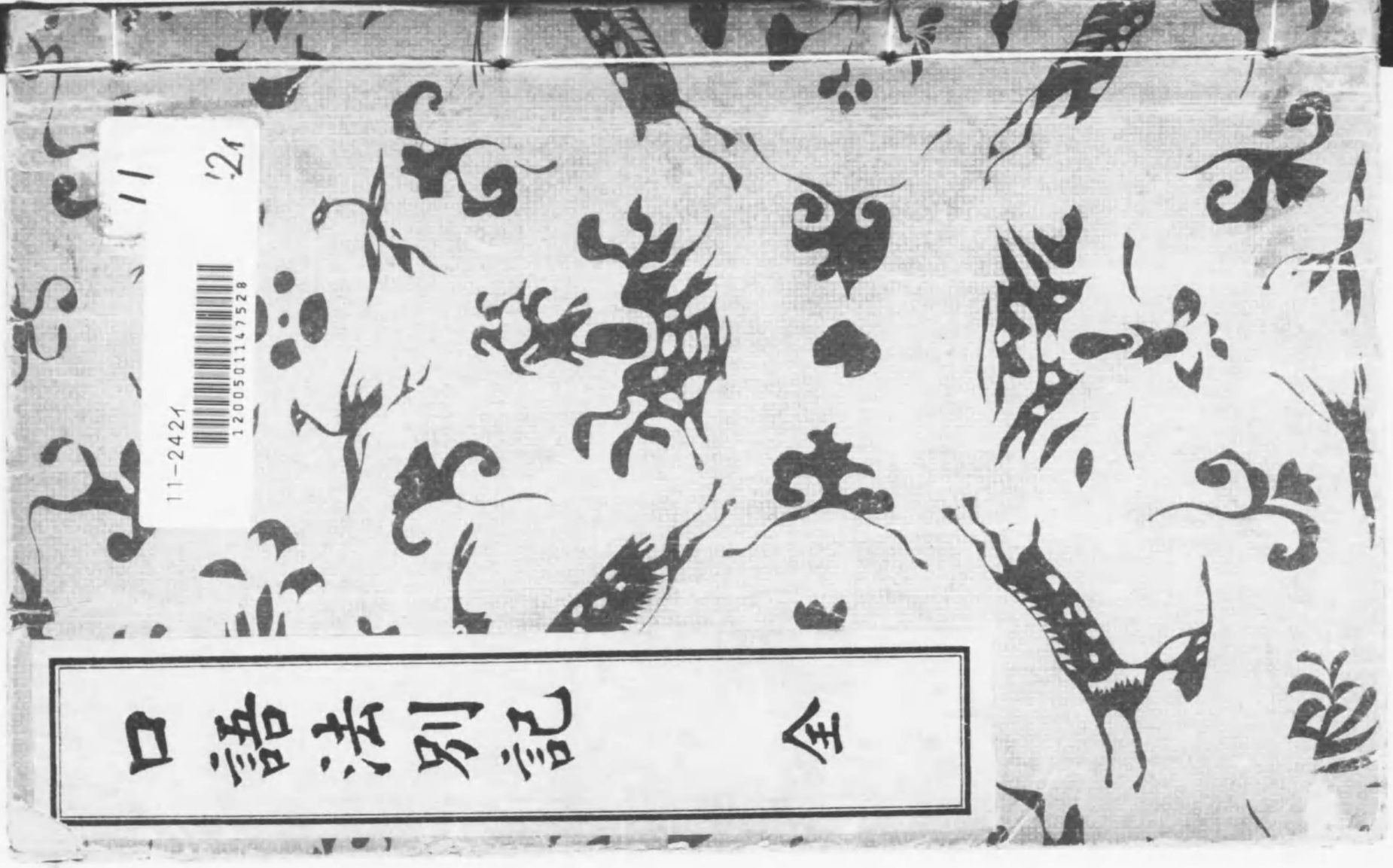
設





11-2421
12005011475 28

論英法語 四

全

國語調査委員會編纂

口語法別記 全

大日本圖書株式會社

昭和一〇・九・廿九 帝圖

11-242

緒言

本書ハ、別冊口語法ノ附錄ニシテ、主査委員文學博士大槻文彥ノ擔任編纂セシモノナリ。

大正二年六月

國語調査委員會

例言

一口語法ノ稿案ハ、明治三十七年ヨリ起草シ、次第ニ改訂シテ、三十九年ニ至リテ成レルモノナリ。其ノ中ノ語法ノ骨子タル所ノミヲ擧ゲタルガ、別冊口語法ニシテ、其ノ各條ノ說明ニ涉ルガ如キモノヲ別ケテ記シタルガ、卽チ此ノ別記ナリ。尙、口語法ノ例言ヲ參見スベシ。

一書中ノ行頭、又ハ文中ノ括弧內ニ記シタル數字ハ、口語法中、各條ノ欄上ナル數字ト照合セシムベキ符號ナリ。但シ、助動詞ニアリテハ、口語法ニテハ、各助動詞ノ各活用ヲ別チテ處々ニ說キタレド、此ノ別記ニテハ、其ノ各活用ヲ其ノ各助動詞ノ下ニ集メテ說キタル差アリ。

一此ノ別記ニハ、口語ノ一々ニ就キテ現在各地方ノ差違、及ビ、八九百年來ノ語體ノ變遷ヲ附記シタリ。

一各地方ニ就キテ、關東、東國、又ハ關西、西國ナド記シタルハ、我ガ全國ヲ、中央ニテ、大凡ニ東西ニ二分シタル稱ナリ。其ノ中央部ヲ、或ハ中部、又ハ畿内邊ナド記シタルモアリ。又、山陰山陽兩道ヲ中國トモ記シタリ。

一口語ノ差違ニ、或ハ某縣ト記シ、或ハ某國ト記シタルハ、一縣ノ數國ニ亙リテ其ノ差違アルニ因レリ。

一右ノ如ク、口語ノ差違ヲ地名ニテ記シ分ケタレド、確タル境界アルニハアラズ、互ニ犬牙錯綜シタルアリ。唯、大凡ニ言ヘルモノト知ルベシ。其ノ委シキ事ハ、本會ニテ刊行シタル左ノ圖書ニアリ。

口語法調査報告書　明治三十九年十二月刊
音韻分布圖　明治三十八年三月刊
口語法分布圖　明治四十年二月刊

一口語ノ變遷ヲバ、平安朝時代、鎌倉時代、南北朝時代、室町時代、江戸時代(元祿年中ニ止ム)ト別テリ。平安朝時代トハ、山城國ニ京ヲ定メラレテヨリ鎌倉時代ノ初マデナリ。織田豐臣ノ時代ハ、室町時代ノ末ニ入レタリ。

一今日、普通ノ文章ニ記ス言語ヲ文語トシ、談話ナルヲ口語トス。文語ト口語ト兩途ニ別レ始メタルハ、平安朝時代ノ中世ヨリナリ。其ノ差違ハ、發音ト用言ノ語尾活用トノ變轉ニ生ジタリ。古來ノ口語ノ變遷ヲ知ラムニハ、書籍ニ據ラズハアルベカラズ。然ルニ、世ニ存スル書籍ハ、

悉ク文語ニテ記シテアレバ、其ノ變遷ノ徑路ヲ知ルニ由無シ。但シ、兩語相別レテヨリ、文語ハ學ビテ始メテ記シ得ルモノトナリシガ故ニ、數百年來ノ文語文ハ、人々、己ガ日常ノ口語ニアラズシテ、スベテ、學ビテ記ス擬古文ナレバ、コレヲ記スニ當リテ、思ハズ取外シテ、往々口語ヲ雜フルコトアリシナリ。此ノ事アルニ考ヘツキテ、乃チ、幾多群書中ニ就キテ、其ノ雜ヘタル口語ヲ探リ、遂ニ十卷二十卷中ヨリ一二語ヲ拾ヒ、五十卷百卷中ヨリ三五語ヲ索メ得テ、(全ク見出サヾリシ書固ヨリ許多ナリキ)斯ノ如クシテ、辛ウジテ變遷ノ痕ヲ認メタリ。所謂めくらさがしシタルナレバ、多クノ歳月ヲ費セリ。

群書中ニテ、多ク口語ヲ雜ヘタルハ、古クハ、平安朝時代ノ末ナル梁塵祕抄ナリ。是レ、今樣歌ナドノ謠物アレバナリ。次ニハ、鎌倉時代ノ平家物語ナリ。是レ、琵琶法師ガ琵琶ニ合ハセテ語リテ、人ニ聞カセ耳ニ解セシメムガ爲ノ語物ナレバナリ。次ニハ、室町時代ノ義經記、曾我物語御伽草子類ノ小說ナリ。是レ、婦女子ニモ理解シ易カラシメムノ讀本ナレバナリ。次ニハ、幸若舞ノ語物、或ハ、史記抄、孟子抄等ノ講義ノ書取、其ノ外ハ、小唄、連歌、狂歌、俳諧ノ書、狂言記等ナリ。凡ソ、口語文ナルハ、先ヅハ是等ノ數書ニ過ギザルベシ。江戸時代ニ至リテ、口語文ノ書、頗ル多ク世ニ出デタリ。

一採收シタル出典ハ、書中ニ載セタルモノヽ、外ニ、尙多々アレド、重複スルモノナドハ捨テタリ。載セタルモノヽ、中

ニモ、削リテ可ナラムト思ハル、モ無キニアラネド、今ハ姑ク存セリ。　又、書中ニ引用シタル書名ハ、引用書目ニ擧ゲタル外ニ尙多ケレド、僅ニ一二語ヲ採リタルモノハ、其ノ引ケル所ニノミ記シテアリ。

一古來ノ書籍ハ十ノ八九ハ、京都人ノ作ナレバ、此ノ書ニ變遷ヲ記シタル口語ハ、京都ノ口語ナリ。　江戸時代以前ノ東國ノ口語ノ如キニ至リテハ、書無ケレバ更ニ知ルコト能ハズ。　尙、探リ漏シタル書モ多々アルベケレド、京都語ハ、自ラ日本國語ト云フベケレバ、日本口語ノ變遷ハ、此ノ書ニテ、先ヅ大略ハ知ラルベシ。

一口語ノ變遷、語原等ニ就キテ、江戸時代ヨリ、明治大正ノ今日ニ至ルマデ、學者ノ已ニ研究シタルアルカ知ラネド、編者ハ、遍クコレヲ索メテ、遂ニ一書ヲモ手ニシ得ザリキ。蓋シ、着目セシ人ハ無カルベシ。　畢竟、國語學者ハ、口語ヲバ一概ニ俗語ト擯斥シテ顧ミザルナリ。(敷田年治ノ假名遣沿革考アレド、假名遣ノ事ノミ、)　サレバ、此ノ書ハ、全ク創作ノモノナレバ、隨テ精到ナルモノトハ固ヨリ言フベカラズ。　然レドモ、完全ハ後ニ期シテ、先ヅハ此ノ如シ。

一文語ト口語ト異ナラザルモノハ、固ヨリ記サズ。　名詞、副詞ナドニ就キテモ、多クハ言ハズ。　唯、發音、用言ノ語尾活用、助詞等ノ變轉ナド、語法ノ相違ニ關スル事ヲ專一ニ說キタリ。

一原書ノ假名ニ、濁點ナキモノ、又ハ、行文ニ句讀點ナキモノニハ、今、一々加ヘタリ、讀ミ迷ハザラシメムガ爲ナリ。

一同一ノ書ニ、數種ノ古寫本、異樣ノ板本アルアリ、勉メテ善本ニハ據リタレド、尙、遍ク異本ヲ集メテ對照セバ、文字ノ違ヒアラムモ知ルベカラズ、後ノ訂正ヲ待ツ。

口語法別記

目次

口語法別記引用書目……一
口語法別記端書……一
口語法別記……一
名詞……一
代名詞……一
數詞……一三
動詞……一四
五段活用……一四
上一段活用……二三

下一段活用……三一
カ行變格活用……四一
サ行變格活用……四一
書いて、咲いた、凌いで、防いだ等……四六
指いて、出いた等……五三
打つて、勝つた等……五七
取つて、切つた等……六〇
言つて、買つた、言うて、買うた等……六四
死んで、往んだ等……七二
呼んで、飲んだ、呼うで、飲うだ、頼んで、讀んだ等……七五
行つて、行つた……八七
第二第三活用形の名詞となること……八九
連體形が終止形となつたこと……九〇
ワ行五段活用の第三活用形の發音……九六
第四活用形の意味……九七
五段活用の未來形推量形……九八
上一段活用の未來形推量形……一〇五
下一段活用の未來形推量形……一〇九
カ行變格活用の未來形推量形……一一五
サ行變格活用の未來形推量形……一一七
上一段、下一段、カ行サ行變格活用の未來形推量形の「よう」……一二一
未來形推量形の變遷……一二三
書かあず、受けえず等……一二四
書くべい、受けべい等……一二五
現在の語を過去にも未來にも用いること……一二九
命令形のこと……一三一
上一段下一段活用の命令形……一三一
カ行變格活用の命令形……一三四

サ行變格活用の命令形……一三七
命令形の末の「ろ」……一四〇
一種の命令形……一四三
敬意を含んで居る動詞……一四五
丁寧に云う意味の動詞……一五一

形容詞……一五八

形容詞の活用……一五八
形容詞の語根……一五九
よさそう　なさそう……一六一
種々の語を形容詞にすること……一六二
形容詞の「よい」「えゝ」「いゝ」……一六三
形容詞の第二活用形……一六五
かつた　かろう……一六五
からぬ……一六八
「く」を「う」と云うこと……一六八
第一種形容詞の終止形の「し」の「い」となつたもの……一七七
第二種形容詞の終止形の「し」の「しい」となつたもの……一八〇
第一種形容詞の終止形を文語のまゝ「し」と云うもの……一八二
第二種形容詞の終止形を文語のまゝ「し」と云うもの……一八三
第二種形容詞の終止形を「ししし」とすること……一八三
形容詞の連體形の「き」しき」の「い」しい」となつたもの……一八五
形容詞の第二活用形の「よくば」いそがしくば」……一九二
静かな　立派な　綺麗な……一九三
とがつた　たいした　等……一九八

助動詞……一九八

受身の助動詞……一九九
れる　られる……一九九
せられる　しられる　さるゝ　される……二〇七

可能の助動詞……二一一
書ける　讀める……二一二
使役の助動詞……二一七
希望の助動詞……二三一
推量の助動詞……二三七
打消の助動詞……二三九
ず　ぬ　ね……二三九
なんだ……二四三
受けいで　見いで……二四五
ない……二四八
まい　まじい……二五四
過去の助動詞……二六一
敬讓の助動詞……二六九
れる　られる……二六九

なさる　あそばす……二七二
くださる……二七六
いたす　つかまつる　もうす……二七六
ます……二八〇
指定の助動詞……二八五
だ……二八五
じや……二八八
です……二九四
べき……二九九
副詞……三〇三
接續詞……三〇五
助詞……三〇七
第一類の助詞……三〇七
第一……三〇七

か……三〇七
が……三一〇
から……三一二
ぎり　ぎり……三一三
くらい　ぐらい……三一四
こそ……三一五
さ……三一六
さえ……三一七
しか……三一八
だけ……三一八
だけに……三一九
で……三二〇
である……三二二
と……三二四

て……三二六
ても……三二七
ては　では……三二八
ところ　どころ……三二八
とも……三二八
ながら……三三〇
なり……三三四
なり　なら……三三五
に……三三七
にして……三三七
の……三三七
ばかり……三三九
ほか……三四〇
ほど……三四一
まで……三四三

までも……三四四
も……三四四
や……三四七
やら……三四九
より……三五一
わ……三五三
第二……三五五
でも……三五五
ながら……三五七
第三……三五八
ややい……三五八
第二類の助詞……三五九
第一……三五九
が……三五九

から……三六一
けれども……三六二
し……三六三
せ……三六四
ぞ……三六四
そ……三六六
て……三六七
と……三六七
とも と……三六八
とも……三六九
に……三七〇
の……三七〇
のに……三七一
ものか もんか……三七二

ものの……三七一
ものを……三七三
ことを……三七三
よう……三七三
わ　わい……三七三
第二……三七四
たつて　たつても……三七五
たら　だら……三七五
だつたら……三七五
たり　だり……三七七
だつたり……三八〇
つゝ……三八〇
て　で……三八〇
ても　でも……三八三
第三……三八三
ところが　ところで……三八三
第四……三八三
ば……三八三
第三類の助詞……三八六
え……三八六
が……三八九
して……三八九
だつて……三九〇
で……三九〇
でして……三九七
ので　のでして……三九七
でも……三九八
と……三九八

とも……三九九
に……三九九
の……四〇一
を……四〇四
第四類の助詞……四〇五
第一……四〇五
ななあ……四〇五
ねねえ……四〇六
ののう……四〇七
まゝ……四〇八
よ……四〇八
第二……四一〇
え……四一〇
感動詞……四一一

泛く感動するに發する聲……四一一
驚いた時、氣の引き立つた時に發する聲……四一二
氣のつく時、又わ氣を付ける時に發する聲……四一五
物言いかけて強くたしかめるに發する聲……四一七
心に受け入れた意を云うに發する聲……四一八
承知する意に發する聲……四一九
承知せぬ意に發する聲……四二〇
疑い怪む意に發する聲……四二〇
押しのける意に發する聲……四二一
人を呼びかけるに發する聲……四二一
呼ぶに答える聲……四二一
戒めとめる聲……四二二
いま〳〵しく思つて舌打する聲……四二三
詞の組立……四二四

接頭辭……四二四
敬つて云い、丁寧に云い、又わ言葉をうつくしく云うに用いるもの　御　御　御……四二四
「まことの」と云う意を云うもの　眞……四二六
「ちいさい」「低い」「弱い」など云う意のもの　小……四二七
「始めての」の意のもの　初……四二七
數を重ねる意、又わ不定の數を云うもの　幾……四二七
打消す意のもの　不……四二八
「好くない」「わるい」の意のもの　不……四二八
「無い」と云う意のもの　無……四二八
接尾辭……四二九
敬つて云い、丁寧に云い、又わ言葉をうつくしく云うに用いるもの　樣　殿　君　先生……四二九
人を屬り呼び、又自分を卑下して云うもの　奴……四三三
人の複數なのを云うもの　方　達　衆……四三四
人又わ物事の複數なのを云うもの　共　等……四三五
互に仲間である意を云うもの　同士……四三六
人と云う意のもの　手……四三六
順番を云うもの　目……四三六
有樣を云うもの　さ……四三七
其氣味を云うもの　氣……四三七
性質を云うもの　み……四三七
そのように思われると云う意のもの　そう……四三八
其樣子になる意を云うもの　めく……四三八
殊更に其樣子をする意を云うもの　めかす　ぶる……四四一
其樣に思うと云う意味のもの　がる……四四一
出來難い意味を云うもの　かねる……四四二
推量する意を云うもの　らしい……四四四

日　次

そうと疑われる意味を云うもの　がましい……四四五
出來難い意味を云うもの　にくい……四四五

口語法別記引用書目

古事記　元明帝、和銅五年、太安萬侶作、
日本書紀　元正帝、養老四年、舍人親王、太安萬侶等作、
萬葉集　平城朝、大伴家持撰ト云、
佛足石歌　孝謙帝、天平勝寶年中、

平安朝時代

續日本紀　桓武帝、延曆十六年、菅野眞道等作、
日本國現報善惡靈異記　嵯峨帝、弘仁中、僧景戒作、
類聚名義抄　文德帝、淸和帝ノ頃、菅原是善作ト云、
竹取物語　光孝帝、宇多帝ノ頃ノ書ト云、
宇津保物語　同上ノ頃ノ書ト云、
新撰字鏡　醍醐帝、昌泰年中、僧昌住作、
古今和歌集　同帝、延喜五年、紀貫之等撰、
和名類聚抄　朱雀帝、承平末年、源順作、

土佐日記　同帝、承平四年、紀貫之作、
大和物語　在原滋春作ト云、
後撰和歌集　村上帝、天暦五年、大中臣能宣等撰、
多武峯少將物語　同帝ノ頃ノ作ト云、
古今和歌六帖　紀貫之ノ女ノ作ト云、
落久保物語　冷泉帝ノ頃ノ書ト云、
蜻蛉日記　圓融帝、天延年中、藤原道綱母作、
神樂歌　催馬樂　一條帝ノ頃、源雅信譜ト云、
東遊歌　風俗歌
源氏物語　一條帝ノ頃紫式部作、
紫式部日記　同上、
枕草紙　同帝ノ頃、清少納言作、
拾遺和歌集　同帝ノ頃ノ撰、
狹衣　後一條帝ノ頃、藤原賢子作ト云、
和泉式部續集　同帝ノ頃ノ集(丹鶴叢書)

更科日記　後冷泉帝、康平年中、菅原孝標女作、
今昔物語　同帝ノ頃源隆國作、(丹鶴叢書)
新猿樂記　同帝ノ頃、藤原明衡作、
後拾遺和歌集　白河帝、應德三年、藤原通俊撰、
榮華物語　堀河帝ノ頃ノ書ト云、
關白內大臣家歌合　鳥羽帝、保安二年ノ集、
散木奇歌集　同帝ノ頃、源俊頼作、
藤原爲忠朝臣集　堀河帝、鳥羽帝ノ頃ノ集、
木工權頭爲忠朝臣家百首　同上、
大鏡　爲忠ノ子爲業作ト云、
悅目抄　同帝ノ頃、藤原基俊作ト云、
童蒙頌韻　鳥羽帝、天仁二年、三善爲康作、
金葉和歌集　崇德帝、大治二年、源俊頼撰、
極樂願往生歌　近衞帝、康治元年ノ書、
雅亮裝束抄　高倉帝ノ頃ノ作ト云、

和歌初學抄　同帝、嘉應元年、藤原清輔作、(東京帝國大學藏)
梁塵祕抄　後白河法皇御撰、治承ノ頃、
伊呂波字類抄　高倉帝、治承年中、橘忠兼作、
寶物集　同帝ノ頃、平康頼作ト云、
月詣和歌集　安德帝、壽永元年、賀茂重保作、

鎌倉時代

山家集　後鳥羽帝ノ頃、僧西行作、
萬代和歌集　同帝ノ頃ノ集(丹鶴叢書)
千五百番歌合　土御門帝、建仁元年ノ集、
建仁三年仙洞五十首　(續群書類從)
新古今和歌集　土御門帝、元久二年、源通具、藤原定家、藤原家隆等撰、
藤原隆信朝臣集　同帝ノ頃ノ集
發心集　順德帝ノ頃、鴨長明作、
無名抄　同上、
瑩玉集　同上、(和歌古語深祕抄七ノ卷中)

金槐和歌集　土御門帝、順德帝ノ頃、源實朝作、
承久軍物語
平治物語　葉室時長作ト云、
平家物語　後堀河帝ノ頃、藤原行長作ト云、(正保三年、板本)
源平盛衰記　同帝ノ頃、葉室時長作ト云、
明月記　同帝ノ頃、藤原定家作、
定家假名遣　河內前司親行、僧行阿、合作、
遊仙窟　四條帝ノ頃、藤原伊時訓點、
教訓抄　同帝ノ頃、狛近眞作、(內閣文庫藏)
宇鏡集　後嵯峨帝、寛元三年、菅原爲長作、(帝國圖書館藏)
宇治拾遺物語
古今著聞集　後深草帝、建長六年、橘成季作、(元祿三年、板本)
吾妻鏡　龜山帝、文永三年了、
金玉歌合　伏見帝御撰、(續群書類從)
宴曲抄　後伏見帝ノ頃、僧明空撰、

砂石集　後二條帝、德治三年、僧無住作、
玉葉和歌集　花園帝、正和二年、藤原爲兼撰、
假名論語　後醍醐帝、元弘三年、康連校、

南北朝時代

徒然草　後村上帝ノ頃、僧兼好作、
新千載和歌集　後村上帝、正平十四年、藤原爲定撰、
太平記　後村上帝後龜山帝ノ頃ノ作、
平他字類抄　後龜山帝、元中年間ノ書、

室町時代

曾我物語　（貞享四年ノ板本）
義經記　（寛文頃ノ板本）
平家物語劍の卷
幸若　足利義滿、義持ノ頃桃井幸若丸作ト云、
謠曲　應永以後ノ作、
公事根源　應永二十七年、一條兼良作、

下學集　文安元年、東麓破衲作、
中書王物語　一條兼良作、
撮壤集　享德三年、飯尾永祥作、
史記抄　文明九年、相國寺桃源瑞仙作、（寛永三年、活字板、內閣文庫藏）
孟子抄　（寛永活字板、東京帝國大學藏）
廻國雜記　文明十九年、聖護院道興作、
眞宗御文章　文明、明應年中ノ作、
犬筑波集　永正年中、山崎宗鑑作、
閑吟集　大永六年ノ集、（續群書類從）
守武千句　天文九年荒木田守武作、
詠三百首狂歌　（續群書類從）
田村の草紙
辨慶物語
太秦廣隆寺牛祭祭文　（都名所圖會）
人國記

梅津長者物語

倭玉篇（甲）

運歩色葉集（甲）天文十七年ノ書（帝國圖書館藏）

運歩色葉集（乙）（東京帝國大學藏）

節用集（甲）（饅頭屋板、横本）

節用集（乙）（饅頭屋本）

元龜字叢　元龜二年、宗珠藏主作、（帝國圖書館藏）

理慶尼の記　天正十年ノ誌、甲州武田氏一族、

狂言記　續狂言記　拾遺　天正年中、

詠歌之大概　永旣序、聽塵ノ作、（帝國圖書館藏）

節用集（丙）天正十八年、（泉州堺板、東京帝國大學藏）

天正日記　小田原征伐ノ記、

伊曾保物語　文祿二年ノ作、

節用集（丁）慶長二年板（易林本）

江戸時代

おあん物語　慶長五年ノ誌、

昨日は今日の物語　天正、文祿カラ、寛永マデノ話、

徒然草抄　慶長六年、僧安立作、

千代茂登草　藤原惺作、

太田和泉守覺書　慶長十五年ノ書、（改定史籍集覽）

節用集（戊）慶長十六年、（京都板）

倭玉篇（乙）（慶長板本）

おきく物語　元和元年ノ誌、

清正高麗陣覺書　加藤清正ノ臣下川兵太夫ノ記、（續々群書類從）

太閤記　元和三年、小瀨甫庵作、

あづまぢの記　元和四年鳥丸光廣作、（扶桑拾葉集、二十八）

大久保彦左衞門物語　元和八年ノ記、

醒睡笑　元和九年、安樂庵策傳作、（萬治元年板）

戲言養氣集　元和活字、（雪中庵雀志藏）

諸士軍談　大坂冬夏陣ノ記、（改定史籍集覽）

中村座猿若狂言　寛永元年、(蕪石十種)
中村座新發知太鼓　同上、
そゞろ物語　寛永ノ頃、三浦淨心作、
犬子集(狗猵集)　寛永十年、松江重頼作、
可笑記　寛永十三年、淺井了意作ト云、
油糟　寛永二十年、松永貞德作、
新增犬筑波集　(一名、淀川)　同上作、
正章千句　慶安元年、安原貞室作、
吾吟我集　慶安年中、石原未得作、
かたこと　慶安三年、安原貞室作、
倭玉篇　(丙)　(慶安五年板)
むさしあぶみ　明暦三年大火ノ記、淺井了意作、(温知叢書)
をぐりの判官　明暦、萬治ノ頃ノ作、(淨瑠璃本)
東海道名所記　萬治元年、淺井了意作、
四天王武者修行　萬治二年板、(金平本)

天狗羽打　萬治三年板、(金平本)
糸竹初心集　寛文四年板、中村宗三作、
山鹿語錄　寛文五年、山鹿素行作、
古今夷曲集　寛文五年、生白堂行風作、
後撰夷曲集　寛文年中、同上作、
卜養狂歌集　寛文九年、中井卜養作、
諸國盆踊唱歌　寛文年中ノ集、(我自刊我叢書)
西翁十百韻　延寶元年、西山宗因作、
淋敷座之慰　寛永カラ延寶四年マデノ流行小唄ノ集、(新群書類從)
西鶴五百韻　延寶七年、井原西鶴作、
吉原小歌總まくり　天和二年板、(續百家說林)
西鶴一代男　天和二年、井原西鶴作、
鹿の卷筆　貞享二年、鹿野武左衛門作、(元祿五年板)
好色五人男　貞享三年、井原西鶴作、
近代艶隱者　同上作、

武道傳來記　同上作、
懐硯　貞享四年、同上作、
日本永代藏　貞享五年、同上作、
狂歌鳩杖集　天和貞享ノ頃、寶藏坊信海作、
雜兵物語　同上ノ頃、高崎城主松平信興作、
西鶴置土產　元祿六年、井原西鶴作、
合類節用集　元祿十一年、槇島昭武作、
松の葉　元祿十六年、秀松軒作、

類聚名義抄、悅目抄、寶物集、定家假名遣、其外、年代作者に論のある書もあるけれども、姑く、通例傳えて居る所に隨つて置いた。 慥に時代の分らぬ書は、押しあてに列ねた。 ここに擧げたものゝ外に、唯、一二箇所引いたものゝ、直ぐに其書名の所に、年代作者を記しておいた。

平安朝時代の極樂願往生歌、近年、京都の建仁寺中で掘出したもので、其寫眞から採つた。 梁塵秘抄も、近年、和田英松氏が發見して、大正元年八月、佐々木信綱氏の出板したもの。 鎌倉時代の平家物語にゝ、異本が極めて多い、姑く正保三年の板本に據つた。(後の寛文板の義經記、貞享板の曾我物語も、同樣である)。 假名論語ゝ、古寫本卷物で、(三卷、缺本)大槻文彥の所藏である、康連ゝ三善氏の人であろう、卷頭の貼紙に、大學頭菅原在茂とあつて、高山寺の朱印がある、在茂は、文治前後の人である、在茂の寫したのを、康連が校したとすれば、此書は、鎌倉時代の初のものとも見られる。 室町時代の平家物語劍の卷ゝ、中に、曾我物語の事があるから、姑く其次に置いた。 孟子抄ゝ、作者年代が知れないが、史記抄と同時のものと思われる。 運歩色葉集の乙ゝ、以から加までで、異本である。 狂言記の事に就てゝ、狂言ゝ、謠曲より古いもの(脇師を「あど」と云うなど)のようだけれども、一旦、中絶して、豐臣氏の頃、再興したものらしいから、用語ゝ、天正頃のものであろう、因て其頃のものとした、大藏流と鷺流のものから採つた。 詠歌之大概ゝ、定家のものに注釋したもので、中に宗祇などの名がある。 伊曾保物語ゝ、文祿二年に、葡萄牙人が和譯して、横文字で書いたものを、新村出氏が、假名交り文に直して、明治四十四年六月に刊行したもの。 江戸時代の醒睡笑ゝ、寛永十九年の寫本で、大槻文彥の所藏のものからも採つた、但し、萬治元年の板本ゝ、一卷と二卷を入れちがえてある。

口語法別記端書

世の開けた初に、人に、言葉があつて、その後に、文字が出來て、言葉を書き取ることゝなつた。その時わ、書取つた言葉わ、卽ち、文章で、言葉と文章とわ、同じである。そうして、言葉というものわ、年を歷るに隨つて變わるもので、言葉が變われば、文章も變わつた、今、奈良朝以前の文と、平安朝の文とを見くらべれば、其姿の違つて居るので知られる。然るに平安朝の盛んな頃わ、文學も、盛んであつて、文を書き、歌をよむのが、自然と、一つの藝のようになつて、師匠が出來て、學ぶと云うようなことゝなり、言葉の方わ、年が立つて、變わつて行くけれども、文章わ、平安朝の盛んな頃の言葉で書くことゝ固まつて、終に、口に云う言葉と、文に書く言葉とが、二道となつて來て、鎌倉時代になつてわ、話し言葉と、文章言葉、卽ち、口語と、文語とが、甚しく分れた、それから、又、數百年の間、口語わ、變わりに變わつて來ても、文章わ、やはり、多く、平安朝時代の言葉で書くことゝなつて、口語のまゝに文を書くと云うことわ、まず、なかつたが、江戸時代になつて、口語で書いた書物も、民間に段々と出て來た。

鎌倉時代以後、七百年の間、大名と云うものが、全國にあつて、銘々に、其領分に境を立てゝ居て、江戸時代にわ、其地方の方言を國手形などゝ云つて、其領分の人だと云うを證する爲に、改めさせなかつたようなこともあり、其上交通も、不便であつて自然と行きかいも少ないような譯であつたから、地方〳〵の口語が、まち〳〵に變わつて居て、十里二十里も隔たれば、遠つて、甚しいのわ、出羽奥州の人と、九州の人とわ、同じ日本人でありながら、話をしても、互に分らぬようになつた。　それであるから、我が國言葉にわ、文語にわ、一つに定まつたものがあるが、口語わ、全國どこも方言であつて、東京の言葉わ、東京の方言で、京都の言葉わ、京都の方言で、其外、國々、皆方言をつかう。　そこで、全國同じに通ずる口語を立て、規則を定めねばならぬ。　扨、口語の目當とするものを、何と定めようか、邊鄙の方言わ、採ることわ出來ぬから、東京方言か京都方言かにせねばならぬ。　東京わ、今わ、皇居もあり、政府もある所で、全國中の者が、追々、東京言葉を眞似てつかうようになつて來て居るから、東京言葉を、日本國中の口語の目當とするがあたりまえのことゝ思う。　しかしながら、東京言葉と云つても、賤しい者にわ、訛が多いから、それは採られぬ。　そこで、東京の教育ある人の言葉を目當と立て、そうして、其外でも、全國中に廣く行われて居るものをも酌み取つて、規則をきめた。　かようにして出來たのが本書の口語法である。　臺灣朝鮮が、御國の内に入つて、其土人を御國の人に化するようにするにわ、御國の口語を教え込むのが第一である。　それに就いても、口語に、一定の規則が立つて居らねばならぬ。　口語法わ、實に、今の世に、必用なものである。

○奈良朝以前にわ、言葉に、伸び縮みわあつて、「まもり(守)が麻毛良比」(古事記、神武の段)「かくす(隱)が可苦佐布」(萬葉集、一)「ゆく(行)が由可久」(同十四)など、伸びたり、又「いかにいふ(如何云)が以柯儞輔」(繼體紀)「うゑて(飢而)が惠而」(推古紀)「ひきいれ(引入)が比岐例」(皇極紀)、あまおり(天降)が安母理」(萬葉集、二)「おもふな(勿思)が母布奈」(同、六)「きえのこり(消殘)が氣能己里」(同二十)など縮んだりしたものわなか〳〵多く見えるけれども、まだ音便と云うものわ、殆んど無かつたようにおもわれる。

古事記の神武の段に、「かみかせ(神風)を、加牟加是」とし、萬葉集、十五に、「まをす(申)を、母に麻于之て」、佛足石歌に、「捧げ麻宇佐牟」、萬葉集、十八に、「まけ(設)を、麻宇

氣」とあるなどわ、音便であろうか。

音便の盛に起つたのわ、平安朝以後の事で、嵯峨帝の弘仁中の靈異記の序の釋に、「價、ックノウ」、「儁、ソコナウ」、「近江の石山寺に藏する文德帝の天安二年の大智度論の中に、「次第」の字に、「ツイデ」(下二段活用の「次て」「次つ」)の音便、萬葉集、二十喩族歌に、「都藝豆氐」と振假名がしてあり、文德帝清和帝の頃の類聚名義抄に、「媚、ウックシウス」、「啄、ツイバム」、「班、ツイヴ」、などゝあつて、山城の京の初の頃から、音便が見えて居る、是れが、言語の變遷の初である、どうして、音便と云うものが起つたかというに、石原正明の年々隨筆に、

萬葉集、續日本紀などに、かなのたがへる所はなし、かくて、奈良の京に、まがふ所なかりしを、今の京となりて、言便といふ事、いできたり、(いつの比よりと、いふ事、考なしが、やうの事、いつよりと、きはやかに知るべきにあらず、もしは、真觀の比ゝり、漸有しにや、)言便といふは、いひ易きやうに、まげていふ事にて、よろづの訛言、みな、これよりいでくるなり、さるは、其頃の人、物をいふに、容止をおもひて、口を大にひらき、唇のしば〳〵動くを、威儀なしとして、人がらをつくろひ、さて、いひ易きやうに、物いふほどに、いゐえゐおをも、まがひて、わかりがたく、ひふほも、いうおときこゆる樣になれりしなり、延喜天暦のころよりは、ひたすら、其定なりしかば、かなのたがひ行く源は、此時より觸を濫へたり。

西洋の言語學說にも、このようなことが云つてある、それもそうであろうが何にせよ、世の中が開け進むに隨つて、人のからだも、考えも、いそがしくなり、舌、唇などを多くつかわないで、早く物を云おうとして、成るべく、發しやすい音をつかうようになつたから、音便が多くなつたのであろう。

天治本新撰字鏡、　婗、小兒、知比佐伊(小き)人、
古今集、　典侍、あまねい(洽き)子、
後撰集、　內侍、だひらけい(平けき)子、
宇津保物語、貴宮卷、　粉、しろい(白き)もの、
催馬樂、淺緣、　淺緣や、己以(濃き)花田、
類聚名義抄、　永、ナガウ(ク)ス、　固、カタウ(ク)ス。
竹取物語、　うつくしう(く)おはする。
神樂歌、早歌、　最將奈加宇(長く)て、
催馬樂、紀伊國、　風しも不伊(吹き)たれば、

同、高砂、今朝左伊(咲き)たる初花に
神樂歌、早歌、巾子於止以(落し)つ。
宇津保物語、菊の宴、おぼしめい(召し)て、のたまはするにこそはあめれ。
同、俊蔭、加茂に詣でたまう(給ひ)たりしかば。
催馬樂、酒飲、酒をたうべて、たべ惠宇(醉ひ)て、
同、蟋蟀、木の根を掘り波牟(食み)で、
土佐日記、つん(摘み)だる菜、

又、語をつゞめて云うことも出て來た。
竹取物語、え知らで(すて)斯くいふ。
同、迎へに、人々參で來んず(來むとす)、

しかし、宋雀帝以前の書物にわ、音便わあるが、假名遣わ、一定して居ると云われて居る。然るに、村上帝の天曆の頃から、假名遣も追々變わつて來た、天慶の平將門、藤原純友の亂などが、響いたのであろう。動詞の活用の變わり(音便で變わつたのもある)も、此前後から、少しずつ見える。
類聚名義抄、渝、カヘル、蹈、クエル(下二段活用の「蹴うる」の變)、

落久保物語、二、只今の太政大臣の尻はける(蹴ゑる)の約)とも、此殿の牛飼に、手觸れてむや。
蜻蛉日記、中、夢をも佛をも、もちいるべしや、もちゐるまじや。
紫式部日記、上、をり〳〵の有さまにしたがひて、もちひんことのいとかたかるべし。
源氏物語、竹川、はぢらひて、おはさうする(おはさむとする)いとをかしげなり。(「おはす」に、四段活用がある。と認めてである)、
和泉式部續集、上、おとせう(爲む)といひたる人の、おとせねば、

此頃の源氏物語、枕草子、其外、物語、日記、草子などに、音便のあるのわ、擧げ盡しがたい。是から後の書物も、皆そうである。
後三條帝、白河帝の頃から、音便わ、勿論、假名遣も、甚しく變わつて來て、動詞の活用の變わりも、ます〳〵見える。六衛府や、檢非違使に、諸國の武士を召使われ、前九年、後三年の戰から凱旋した東國の武士の、京に入込んだのも多かろうし、後三條帝の時から、藤原氏の權力が衰え、白河帝が、院の北面の侍に、諸國の武士を召されなどして、源平等の武士の勢が盛んになつたなどから、京

都の言葉に、變化が起つたのであろう。それから保元平治の亂となつて、ま
す〳〵變わつて來たに違いない。此頃から、動詞の活用の連體形を、終止形
にすることも多くなつて來た。

藤原爲忠朝臣集、時鳥、待ちつくしてぞ、朝いねる(いぬる)聞けといさめて、
軒に鳴くなり。

木工權頭爲忠朝臣家百首、いかにせむ、かくれる(かくるゝ)鷹の、見えがた
く、つれなき戀に、さはく心を。同、猫の緒に、かゝりし簾の、はさまより、
ほの見し人を、ねう(寐む)とこそ思へ。

康治元年、極樂願往生歌、憂シヤ憂シ、厭ヘヤ、厭ヘ、假初ノ、カリノヤドリヲ、
イツカ別レウ(別れむ)

今昔物語廿六、下、何ト心モ不得思ユル(思ユ)見返テ、恐々見レバ、同、三十、
簾ノ内ニ立テ聞ムトスル(トス)夜ナレバ、人モ无シ。

源平の興亡から、鎌倉となつて、言語に變動の起つた事わ、めざましいもので
ある。そうして、此頃から、文の掛り結びの法則が崩れ始めた。

ひらいて(開きて)　さはいで(騒ぎて)　ながいて(流して)

うつて(打ちて)　つくつて(作りて)　むかうて(向ひて)
むかつて(向ひて)　しんで(死にて)　しのうで(忍びて)
さけんで(叫びて)　ようで(讀みて)　かこんで(圍みて)
さかえる(榮ゆる)　からめる(搦むる)　やぶれる(破るゝ)
あづからう(預らむ)　かくさう(隱さむ)　おきう(起きむ)
かたぶけう(傾けむ)　みてう(滿てむ)　まゐらせう(參らせむ)
舟に、籌をな、ともいそ(燈しそ)　三日に過ぎ(過ぐ)まじ。
物を負うたり、だいたりして、　六十六ヶ國に別れた(たる)なり。
最後の御供で(にて)候へば、　牛の角文字、ずぐな(なる)文字、
說法をさせ(せさせ)まゐらすべし。
此舟にうちのせてのぼりたう(たく)は候へども、
牝鹿をば、射いで(射で)ぞおとしける。
寶物集、發心集、金槐集、平家物語、古今著聞集、砂石集、(くわしい事わ、後に云う)、
南北朝時代となり、太平記、二十一、天下時勢粧に、「公家の人々、いつしか言ひも
習はぬ坂東聲をつかひ、云々」とあり。「かたこと」に、「みづからのことを、をれと

いふは、尊氏公の、世の中を心のまゝにしたまひつる比より、別してはやり出で侍り」などゝあり、「おれ」わ「おのれ」の略、幸若、史記抄に見える、後の代名詞の所を見よ。）室町時代に、戰爭が續き、應仁の亂に、全國の兵が、京都に入り亂れた。此頃から、言葉が一段と變わつた。文の掛り結びなどの、全く崩れたのも、室町時代からである。

すてい（捨てよ）　こい（來よ）　せい（爲よ）　みう（見む）
きう（着む）　こう（來む）　いなう（往なむ）　しなう（死なむ）

今日は、何方へぞ、出やう（出でむ）と存ずる。
甘いをすく衆へは、甘いで進じやう（進せむ）ず。
歌、一首、詠うで見やう（見む）か。
外ノ事ハ、ワルイ（惡し）ト心得、
嘸事で、尋ねやう（尋ねむ）ず。
後難が口惜しい（口惜し）
臆せいで（臆せで）取つて呑うであれ。
暇乞ヲ申サイデ（申サデ）罷歸ラレ、
終ニ、殺シハセラレナンダ。
最前から、氣がつかなんだ。
何事があると問うた（たり）
左へ折つた（たる）烏帽子なり。
韻が、三句ニ、フメ（履まれ）た（たり）
爰から讀め（讀まれ）候。
天下は、我が物ぢや（である）
冠ノ緒チャゾ。
我が嫩や（である）と號し、いつきかしづき、
遠國に隱れもない大名です（でおはす）
義經記、曾我物語、幸若、史記抄、閑吟集、守武千句、狂言記（くわしい事わ、次に云う）、

それから、織田氏、豐臣氏の世を歷て、江戸時代と、遷りかわつて來たが、鎌倉室町時代に變わつた言葉を、そのまゝ傳えて、甚しい變わりわない。唯、其時代に、「忍うで」「賴うで」などゝも云つたのが亡びて、今でわ、多くわ、「忍んで」「賴んで」となり、「流いて」「隱いて」などゝ云つたのが亡びて、多くわ、元の「流して」「隱して」となつた。

東國の方言わ、古いところでわ、萬葉集の東歌、防人歌や、東遊歌、風俗歌などに、少しわ、見えて居るが、其後わ、書いた書物がないから分らぬ。江戸時代になつて、書物に書かれるようになつて、變わり目の、著しく現われたものわ、

飽きる（飽く）　足りる（足る）　借りる（借る）
案じる（案する）　判じる（判ずる）　復さない（復せぬ）　解さない（解せぬ）

起きよう、(起きむ)　受けよう、(受けむ)　こよう、(來む)　しよう、(爲む)
起きろ、(起きよ)　建てろ、(建てよ)　こう、(來よ)　しろ、(爲よ)
書かない、(書かぬ)　落ちない、(落ちぬ)　遂げない、(遂げぬ)　こない、(來ぬ)
行くべい、(行くべし)　やめべい、(止むべし)　こべい、(來べし)　しべい、(爲べし)
書いてる、(て居る)　讀んでる、(で居る)　それだ、(である)　これだ、(である)
いらつしやい、(入らせられよ)　なさいまし、(なされませ)
これなら(ならば)よかろう。　昨日行つたら、(たれば)居なかつた。

などである。　しかし、是も、古くから行われて居たのか、何とも分らぬ。

○東國の言葉わ、昔わ、京都の人からわ賤しめられて居つた、源氏物語の宿木、東屋などに、東國の言葉を、「あづま聲」と云い、平家物語に、齋藤實盛の言葉を、「坂東聲」と云つてある、拾遺集に、「あづまにて、養はれたる人の子は、舌だみてこそ、物は言ひけれ」とあるのでも分る。　然るに、東國武士の勢が盛になり、鎌倉室町の世に、東國言葉が、京都言葉を襲つて、江戸の世となつて、又、新に、江戸言葉が、出來て、今でわ、江戸言葉が、日本の口語の目當となるようになつた。

江戸わ、もと、空漠とした地に、新に、町を開いたものであるから、土地の者も居たろうが、畿内、東海道筋の町人が、多く集つて來たものであつて、江戸のわ、その初わ、甚だ混沌としたものであつた。　然るに、一方に、武士といふ者があり、戰國時代の餘習で、旗本奴の大小の神祇組、又わ、男達、町奴の六方組、白柄組、などいうものが、盛に出て來て、是等が、關東の荒くれた氣風を、言葉の上にも及ぼして、上方言葉のなまぬるいものを變じて、強く急なものとして、芝居の荒事狂言の上にも用いられ、それが廣がつて、遂に、一つの江戸言葉というものが、成立つたものと思う、是が、元祿頃に至つて、一定したので、つまり、關西と關東との言葉が、雜つて出來たものである。

京都の言葉わ、東西南北に廣がつて、遠くなるに隨つて、段々に變わるが、その變り目わ、色のぼかしのようで、はつきりと境目が分らぬが、江戸言葉は、四里四方の内に限つて、其境を出ると、四方は、元の武藏の言葉であるから、海中の島のようである。　これが俄に出來た都であるからである。

しかし、江戸時代にわ、同じ江戸言葉の中で、町人言葉でも、山の手言葉、下町言葉、神田の職人言葉、吉原言葉、佃島言葉など、それ〴〵違つて居た。　武家の言葉の方でも、幕府の旗本言葉、御家人言葉、又わ、諸國から勤番する者わ別とし

て、諸大名の江戸定府の家來の言葉などが、又異なつて居た。明治の世となつて、それが、大分混合して、諸國の侍などが、集つて常住するようになつても、皆、江戸言葉に化せられるようになり、そうして漢學書生が、多く、政府の官員となり、學校の教員となつたから、漢語を遣う事が大に行われ、漢文の訓點書き下しの文語などが、口語にまじるようになり、遂に、今の東京言葉となつたのである。

○信濃越後と、美濃飛驒越中との間に、南北に亙る御嶽系の大山脈で、言葉わ、大凡、東西に分れて居る。萬葉集の東歌と云うのも、遠江信濃から東である。今の口語も、此山脈で分れて居ること、次のようである。

東	たかう	やしなう	起きよう	受けよう
西	たゝこう	やしのう	起きう	受きよう
東	言つて	買つた	起きろ	受けろ
西	言うて	買うた	起きい	受けえ
東	高く	嬉しく	い丶	
西	高う	嬉しう	え丶	

東	書かない	書かない	書かなかつた
西	書かん	書かいで	書かなんだ
東	月だ	花だ	
西	月じや	花じや	月や　花や

尙、細かいことわ、まだあるが、大體わ、右のようである。但し、「起きよう」「受けよう」などわ、西わ、畿内中國まで及んで居るし、「たゝかう」「たゝこう」「い丶」「え丶」などは、全國まざつて居る。

○東國の口語の「言つて」「買つた」「月だ」「花だ」が、鳥取縣、島根縣に行われ、「起きろ」「受けろ」が、筑後、肥前、肥後に行われ、「書かない」「見ない」が、備後、出雲、日向にも行われて居る。これわ、鎌倉室町時代に東國の武家が、西國の守護地頭となつて、移つて住んだものもあり、江戸時代にわ、大名の國替と云う事があつて、家來を殘らず引連れて、諸方え移つて、それらからして、口語を移したこともある。これらの事わ、よく研究したらば、面白い事であろう。

○名詞、代名詞、數詞、副詞などわ、昔も、今も、東國も、西國も、語わ變わつても、文法の上の變遷わ殆ど認めるものがない。

口語法別記

名詞

【二三】「月々、拂う、」「時々、來る、」「さま〳〵、ある、」などわ、變わつて副詞に用いられるのである。

【二六】名詞にわ「仰せ」「思召」「お出まし」「お目見」「御意」「拜謁」など丶、もと〳〵、敬う意味を含んで居るものがある。

代名詞

【三九】【四〇】同輩以上、以下、としたのも、唯、およその區別である。

「この」「その」「あの」「どの」の意味わ、次の指示代名詞の(四五……五〇)(五六)に云う。

對稱、他稱の複數を云うに、同輩以上、同輩に「皆さま」「皆々さま」「皆さまがた」「皆さん」「皆さんがた」同輩同輩以下に「皆」「みんな」と云うがある。

不定稱が、「も」に伴つて、「どなたもいらつしやいませぬ」「だれも來ない」と云えば、

「皆」の意となる。

他稱の「このひと」を「このひと〳〵」と、重ねて複數に用いることがある「そのひと」「あのひと」、不定稱の「どのひと」も、同じように用いられる。

自稱に、尙「手前」「拙者」「自分」「わし」「おれ」「おいら」「おら」などがあり、對稱に「御前」「貴公」「貴樣」「てまえ」「其方」などがあり、他稱に「こいつ」「そいつ」「あいつ」「きやつ」、不定稱に「どいつ」などもあるが採らぬ。

○口語の代名詞の、本書に採つたもの、採らぬもの、共に、古書に見當つたものを、次に擧げて置く。

○室町時代

義經記、忠信吉野山合戰の事、　鎌倉殿の弟判官殿のわたらせ給候よし承て、よしの丶ゑゆぎやうこそ、まかりむかひ候へ、わたくしらは、何のねこん候はねば、一まづ、をちさせ給ふべく候。

狂言記、二人袴、　私が、呼ふで參りませう。　同、宗論、　私は、あの者の連でござる、私にも、何卒、宿をかして下されい。

江戸時代

醒睡笑、七、　わたくしは、高野ひじりに、あらねども、おいにおいたる、ゆゑにめさずや。

○室町時代

幸若、鞍馬出、　聲ばかりに威さんと、おれ(對稱か)は〳〵、とぞ威しける。

史記抄、六、一二　イカサマ、ヲレハ、サワ不聽ザッタゾ。

閑吟集、　ぬしあるをれを、何としようか。

運歩色葉集(甲)　己、ヲレ、

江戸時代

醒睡笑、八、　今度のをどりが、うらは、一向、氣にあはなんだ。

雜兵物語、上、挾箱持、　五貫目斗の玉だつけが、おれが鼻先へ當て、云々、同おらが家中では、云々、喧嘩口論は、かたく御禁制だ。

後撰夷曲集、七、百首歌の中、　取りなりを、見るとわしらが、癖として、つかみつく程、君ぞ戀しき。

雜兵物語、上、沓持、　わつちめは、沓籠御許され申て、沓袋をせおひ申した。

○室町時代

【三九】【四〇】　代名詞

謠曲、田村、いかに、是なる人に、尋ね申すべき事の候、こなた(自稱)の事にて候か、何事にて候ぞ。

閑吟集、新茶のちやつぼよ、なふ、いれてののちは、こちや(我濃茶)ぢらぬぢらぬ。

狂言記、二人大名、其方がいそがば、こちもいそぐ。同、鹿狩、なう〳〵、御坊、云々、こなた(自稱)の事でござるか。

○室町時代

史記抄、十、四一 ソチガ云ワズトモ、我モサ思タゾ。

孟子抄、十一、三 ソチガ云ヤウニ、水ハ東西ヲバワケヌガ、上下ノヘダテハ有ゾ。

狂言記、鍋八撥、先へ來た某(自稱)をのけうより、そちのけ。同、宗論、聊爾な申事ながら、こなた(對稱)は、どれからどれへござるぞ。同、吃、とかく、そなたにあきはてた。同、武惡、おまへ(主人を指す)の御太刀を貸さつしやれませう。同、鹿狩、さあ〳〵、ござれ〳〵、先づ、おまへ、先へござりませう。身共をば、旦那に取らしやれて下されい、何がさて、おまへ樣さへもつてならしやれて下さるならば、私が爲には、一の旦那でござる。

江戸時代

昨日は今日の物語、そなたを見れば、むねがわるい。

醒睡笑、一、そなたは、それではなきか、聖、いや、そちをば夢にも知らぬ。同、四、こなた(對稱)さまのそくさいにあるこそ、道理にて候へ。

古今夷曲集、九、勝尾寺に、義空とて、狂歌の上手あり、彼には及ばじと、人のいへりければ、我歌に、などてあなたが、かちを寺、のどぎくぎくう、させてみせます。

諸國盆踊唱歌、讃岐、八島山には、大谷小たに、なぜにこなた(對稱)に、ながないぞ。

淋敷座之慰、吉原、しよくりしよぶし、そちと、こちとで、二世迄そをふ。

雜兵物語、下、夫丸、お侍衆をはじめ、こなた(對稱)なども、具足を着なされ。

同、下、又、そなたや、おれらが樣な馬取づれでさへ、同、上、馬印持旗差、にし(對稱、主の訛)は、其通りか、おれも、袋に二つ入たを、一つをば竿につばめて、一つは脊中に引付た。

○平安朝時代

宇津保物語、藤原君、　おほかたは、女の、などかくは申す、くやつ、又しばりかけよ。

鎌倉時代

宇治拾遺物語、行綱ふぐりをあぶる段、　かたすみにかくれて、きやつに、かなしうはかられぬるこそとて、

室町時代

義經記、一、鬼一法眼の事、　きやつは、ふしぎの物いひかな。

幸若、烏帽子折、　きやつばらは、椽の下へ隱れうぞ。

史記抄、六、二七　キヤツモ、ナントシタヤラウ。

狂言記、鹿狩、　あいつ、呼びよせ、なぶらうと存ずる。　同、靭猿、　申し〳〵きやつが申しまするは、

江戸時代

醒睡笑、五、　にくいやつかな、あいつに、今度から、せうやうがある。

鹿の卷筆、一、ばんどう屋才介、　あいつらが、一二を爭ふて、四かねるやつでない。

雜兵物語、上、挾箱持、　あいつめは、他の人數を相手にして、おめ〳〵としたつらで、堪忍したといつても、

○室町時代

狂言記、墨塗、　案内とは、どなたでござる。　同、吟賀、　ありや、どなたぢや。

【五〇】　指示代名詞の不定稱が、「も」に伴つて、「どれもよい」「どこもふさがつて居る」など云えば「皆」の意となる。

不定稱で、丁寧に、「いずれでもよろしうございます」、（物事に）「いずれに住みましても」、（場所に）「いずれえも向きます」、（方角に）など云う「いずれ」と云う語もあるけれども、「どちら」と云う語が、どれにも通う。

近稱に、「こいら」「こゝいら」、中稱に、「そいら」「そこいら」、遠稱に、「あいら」「あすこいら」、不定稱に、「どこいら」と云うのもあるが、用いぬがよい。

○室町時代

史記抄、十、七　司馬遷ガ、アツチ、コチ、アルイタ時ノ事ゾ。

孟子抄、一、三　軍兵ヲ用テ、アチヘハ國ヲトリ、コチヘハ國ヲトリスル程ニ、

江戸時代

雜兵物語、下、玉箱持、長ひ棒の兩方に玉箱をひつかけた所で、あつちへあたり、こつちへつかへて、一足もあよばれない。

○平安朝時代

梁塵秘抄、二、佛歌、ほとけは、どこよりか、いでたまふ。同、二、四句神歌、神分、熊野へまいるには、きち(紀路)といせぢ(伊勢路)の、どれぢ(か)し、どれとを(し)。同、二、佛歌、釋迦の住所は、どこ〳〵ぞ。

室町時代

義經記、判官北國落の事、どこ山伏と、とはんずる時は、どこ山伏とか、いはんずる。

史記抄、十、三五　ドレモ、眞實ノ處ヘハイカヌゾ。同、六、一五　ドコカラハ、イカホド、アソコカラハ、イクラ出セ、ト云コトゾ。同、六、二八　ドチヘイカレタトモ、マダ不見ホドニ、

孟子抄、七、八　ドレデマレ、不仁デ、天下ヲ取タト云事ハ、アルマイゾ。同、七、一五　我ハ、王者ニ成ウト思ハズトモ、道ヲダニ行ハヾ、民ガ、ドチヘガナ、

行ト思フ時分ヂャ程ニ、擧テ歸服セウゾ。

狂言記、二人袴、必ず、どちへもござるな。同、靱猿、どれへぞ、野遊山に出うと存ずる。同、宗論、いかさま、どこやらで聞いたやうな。

江戸時代

昨日は今日の物語、どこらがいとうござる、ととひければ、おびしよりがいたいといふ。

醒睡笑、五、いかがして、呑みたるやらん、つらもどこも、赤漆にてぬりたる風情なるが、同、七、情(じやう)のこはきは、どちもまけまい。

正章千句、十、雪、馬つきは、どこからどこと、さだまりて、

東海道名所記、田子の浦、浦浪いと白く立て、どこもかも、一面に白く、

雜兵物語、下、並中間、どこの人數だかしらない。

【五四】【五五】「いつ」「なに」が「も」に伴つて「いつも居る」「なにもない」「なにも知らない」などゝ云えば「すべての時」「すべての物事」の意となる。

「いつ」を「いつ〳〵」と重ねて、複數を示すことがある。

「なに」(何)を「なん」と云うわ、平安朝時代の悅目抄に「いま一字を、かな、たらずして、

【五四】【五五】代名詞

なん〳〵としてや、してよ、など、せんなき假名を具する也」。重蒙頌韻に「那、ナン、ノ、」鎌倉時代の假名論語、述而篇に「じんをもとめて、じんをえたり、又、なんのうらみかあらんや。(求仁而得仁、又何怨)」室町時代の史記抄十、五九「ナン十代ト云テ、元朝マデ封ゼラル、ゾ」。狂言記、宗論「そなたに、意見がしたうおぢやるわいの、なんでおぢやるぞ」。そなたは、なんとして來たぞ」。江戸時代の醒睡笑、三「あれほどおそろしき所に、なんとして、ひとりはすまれん」。同、四「そちは、えならぬ時宜をいふ、なんのいはれぞ」。など〻見える。

「何」「どこ」と云う不定の指示代名詞に並べて「か」と云う語を用いて、「何もかも、なくなつた」「何だのかだのと云う」「何やかやで、いそがしい」「何とかかとかしよう」「何のかのと云う」「どこもかも、一面に花だ」など用いられる。この「か」わ、古い他稱代名詞の「何がしくれがし」の轉か、又わ「彼(かれ)」であるか、又わ疑う助詞の「か」であるか、分らぬ。室町時代、史記抄、十四、八「逗撓トハ、ナンヂヤ、カヂヤト云テ、戰モセイデ、ヌケアルイタナリゾ」。同、十四九「部伍トハ、軍ニ、部ガイクツ、其部ゴトニ、校尉イクタリ、ナニイクタリ、カイクタリ、ナンドヽテ、定テヲクモノゾ」。狂言記、吟賀、「たゞ、何事もか事も、許したまへや」。江戸時代、東海道名所記、田子の浦、「浦浪いと白く立て、どこもかも、一面に白く、」

【五五】 室町時代、史記抄、四、六四 八州ト云ハ、ドレ〳〵デアラウゾ、六國ニ、ドレヲソヘウゾ。

【五六】 此「こ」「そ」「あ」「ど」わ、一音で、指示代名詞である。

こゝに箱がある、この中に、何があるか。

生徒が卒業した、その兄も卒業した。

西南の役は、明治十年である、あの時に、西郷隆盛が死んだ。

英國からも、米國からも、大使が來た、どの國の大使も、人物だ。

しかし、助詞の「の」に伴つてばかり用いられる、そうして「の」が附いて一語となつて、下の名詞を指す意味に用いられる事が多い、又「の」の附いて一語となつたものわ、代名詞でわないが、姑く、かように說いて置く。室町時代、義經記、三の口の關をとをり給ふ事、「どの山を、どのはさまにかゝりて、ゆかんずるぞ」。

○「このような」「そのような」「あのような」「どのような」と云ふと同じ意味で、「こんな物」「そんな事」「あんな所」「どんな人」など云ふ事があり、その名詞を略して、「子供の育ちが、こんな(育ち)になつた」「騷ぎは、そんな(騷ぎ)でもあるまい」などゝも用

いる、此事わ、後の形容詞の處(一六七)でも說く。

數詞

【五九】「ふたつ」を「ふたッつ」とも云う。

物事を、一つ〳〵に數えて呼ぶのに、次のように云う事もある。

ひい　ふう　みい　よう　いつ　むう　なゝ　やあ　こゝ　とう
ひと　ふた

【六二】此外に、戸籍、會計などに「壹(一)、貳(二)、參(三)、拾(十)」などと書くことがある、入れ筆を防ぐ爲である。又「萬」を「万」と書くことがあり「零」「〇」もあり「百」を、「一束」と云うこともある。

數を呼ぶに、次のように云ふことがある、聞きちがわせぬ爲である。

二百四十番　四百七十九圓

【六四】「なのか」を「なぬか」とも云う。

【七一】又「三分一」「四分一」などゝも云い、三分の一を「みつひとつ」又わ「三が一」とも云い、四分の一を「よつひとつ」「よつ割りひとつ」又わ「四か一」と云い、三分の二を「みつ割りふたつ」とも云う。

【七三】「割」わ、或る數の十分の一を云い「分」「朱」わ「割」の十分の一を云う。

【七四】「倍」と云い「一倍」と云うわ「二倍」と云うと同じである「二八、十六、四九、三十六」など云うわ、八を二倍し、九を四倍するを云う。

【七五】「一」の組「二」の鳥居「三」の橋「四」の側「五」の卷「卷の六」「日本一」「大正二年四月十五日」など云い、又「初等」「中等」「高等」「甲」「乙」「丙」「丁」などもある。

【七七】(六四)を見よ「いちにち」を「いちじつ」又わ「ついたち」(朔日)とも云い、一箇月の終の日を「つごもり」(晦日)又わ「みそか」(三十日)と云うことがある。

【七八】「なに」を「なん」と云うことに附いてわ(五四)に云つておいた。

【八一】紀元二千五百七十一年を「二五七一年」と云い、二百八番地を「二〇八番地」と云うこともある。又「七八番地」と云えば、七番地八番地のあたり、と云う意味ともなり、(「二三日」「四五度」など云うも、同じ意味である)七番地と八番地とを合せて云う意味ともなり、(「明治三十七八年」など云うも同じ意味である)七十八番地の意味ともなつて、紛れやすい。

又「二七の日」「四九の日」など云うわ「二日と七日と、十二日と十七日と、二十二日と二十七日と、」「四日と九日と、十四日と十九日と、二十四日と二十九日と」の事

である。

動詞

【八八】 動詞の活用わ、文語にわ、四段、上二段、上一段、下二段、下一段、カ行變格、サ行變格、ナ行變格、ラ行變格、の九種があるが、口語でわ、四段が、五段となり、上二段が、上一段と一つになり、下二段が、下一段と一つになり、ナ行變格、ラ行變格が、五段となつて居るから、九種が減つて、五種となつた。

【九〇】 口語の五段活用わ、文語の四段活用と、大きな變わりわない、唯、文語の未來の形の「書かむ」「指さむ」が、口語でわ、全國、殘らず「書こう」「指そう」すべて、動詞の未來の形の變わつた事わ、(一一八)の處で云う、と云うようになつたから、これを活用として加えて、五段活用としたのである。

○文語のハ行四段活用の「は」「ひ」「ふ」「へ」を、口語でわ、全國、すべて「わ」「い」「う」「え」と云う。そこで、未來の形の「思おう」(思はむ)「買おう」(買はむ)などを加えて「わ」「い」「う」「え」「お」をワ行として五段活用とした。

思おもわ　おもい　おもう　おもう　おもえ　おもお　(おもはむ)　文語ハ行四段活用
　　口語ワ行五段活用

「は」「ひ」「ふ」「へ」「ほ」わ、古くから「わ」「ゐ」「う」「ゑ」「を」、又わ「い」「え」「お」と通わせて居たのわ、次のようである。(體言なのわ、擧げぬ)ハ行の音の子音わ、古くわ、唇音の「f」であつた、ワ行の音の子音の「w」も、唇音であるから、通わせたのである、それが「h」となり、又、「i」「e」「o」(「い」「え」「お」)となつたのわ、子音が失せて、母韻ばかりとなつたのである、ワ行の「wu」わ、ア行の「u」となつても、やはり、唇音であることを失わない。

○「は」の「わ」と通つて居るのわ、

古事記、景行の卷、　やまとし宇流波斯、　靈異記、上、二三　姝、ウルハシ、同、中、三三　姝、于留和シ、　新撰字鏡、　贇、加美宇留和志、　同、連字部、　嬋媛、美麗之皃、宇留和志、

萬葉集、二十、　からまる君を、波可禮か行かむ。　同、十五、　世の中は、常かくのみと、和可禮ぬる。

類聚名義抄、　趙、禾シル、ハシル、　古今集、俳諧、　人にあはむ、つきのなきには、思ひおきて、胸はしり火に、心燒け居り。　童蒙頌韻、　趨、ワシル、

新撰字鏡、　聒、左和久、　類聚名義抄、　聒、サハク、　木工權頭爲忠朝臣家百首、　つれなき戀に、さはぐ心を、　悅目抄　つや〳〵、さはぎたるけしき

もなくて、

古事記、目弱王、日本書紀、眉輪王、新撰字鏡、朕、面和也、於毛與和志、

悅目抄、忠峯忠見、云々、よはけれど、やさし。

新撰字鏡、燥、可和久、類聚名義抄、潤、カハク、伊呂波字類抄、乾、カハク、

日本紀竟宴歌、(平安朝時代)替、可波留、悅目抄、くもりなきの歌、三句、さながらかわらず。童蒙頌韻、渝、カワリ。

新撰字鏡、連字部、惶急、阿和豆、類聚名義抄、惶、アハツ、周章、アハツ、定家假名遣、あはただし、周章、

新撰字鏡、剞、屈曲也、太和牟、定家假名遣、たはむ、撓、

源氏物語、夕顔、たゝかくながらくはふべき事侍らざめり　悅目抄、和歌は、我朝の風俗、云々、延喜のかぐらの歌にも、くわへられける。童蒙頌韻、加、クワヘタリ、伊呂波字類抄、加、クワフ、

吾妻鏡、文治五年四月二十一日、あやまち候はざらん。」くにをめされ候わんこと、」

「ひ」「い」「ゐ」の通つて居るのわ、

新撰字鏡、蘭、知比佐支井、悅目抄、ちいさきつちくれをゆづらず。

古今集、雜、上、思ふどち、團居せる夜は、唐錦、たゝまく惜しき、ものにぞあり

ける。一本神樂歌、榊、八十氏人ぞ、滿登比せりける。(今井似閑ノ萬葉緯ニ納レシ本)

萬葉集、十五、我が胸痛し、古非(戀)の繁きに、後拾遺集、戀、一、我れが身は、

とかへる鷹と、なりにけり、年はふれども、こひ(戀、木居)は忘れず。

類聚名義抄、用、モチキル、蜻蜓日記、中、夢をも佛をも、もちいるべしや、

もちゐるまじや。紫式部日記、上、をり〳〵の有さまにしたがひて、もちひんことの、いとかたかるべし。今昔物語、十二、二會ノ講師ヲ用イル。源仲正家集、(頼政の父)千代までも、影をならべて、逢見むと、祝ふ鏡の、もちひ(餅、用)ざらめや。發心集、一、いと、もちいる事なし。定家假名遣、もちひて、用、もちいらるゝ、被用、もちゐる、用、

其外「まひ」(舞)を、童蒙頌韻に、「娃、マイヒメ」、「あげつらひ」(論)を、同書に、「論、アゲツライ」、「まゐる」(參)を、悅目抄に、「貴所へまいらする歌」梁塵秘抄、二、授記品に「多

【九〇】動詞　五段活用

くの佛にまいりあひて」同書、藥王品に「くらゐ」を「菩薩のくらいえたりける」定家假名遣に「い」を「おひうと、老人」「おひぬれば、老」「はひすみ、掃墨」「くひて、悔」「おひて、於」「とひて、解」「いさぎよひ、潔」「むくひ、報」「ひ」を「おいて、負」「しゐて、強」「とりかい、鳥飼」「さいはい、幸」「もちい、もちゐ、餅」「ゐ」を、定家假名遣に「いさる、膝行」、字鏡集に「嵯、フルキイドコロ」、

「ふ」を「う」としたのわ、

靈異記の序の訓注に「價、ツクノウ」「傷、ソコナウ」「嗤、ワラウコト」、永久四年百首、秋の部に、物名の草香(和名類聚抄、草類、芸、和名、久佐乃香)の題で、源俊頼「いくさく。さ。の。かう心や、つきぬらむ、今のはりみち、石ふますとて」。(往來に見て、新路の石を蹈ませる爲に、馬を野飼にする心がついたのであろうか、の意味である。) 悅目抄に「歌に、善惡あり、云々、こしおれたるものは、はう〳〵(這々)もありぬべし」。源平盛衰記、三十五に「信濃なる、木曾の御料に、汁かけて、たゞ一口に、くらう(食、九郎)判官」。定家假名遣に「すまう、相撲」「ころもふるう、衣振」「まじなひたまう、呪給」「なやらう、追儺」、假名論語、季氏篇に「すくないことをうれへずして、ひとしからざるをうれう」(不患寡、而患不均)、

其外、童蒙頌韻に「通、カヨウ」「違タガウ」「謠、ウタウ」、伊呂波字類抄に「養、ヤシナウ」「病、ヤマウ」、字鏡集に「沒、タヾヨウ」、平他字類抄に「祝、イハウ」「拂、ハラウ」、侯玉篇(甲)「惱、ワヅラウ」

「う」を「ふ」としたのわ、

類聚名義抄に「樹、ウフ」、多武峯少將物語に「くわくこう(郭公)を「山路しる、鳥を我身に、なしてしが、君かくこふ(戀)と、なきてつぐべき」。「まうけ(設)を、悅目抄に「歌を、かならず、上の句をよまむとおもふべからず、云々、詞にてもまふけたらむ物を、あてゝみんに」、

「へ」「え」「ゑ」を通わしたのわ、

靈異記、上に「たえ(絶)を「トミノオガハノタヘバコソ」、「すゑ(居)を、悅目抄に「歌は、人によりて、云々、此縁を、むね、こし、すそにすへたるを、よき歌とす」。「おぼえ(覺)を、同書に「俊頼朝臣、云々、一首詠せまほしくおぼへしに」、「まへ(舞)を、梁塵秘抄、二、雜に「まゑ〳〵、かたつぶり」、「たへ(妙)を、同書、二、極樂歌に「たえなるのりをぞとなふなる」 定家假名遣に「へ」を「あしなえ、蹇」「さえのかみ、さいのかみ、さゑのかみ、道祖神」(支の神)「こしらゑて、誘」、「え」を「あまへて、甘」「さかへゆ

く、榮行「い」へぐすり、愈藥」、「ゑ」を「う」おく、植置」「すへて、居」「うへたり、飢」、

「ほ」を「を」「お」としたのわ、

類聚名義抄に「沃、ウルヲス」「懸、ハルカナリ、トヲシ」「檄、モトヲル」、悅目抄に「歌よまん時、云々、後に、よくなをし、よみとゝのふべきなり」「長歌とは、云々、終の七々にいたるまで、いひとをせる物なり」。定家假名遣に「きおふ、競」「くづを」る、頽」「とおる、通」、

「を」を「お」「ほ」としたのわ、

類聚名義抄に「嬋媛、タオヤカナリ」、悅目抄に「又、緣の字、云々、此三のこしお」れ(腰折)にまよひて、歌は、更にいでこぬ成べし。「かなをいたはる、云々、句の末には、發句、後句のおはりのかななり。「朝倉や、木の丸殿に、我おれば」「心操もおさまり、才幹もありて」、定家假名遣に「花をおる、折」「いとおし、最惜」、類聚名義抄、禾部に「馥、カホル」、

「お」を「を」としたのわ、

靈異記、中、十三に「陷、ヲチイル」、同、中、三十三に「晚、ヲソク」、悅目抄に「萬葉集に、云々、人のかたちすぐれたる中に、心をくれたる所みゆれども」、定家假

名遣に「をそし、遲」「をす、推」「をとづれ、音信」、

鎌倉時代以後の書物にわ、其混雜が甚しい、今の口語でわ、ハ行活用の動詞の語尾わ「は」を「わ」に「ひ」「ふ」「へ」を「い」「う」「え」に發音し「言はむ」「買はむ」わ「言わむ」「買わむ」となり、又「言わう」「買わう」となり、今わ「言おう」「買おう」と發音する。

○文語のナ行變格活用の「死ぬ」「往ぬ」を、今わ、全國で、大抵、通例の四段活用に變えて、つかつて居る、そこえ、未來の形の「死のう」「往のう」を加えて、五段活用とした。

死	しな	しに	しぬ	しぬる	しぬれ	(しな、む) 文語ナ行變格活用
	しな	しに	しぬ	しぬ	しのう	口語ナ行五段活用

中國、四國、九州の處々にわ「死ぬる人」「往ぬる時」などゝ、まだ、ナ行變格活用の姿を殘して、云つて居る所が、ないでわない、しかし、それも、多くわ、連體形の場合ばかりで、「死ぬれば」「往ぬれば」などゝ云うことわ少くて、大抵わ「死ねば」「往ねば」と云うようである。

「往ぬ」と云う動詞わ、三重縣、愛知縣、岐阜縣、福井縣から東でわ、口語につかわない、九州でも、佐賀縣、熊本縣、鹿兒島縣、などでわ、用いぬようである。

文語にわ、此外に、命令形にばかり用いる「死ね」と云う活用があり、將然形が「死なば」、已然形が「死ぬれば」であるのに、口語にわ「死ね」を命令に用いて、又「死ねば」と、將然にも、已然にも用いることゝなつた、又、文語の四段、上一段、下一段活用、の外の動詞わ、口語では、終止形が亡びて、連體形が、終止形を兼ねるようになつたのに、(後の「一〇九」を見よ)此ナ行變格活用わ、却つて、連體形の「死ぬる」が亡びて終止形の「死ぬ」が連體形を兼ねるようになつた、是れわ、元から活用が、四段活用に似て居るから、四段活用の方へ、引き込まれたのであらう、既に、室町時代の狂言記の吃に、「それならば、往ぬやうに、云て遣らう、」同、鎌腹に、「此鎌を下に置いて、飛びかゝつて死ぬに、死なれぬといふ事はあるまい」「鎌腹を切つて死ぬぞ」などと、終止形を、連體形に用いて居る。

○文語のラ行變格活用の「あり」「居り」の終止形を、口語でわ、全國、殘らず「ある」「居る」と云つて居る、そこで、未來の形の「あろう」「居ろう」を加へて、五段活用とした。

有	あら	あり	あり	ある	あれ	(あら、む)	文語ラ行變格活用
	あら	あり	ある	ある	あれ	あろう	口語ラ行五段活用

室町時代の幸若の入鹿に、「諸卿殘らず參内ある、鎌足、憚り御不參なり。」史記抄、十、五三に、「車馬ヤ、女ヤ、ナンドガアルト云モ、此心ゾ。」閑吟集に、「我おもひ、うちにある、色や外に見えつ覽。」運歩色葉集(甲)に「居、ヲル、」節用集(甲)に「居、ヲル、」狂言記、宗論に、「其方に、ちと意見をしたい事がある。」江戸時代の東海道名所記、舞坂に、「誠に、世の中に、鬼はないものぢやと、樂阿彌も、かんしんしておる、されば、云々」などゝある。

○文語の上二段活用の「恨む」も、口語にわ、全國、大抵、五段活用に變わつて居る。

恨	うらみ	うらみ	うらむ	うらむる	うらむれ	(うらみ、む)
	うらま	うらみ	うらむ	うらむ	うらめ	うらもう

文語マ行上二段活用

口語マ行五段活用

しかし、中國、九州邊に、まだ、口語に、少しわ、上二段活用につかつて居る所があり、又、上一段活用に云つて居る所もあり、又ませてつかつて居る所もある。

【九一】 文語の上二段活用の「起く」「起くる」「起くれ」「落つ」「落つる」「落つれ」を、口語でわ、全國、大抵「起く」「落つ」の終止形をつかわないで、「起きる」「起きれ」「落ちる」「落ちれ」と、上一段活用に云う、但し、九州の處々にわ、まだ「起くる」「起くれ」「落つる」「落づれ」

（終止形の「起く」「落つ」わ、亡びて居る）と云う所がある、けれども、今わ、上一段活用と定めた。

起

おき　おき　おく　おくる　おくれ（おき、む）　文語カ行上二段活用

おき　おき　おきる　おきれ　おきよう　口語カ行上一段活用

口語にも、稀に、「過ぐる三月三日」など云ふことわある。

「おくる」「おくれ」「おつる」「おつれ」と云うわ、九州の宮崎縣に、最も多い、和歌山縣の日高郡でも、そう云う。

未來形の「おきよう」わ、次の下一段活用、カ行變格、サ行變格の未來形と共に全國の處々に、異同がある、それわ、後の未來形の條（一一八）に云う。

山形縣の山形市、北村山郡、岩手縣などでわ、「落つる」「落つれ」「報ゆる」「報ゆれ」を、ませて云い、山形縣の最上郡、大坂府の東成郡でわ、「起きる」「起くれ」「落ちる」「落つれ」など云い、肥前の小城、多久、の二郡でわ、「起くる」「起きれ」「落つる」「落ちれ」と云う。

○文語の四段活用の「飽く」「足る」「借る」を、關西の口語にわ、おもに、五段活用にかい、關東では、「飽きる」「足りる」「借りる」と上一段につかつて居る、因つて、是等の語わ、兩方に活用するものとする。

關東でも、「勘定合つて錢足らず」「月足らず」などとわ云う。

關西で、「かつて（借）來る」（平家物語、十、だいり女ばうの事、「人に、くるまかつて、つかはされにけり」）「こうて（買）來る」と云うのが、關東で、「かりて（借）來る」「かつて（買）來る」と云うのと、紛れておかしいと云うが、東西で、活用が違うのである。

室町時代の運歩色葉集（甲）に、「借、カリル」、江戸時代の醒睡笑、四に、「大名の前にて、座頭の、ひたもの、ねぶるを見給ひ、云々、昔より、春は、蛙が目をかりる、と申し傳へて候、云々、我等のやうなるあしき目をもかり候は、よく〳〵、蛙のよりあひに、目のはやる仔細御座候や、と申しける。」諸國盆踊唱歌、因幡に、「こせとちぎりて、いまゝたあきる、釘をうちたや、のちのつま。」など、、關西にも、上一段活用が見える。

○文語のハ行上二段活用の「強ひ」「強ふ」「強ふる」「強ふれ」の類、又、ヤ行上二段活用の「報い」「報ゆ」「報ゆる」「報ゆれ」の類、ワ行上一段活用の「用ゐ」「用ゐる」「用ゐれ」の類を、

口語でわ「強い」「強いる」「強いれ」「報い」「報いる」「報いれ」「用い」「用いる」「用いれ」などゝ云うから、ア行上一段活用とする、但し、九州にわ「強い」「強ゆる」「強ゆれ」「報い」「報ゆる」「報ゆれ」などゝつかつて居る所もある。

○「報ゆ」は、ヤ行上二段活用であるが、早くから、ハ行四段活用にも用いられて居た、鎌倉時代の平家物語、二、小松教訓の事に「いく程もなくて、はや、身の上にむくはれにき、と思へば、云々、」同、七、福原おちの事に「何ぞ、今、其はうをんをむくはざらんや、云々、あやしの鳥けだものも、をんをほうじ、とくをむくふ心は候也。」古今著聞集二に「日食、すこしきにして、うへしのびがたきは、餓鬼のかなしみをむくふなり。」同、二に「自業自得果の衆生の業をむくはんが爲に、みな、我所にきたる。」同、九に「今夜のうちに、此恨をばむくはんずるものを、と思ひゐたりけり。」同、十二に「年來の罪をも報はんが爲に、頭をのべて參候。」室町時代の謠曲、葵の上に「我、人の爲、つらければ、必ず身にもむくふなり。」運歩色葉集(甲)に「報、ムクウ」、節用集(乙)に「酬、ムクウ」、江戸時代の倭玉篇(丙)に「酬、ムクフ」、寛文五年の山鹿語錄、十七、父子道、二、事父母、報讎に「父の仇を報はん、と思ひ入るゝときは、」合類節用集に「報、ムクフ」、寶永三年の近松門左衛門の碁盤太平記、泉岳寺の條に「主人の仇を報はん爲、」などゝ見える、(「罪が報つて來る」なども云い、且、自動、他動、の變わりもあるようである、)しかし、今でも、まだ、全くわ變わり切つて居らぬように思われる。

○古事記、神代の巻に「啼伊佐知伎」とあつて、それについで「何由以汝不治所事依之國而哭伊佐知流」。とあり、(日本書紀にわ「哭泣悲恨」とあり、欽明の巻に「大息涕泣」とある、倭玉篇(甲)に「泣、イサツ、ナク」)此「伊佐知」と云う動詞わ、上二段活用のように思われるが、右の「伊佐知流」を「いさちる」と讀めば、上一段活用となつて、本居宣長の古事記傳にも、いつてある通り疑問のものである。

○古事記の景行の巻に「荒夫琉神」、常陸風土記に「荒賊、俗曰阿良夫流爾斯母乃」、などとあるに、續日本紀、延暦八年九月戊午の詔に「陸奥國荒備流蝦夷」、とあつて、此「荒備流」を「あらびる」と讀めば、上一段活用のようである、しかし、古事記に、「訓建、云、多祁夫」、とあり、萬葉集の十に「秋風に、山跡部越雁が音は」(同巻に「秋風に、山飛越雁が音の」、ともある)、とあつて、舊訓に「部」に「ど」としてある「夫」に「ブ」「ど」の音があり「部」に「ブ」「ど」の音があるのを見れば、「備」も、「ブ」の音に用いたのかも知れぬ。

同じ字を同時に、いろ〳〵の音に用いたのわ、中宮寺の所藏の天壽國曼陀羅の繡張文に、「加斯支移比彌乃彌己等」(欽屋姫命)の「彌」の字など、其例である、次に云う下二段活用の論の處(九二)の「於也波左久禮賜、和波左可禮賀倍」なども、同じである。(尙、其處で云う)、

○萬葉集、十に、「君に戀ひ、裏觸居れば、敷の野の、秋萩凌ぎ、左牡鹿鳴くも」。とある、古今集、秋、上に、「秋萩に、うらびれをれば、足引の、山下とよみ、鹿の鳴くらん」。新葉集、戀、四に、「色かはる、小萩がもとに、うらびれて、いつしかのねに、鳴くと知らせん」。とある、此「うらぶれ」「うらびれ」、其に、ラ行下二段活用の連用形と見れば、仔細わないが、「うらぶる」と云う語わ、「心侘ル」の約まつたものだと云う說があるを見ると、何か、其間に、變わり目があるようである、其外、「老ゆらく」であるべきが、「老いらく」となつて居るのも、上二段の、上一段に變わつたものであろうか。

○上二段活用の、上一段に變わつたものゝ、元祿以前の書物に見えるわ、誠に少ない、上二段活用の動詞の、數の少ないからでもあろう、今、諸書から拾つたものを、次に示す。

平安朝時代

類聚名義抄、　閔、トヂル、

伊呂波字類抄、　嫺、コビル、

鎌倉時代

山家集、　いせ島や、月のひかりの、さびる浦は、明石には似ぬ、影ぞすみける。

春秋左氏傳集解、(圖書寮藏、文治建久から弘安前後までの寫本)　苟蕘曰、城小而固、云々、隕于深淵

論語、(山城高山寺藏、寛元元年寫)　暴虎馮河、而無悔者、吾不與也

字鏡集、　墮、ヲチル、(此頃の書物に、陷を「ヲチル」と讀んであるのわ、「オチイル」の約まつたのである)　耄、ヲイル、

室町時代

倭玉篇(甲)　懼、ヲヂル、

運歩色葉集、(甲)　恥、ハヂル、　澁、サビル、(刀二)

節用集、(乙)　愧、ハヂル、

狂言記、つんぼ座頭、　扨も〳〵、つんぼに物いへば、精も心も、つきることじ

や。

節用集、(丙) 强、シイル、

江戸時代

節用集、(戊) 强 シヒル、

倭玉篇、(乙) 佩、ヲビル、 免、トヂル、 邁、スギル、 朽、ヲイル、 生、イキル、 凸、ヲキル、 育、イキル、

雜兵物語、下、夫丸、 胴腹の疵から、血がはしる、又、血が胴へ落ちるもんだぞ。

合類節用集、 絨、トヂル、 禿、チビル、 闌、アラビル、 滓、アビル、

○上一段活用の動詞の「射る」「鑄る」「着る」「似る」「見る」などわ、全國について、元の活用でつかつて居る所が多いが、又、稀に、五段活用に變えて居る所もある、けれども、又「射る」「鑄る」わ、變えて、「着る」「見る」などわ、元のまゝで居る、など、語に因つて、まち〳〵である、且、變えて居るのにも、連用形にわ、「射殺す」「鑄直す」「着飾る」「見放す」「射て」「着て」「見て」など云つて、元のまゝでつかつて居るのも多い、全く元のまゝに用いて居るのわ、東國である、(京都、大坂も、元のまゝ、)今わ、元のまゝに、上一段活用と定めた。

【九二】 文語の下二段活用わ「受く」「受くる」「受くれ」「捨つ」「捨つる」「捨つれ」てあるが口語にわ、全國、大抵「受く」「捨つ」の終止形わなくなつて、「受ける」「受けれ」「捨てる」「捨てれ」と、下一段活用になつて居る、但し、九州の處々にわ、今でも「受くる」「受くれ」、「捨つる」「捨つれ」と云う所がある、けれども、今わ、下一段活用ときめた。

受

うけ　うけ　うく　うくる　うくれ　(うけ、む)。　文語ヵ行下二段活用

うけ、　うけ　うける　うける　うけれ　うけよう　口語ヵ行下一段活用

口語にも、稀にわ「明くる朝」「明くる日」「明くる年」など云う事わある。

和歌山縣の日高郡でわ「受くる」「受くれ」「捨つる」「捨つれ」と云い、又、九州でも、福岡市、小倉市、肥前の唐津町、大分縣の一部、宮崎縣の延岡町、沖縄縣でわ「受ける」「受けれ」「捨てる」「捨てれ」と云う。

和泉の堺、攝津の東成郡でわ「受ける」「受くれ」「捨てる」「捨つれ」と云う。

○文語のハ行下二段活用の「敎へ」「敎ふ」「敎ふる」「敎ふれ」の類、又、ヤ行下二段活用の「覺え」「覺ゆ」「覺ゆる」「覺ゆれ」の類、ワ行下二段活用の「植る」「植う」「植うる」「植うれ」の

類を、口語でわ、「教え」「教える」「教えれ」「覺え」「覺える」「覺えれ」「植え」「植える」「植えれ」と云うから、共に、ア行下一段活用とする、但し、九州にわ、「教え」「教ゆる」「教ゆれ」「覺え」「覺ゆる」「覺ゆれ」「植え」「植ゆる」「植ゆれ」とつかつて居る所もある。

○古事記、允恭の巻の歌に、「那加佐陀賣流淤母比豆摩阿波禮」、とあるわ、解しにくい語としてあるが、「汝が定める念妻柯怜」、と解いた説に從えば、此「定める」わ、下一段活用に變わつたものゝようであるが、容易にきめることわ出來ぬ、橘守部の稜威言別にわ、「佐陀賣多流」と、多の字を加えて、其左に、丸星が附けてある、何か、そう云う異本でもあつたものか、又わ、自分に加えたものであろうか、此言葉わ、まず、不審として置く。

○新撰字鏡に、「鯀、魚乃曾己禰太々禮留」、(損ね爛る、但し、天治寫本の十二巻本にわ無い、)とあるを、「たゞれる」と讀めば、下一段活用のようであるが、萬葉集、十に、「爲暮零禮見」、とあり、同書、十四に、「於也波佐久禮騰、和波左可禮賀倍」、(親は放くれど、我は放かるかへ)で、舊訓に、「可禮」に、「カル」とある、)とあつて、同巻に、「我波佐可流我倍」、ともあれば、「禮」を、「ル」の音にもつかつたものと見えるから、「太々禮留」も、「たゞる」と、讀むべきであろうと思われる。

○新古今集、十八、雜、下、菅公の海の歌に、「海ならず、たゝへる水の、底までも、清き心は、月ぞ照さむ」。の「たゝへる」わ、下一段活用になつたものかと見えるけれども、萬葉集の十三に、「望月の多田波しけむと、吾が思ふ、」とあり、夫木集、二十四に、「きよみ川、いづる湊に、潮滿てば、せかれてたゝふ、浦の入海」。山家集、下に、「世の中に、すまぬもよしや、秋の月、濁れる水の、たゝふ、さかりに」。などゝあるから、此「湛ふ」わ、四段活用の自動詞で、それが「たゝへり」となるを、「たゝへる」と用いたのである、又、古今集十九の旋頭歌に、「君がさす、三笠の山の、もみぢ葉の色、神無月、しぐれの雨の、そめるなりけり」。とあるも、雨が葉を染める意味と解せば、下一段活用に用いたようであるけれども、雨が葉に染まつた意味とすれば、仔細わない。

○下二段活用の、下一段活用に變わつたものわ、

平安朝時代

類聚名義抄、　淦、フナユカヘル、フネノユ、　渝、カヘル、　更、カヘル、

和名類聚抄、毛群部、獸體、　甗、宇世流、以、鼻動物也、(豕などが鼻で地を掘り起す)

新猿樂記、　稲荷山阿小町之愛法、(嫗(ウバ)鰹(カツオ)破前(ヒラフ)喜(破前わ、陰茎、)
童蒙頌韻、　嫗、ウセリ、(元龜字叢、嫗、ウセル、倭玉篇、嫗、ウセル、)
類聚名義抄、　蹣、クエル、(梁塵祕抄、二、雜、「むまのこや、うしのこに、くゑさせてん。」)
落久保物語、二、　只今の太政大臣の尻はけるとも、此殿の牛かひに、手ふれてんや。(「蹴うる」の「くゑる」となつて、又「ける」と約まつたものである。)
榮花物語、根合、　花のさかりには、人々まゐりて、鞠けなど、あそばせ給ひし所なり。
木工權頭爲忠朝臣家百首、神祭、　山がつの、かきねにいはふ、やかつかみ、卯の花さける、をかにみえるかと。
雅亮裝束抄、一、だいきやう(大饗)のこと、　ま(間)は、ひろくて、せんじやう(軟障)は、せばくば、ちがへること、かなはじ、はな(鼻)つきにもすべし。
和歌初學抄、　糸、へる、(綜)
伊呂波字類抄、　經、ヘル、　渝、カヘル、　蹴、クエル、　總、フサヲル、
古今集顯昭注、十八、　者ノ字ヲ不ニヨミタガヘルコトモアルベシ。

梁塵祕抄、二、二句神哥、　このとのに、よきふでづかの、あるものを、てこゝのとみを、かきよせる、ふでのぢくの、あるものを。

鎌倉時代

萬代和歌集、十五、　老がよの、ふけるは月に、ながめせし、人めもしらず、涙落ちけり。
建仁三年、仙洞五十首、　花といへば、なをみ山木の、梢まで、風をへだてる、心なりけり。
無名抄、　歌は、秀句を思ひえたれど、本末、いひかなへるが、よきなり。
瑩玉集、　その歌のすがたに隨て、こと葉つゞきも、おなじさまに、よみかなへるが、よきなり。
發心集、一、　朝ニサカヘル家、夕ニヲトロヒヌ。
金槐集、　ふりにける、あけの玉垣、神さびて、やぶれるみすに、秋風ぞ吹く。
(「やれたる」、とある本も、あると云う。)
教訓抄、七、舞譜名目、　跣(クエルアレ)足、　左右アリ。
字鏡集、　渝、カヘル、　渥、ツユノタレル、

【九二】　動詞　下一段活用

古今著聞集、十六、此御寺のほとりにて、すずろに、人からめる事、むかしよりなし。

南北朝時代

平他字類抄、經、ヘル、

室町時代

義經記、八、なをえ津にて、おひさがされし事、そこともしらぬ、琵琶のこゑかすみのひまにまぎれる、と、うたひしも、今こそ思ひしられけれ。同、八、ひでひらが子共、判官にむほんの事、九良、ふしぎの者かな、おなじ兄弟といひながら、よりともを、度々おもひかへるこそ、ふしぎなれ。

曾我物語、九、きやうだい、屋かたをかへし事、ねずみ、ふかくあなをほりて、くんきんのがいをのがれ、とり、たかくとんで、さうめいのがいをとほざけるとは、かやうの事なり。同、九、十ばんぎりの事、大將にかはりてつかへるものは、かならず、其ぢんをやぶるとは、もんせんのことばなるをや。

平家物語、劍の卷、泣々、尾張國へ歸り給ひけり、尊に仕へる人々、別を悲み

奉りて、云々。

撮壤集、寒熱、ホトケル、綜、ヘル、

孟子抄、三、義ト道トヲ以助クレバ、五藏ニ充滿シテ有程ニ、物ヲ食シテ飢エル事ハ無ゾ。同、九、率土ハ、土地ノ有限リト云ハン用ソ、土ヲシタガエル限リノ心ゾ。

中書王物語、物さびしげなる中に、びわひくばちのをとぞきこえる。

詠三百首狂歌、薄、招きよせて、ばかさんとてや、秋の野に、あれる狐の、尾花なるらん。

山城太秦の牛祭祭文、やさ馬に鈴をつけて、おどるもあり、はねるもあり。

倭玉篇(甲) 耐、タヘル、

運歩色葉集(甲) 經、ヘル、綜、ヘル、掠、カスメル、延、ハヘル、構、カマヘル、重、カサネル、漬、ツケル、搦、カラメル、替、カヘル、染、ソメル、存、ナガラヘル、枉、マゲル、詰、ツメル、隙、サヘル、飢、ウエル、餿、スエル、茹、ユデル、

運歩色葉集(乙) 繊、ヘル、憔、カジケル、絡、カラメル、飢、カツエル、

節用集(甲) 換、カエル、蹴、ケル、

節用集(乙) 蹴、ケル、刷、ハダケル、吠、ホヘル、經、ヘル、悅、トボケル、洮、ソロヘル、

元龜字叢、植、ウエル、淬、ニラゲル、蹴ケル、

狂言記、こんくわい、此山のあなたに、獵師の候、我等の一門を、つりたいらげる事にて候。同、拔殼、酒、云々、ま一度、もどつて、たべるやうにいたそ。門の番なりとも、さして下されませう、云々、抱へる事はならぬぞ。同、宗論、我宗體を譽めるではござらぬが、同、吟賀、其時に、御内の者がでるであらう。同、附子、某の眞直に申上げる、

節用集(丙) 歸、カエル、

天正日記、天正十八年、六月十二日、新右衛門、十兵衛、まめのもち、くれる、十四日、はれる。

節用集(丁) 經、ヘル、

江戸時代

節用集(戊) 經、ヘル、蹴、ケル、

倭玉篇(乙) 塡、ウメル、任、タヘル、促、セメル、肝、メミハダケル、和、ソヘル、挺、セタゲル、搦、カラメル、擲、ナゲル、撑、サヽエル、驚、アシナヘル、蹋、ケル、跨、コエル、効、カンガヘル、勑、ツゲル、寨、サメル、忍、コラエル、調、ソロエル、誘、コシラヘル、章、アワテル、餒、ウエル、隨、マカセル、逼、セメル、瘦、ヤセル、茹、ユデル、縝、ウヘル、耀、クダケル、鎔、トケル、渝、カヘル、消、キエル、列、サエル、明、アケル、礙、サエル、鍍、サケル、負、マケル、耐、タエル、受、ウケル、畫、ワケル、丸、マルメル、醒睡笑、一、唯、もていて捨よと、のべる、をかしや。

犬子集、十四、草臥てねる、土佐の山陰。

可笑記、三、女房をむかへるか、又嫁をとるに、分別あるべし。

油糟、雜、誂へる、あたひたかばる、石ぼとけ。同、雜、勝手の床に、かける字治川。

吾吟我集、七、強きかたに、助言いひぬる、將棊こそ、かける馬にも、むちとしらるれ。

正章千句、七、祝言の座に、出るやはゞかる。

【九二】 動詞 下一段活用

倭玉篇(丙)　祇、マヂル、　騰、ツタエル、　逼、セメル　洒、ツケル、　亭、アレル、

四天王武者修行、六段目、　いざ、うつたて、もの共とて、みな、一どうにぞ、おつかける。

諸國盆踊唱歌、河内、　おやがかたおや、御ざらぬゆゑに、人もあなづり、身もやせる。　同、陸奥、　秋風が、吹けば〳〵、まめのはもかれる。　同、越中、　よろづ世をへる、音なしの、たきのながれは、よもつきじ。　同、紀伊、　山がやけるが、たゝぬかきじよ、これがたゝりよか、子をおいて。　同、紀伊、　いく千代久し、松がえの、きみはさかへる、わかみどり。　同、肥前、　させばおさへる、おさへばのめず、のめば其身の、あだとなる。

合類節用集、　涸陰、キテル、　顯、イセル、(縫衣所謂)　馳、ハセル、　注、ハゲル、(鷹)　弓拏於弦)　駻、ハネル、　若弱、ニヤケル、　綜、ヘル、　經、ヘル、　取換、トリカエル、　嬈、トロケル、　壓扁、ヲシヒラメル、　歸着、カヅケル、　閇、カブセル、　點、タテル、(茶)　立、タテル、　投、ナゲル、　搏、マロメル、　拌、マゼル、　很、フテル、　澱、コヂル、　遽、アハテル、　充、アテル、　墾、メグル、ヒシゲル、　含羞、シラケル、　白、シラゲル、　拗强、スヂル、　挿、スゲル、(矢)　助、スケル

○上二段活用、下二段活用の、上一段、下一段と變わつたは、右の通りである、しかしながら、江戸時代から前の書物にわ、やはり、多くわ「落つる」「盡くる」「受くる」「立つる」であつて、右わ、多くの書物の中に、稀に見えたのを拾つたのである、江戸時代になつてもまざつて居る、全く、上一段、下一段となつたのわ、元祿頃の事かと思われる。

○カ行下一段活用の「蹶る」と云う動詞わ、今、全國で、元のまゝにつかつて居る所が多いが、又、ラ行五段活用に變えてつかつて居る所も少くない、(京都、大坂も、五段活用である、)因つて、此動詞わ、カ行下一段と、ラ行五段との二つの活用のあるものと立てゝ置く。

【九三】　文語のカ行變格活用の「こ」「き」「く」「くる」「くれ」を、今、全國で、殘らず「く」の終止形を用いないで「こ」「き」「くる」「くれ」と云つて居る。

來	こ	き	く	くる	くれ	(こ、む)　文語カ行變格活用
	こ	き	くる	くる	くれ	こよう　口語カ行變格活用

【九四】【九五】　文語のサ行變格活用の「せ」「し」「す」「する」「すれ」を、口語でわ、終止形の「す」をつかわず、「せ」「し」「する」「すれ」と云うこと、全國、皆、同じである。

爲　せ　す　する　すれ　（せ、む）　文語サ行變格活用
　　せ　し　する　すれ　しよう　口語サ行變格活用

室町時代の狂言記、相合袴に、「盃、云々、まづまゐらいで、左兵衛殿へ進せる。」「やい、冠者、いづれもへ、つらりと進せたか。」「なか〳〵、進せました。」などとも、用いてある。

【九六】　漢語を、サ行變格に活用させるに付てわ、規則を立てかねるものが多い、一字の漢語も、すべて、サ行變格に活用させるのを、通則とするが、また、本書に擧げたように、いろ〳〵に活用させる事もある、それを、總體に分けて見れば、次のようになる。

○第一類　サ行變格に活用させるもの、

せ（らぬ）れる　し　する　すれ　しよう　しろ
し（ない）（られる）（させる）　せよ

「せられる」「しられる」が「される」ともなり、「しさせる」が「させる」ともなる。（委しくわ、助動詞の（一八六）（一八八）で云う。）

「拜見」「勉强」「心配」「介抱」などの熟語の漢語わ、すべて、此活用になる。

一字の漢語の「製」「聘」「稱」「勞」「存」「歷」「決」「屬」「激」「歡」など、あらゆるものも、皆、此活用に這入る、但し、「詠」「命」「講」「報」「參」「關」「散」「禁」「信」「變」「論」「發」「察」「達」などわ、「される」「させる」にわ續かず、（重んずる、輕んずる、なども、）又「坐」「記」などわ、「しられる」「しさせる」「しない」「しろ」「しよう」に續かず、「秘」「具」などわ、「しない」「しろ」に續かぬようである、から、氣を付けねばならぬ。右のように活用させる事わ、全國の口語、皆、同じであるが、その未來形、命令形に、處々で、異同のあることわ、後の未來形（一一八）命令形（一二七）の處で說く、次の第二類の未來形、命令形、第四類の未來形、もそうである。

○第二類　サ行上一段に活用させるもの、

じ（なぬ）（られる）（させる）　じ　じる　じれ　じろ　じよう　じよ

一語の漢語の「高」「焙」「通」「封」「案」「感」「談」「判」「煎」「損」などわ、このようにも活用させる。

右のように活用させるのわ、東國であつて、中部、西部でわ、このようにつか

つて居る所もあるが、又、すべて、サ行變格につかつて居る所もあり、又「案し
る」「煎じる」など、二三の語に限つて、上一段につかつて居ると云う所もあり、
又「じる」「しれ」わ、つかうけれども、其外、上下の活用わ、サ行變格につかうと云
う所もある、けれども、今わ、東國、畿内邊で、逼く此活用につかわれると思わ
れる「高」「焙」「案」「煎」などの數語を、上一段にも活用させるものとした、室町時代
の義經記、義經、平家の討手に上り給ふ事に「數通の起請文を、かきしんじら
れけれども、尙、御承引なかりければ、守武千句に「ころもがへ、して、藥せんじ
よ」「春過て、夏めにけさや、なりぬらん。」江戸時代、鹿の卷筆、四、表具屋の掛物
に「さりとては、じよさい〳〵、よく判じられた」など、ある。
右の外に「映」「詠」「命」「應」「慢」「禁」「吟」「信」「陳」「任」「減」「轉」「變」「辨」「混」「論」なども、此活用につ
かわれるかと思うけれども、(重んじる、輕んじる、なども、)第一類のものとす
る方が、よいように思われる。

○第三類　サ行五段に活用させるもの、

さ(せる)	な(ない)	し	す	せ	そう	せ
	ぬ(れる)					

一語の漢語の「賀」「謝」「議」「辭」「解」「愛」「害」「廢」「託」(駁)「譯」「略」「祝」「熟」「復」(服)などわ、このよ
うに活用させてもつかう。
右のように活用させるのわ、全國、大抵、同じである、(中國、四國、九州、にわ、そう
でないと云う所も、ある、)けれども、民間にわ、通用が少ないようである、畢竟
わ、學者や、書生の間で、間違えて文語に入れませてつかつた口調のものを、
口語にもつかうのであろう、今わ、逼くつかわれると思われる「賀」「謝」「議」「辭」「解」
などの十數語を、五段活用にもつかうものとした、室町時代の史記抄の、七、
一四に「理之宜、然コトナレバ、書スマデモナイゾ」。(「シルス」の意かもしれぬ、)
同、十、四二に「一度、寃ヲ復サウト思テ、復シタゾ」。(「カヘサウ」かも知れぬ、)江戸時
代の懐硯、三、水浴せば涙川の條に「常々秘す事を口走る」。寶暦頃の川柳の
句に「永日の、時を期さぬは、呑む禮者」。文化の川柳に「御開運五常を表す御
扇子」(家康の馬印、五本骨)文政の川柳に「山鳩と、化すも冥がな、桑の虫」(山鳩
色の御袍)など、、隨分、古くから、五段活用につかつて居る。(使役の助動詞の
「させ」「させむ」「させよう」の所を見合せよ)、
右の外に「嫁」「坐」「和」「化」「期」「記」「治」「祕」「附」「具」「書」「處」「怨」「會」「對」「敬」「制」「號」「勞」「窮」「住」「供」「稱」

「諾」「約」「宿」「刻」「食」「敷」なども、このように活用させるか、とも思われるが、まだ、全く熟して居らぬようであるから、やはり、サ行變格に活用させるがよかろう。

○第四類　サ行下一段に活用させて、可能の意味とするもの、

せ｛ぬ／ない　せ　せる　せれ　せよ（命令わない）

第三類の五段に活用する「議」「解」「譯」「託」などわ、此活用に轉じて、「解」することが出來る」「譯することが出來る」の意味（可能）につかうことがある、常のサ行五段活用の動詞の「押さ」「指さ」に「可能の助動詞の「れる」が附いた「押される」「指されれる」が約まつて、「押せる」「指せる」となると、同じ道理である、（一八六）を見よ、尙、此事わ、次の可能の助動詞の所で云わう、この活用わ、全國、大抵、行われて居るが、中國、九州にわ、つかわぬと云う所もある。

【九七】　口語でわ、動詞の終止形と連體形が、同じであるから、表の中の第三活用形に、一つにした、後の形容詞、助動詞も、その通りである。

【一〇三】　文語でわ、カ行四段活用の動詞の第二活用に「たり」を附けて、「書きたり」「稼ぎたり」など云うを、口語でわ、全國すべて、「書いた」「稼いだ」と云う、助詞の「たら」「だら」（四七一）「たり」「だり」（四七七）「て」「で」（四八三）に續く時も、同じである、「き」「ぎ」の「い」となるわ、子音が默つて、母韻ばかりになつたので、「た」の濁るのわ、上の「ぎ」の濁りの移つたのである。

稀に、「書あた」「稼えだ」など云う所があり、武藏の南足立郡、入間郡でわ、「急いた」「稼いた」と、清音に云い、山形縣の東置賜郡でわ、「咲いだ」「挫いだ」と、濁音に云い宮崎縣にわ、「挫いた」「稼いだ」、鹿兒島縣にわ、「咲たて」（咲いたて）「稼だて」など云う所がある。

○「き」の「い」となつたもの、（「ひ」とあるも、「い」である）

平安朝時代

類聚名義抄、仍、ッイテ、艶、ナマメイタリ、

催馬樂、紀伊國、風しも、不伊（吹き）たれば、同、高砂、今朝左伊（咲き）たる、初花に、

紫式部日記、めづらしく、心にくゝ、なまめいてみゆ、しさまも、いと、からめいたり。

法華義疏、（石山寺藏、一條帝、長保四年）吐、

【九七】【一〇三】　動詞　書いて　咲いた等

史記、(狩野亨吉藏、後三條帝、延久五年) 卽、
大毘盧遮那成佛經、(西大寺藏、白河帝、承曆二年) 在、闕、
將門記、(名古屋眞福寺藏、堀河帝、承德三年) 搔、
童蒙頌韻、之、ユイテ、歎、ナゲイテ、乖、ソムイテ、瑩、ミガイテ、
香藥鈔、(田中光顯藏、二條帝、永萬元年) 卷、
梁塵祕抄、雜法文歌、つゐとついて、同、經歌、經には、是名持戒行づださ
(頭陀者)と、とい(說き)たれば、ほとけのみちには、さわりなし。
伊呂波字類抄、歌、ナマメイタリ、疎、スイタリ、(齒)
寶物集、下、さいのしやうげをのぞいて、阿彌陀如來をみたてまつり、

鎌倉時代

平家物語、一、妓王の事、かづいたるきぬをうちのけたるを見れば、あまになりてぞ出來たる。同、七、實盛さいごの事、林を燒いてかる時は、おほくのけだものを得るといへども、
定家假名遣、をいて、於、すいたる人、逸人、をしひらいて、排、たちをはいて、帶劍、なひて、泣、すいて、洗、

遊仙窟、闕、ツイテ、風、カゼフイテ、歎、ナゲイテ、抱、イダイテ、
字鏡集、闕、ヒライテ、
古今著聞集、二、一五 肝たんをくだひて、全く、身命を惜まず。
砂石集、二、三三 妻ニ手ヲヒカレ、子イダイテ、
假名論語、ふうし、きせんとして、なげいてのたふまく、(夫子、喟然歎曰)

南北朝時代

平他字類抄、於、ヲイテ、

室町時代

義經記、二、伊勢三郎、義經の臣下に始めてなる事、太刀佩いて、大の手鋒を杖につき、同、三、義經、辨慶、君臣のけいやくの事、二人は、やがて舞臺へひいて、をりあふて、たゝかひけるひいつすゝんづ、打合ひける間、
曾我物語、五、吳越のたゝかひの事、しりぞひてはらはんとすれば、鋒先まがれり。
幸若、夜討曾我、妻戸がなつて、きり〳〵とひらいた。同、烏帽子折、草刈笛、云々、一手、吹いて、おもひでにきかせばや。

【一〇三】 動詞 書いて 咲いた等

史記抄、六、一〇　雷電ガハタメイテ、マックラニナッタ。　同、十、二一　管仲、云々、
　鮑叔ヲダシヌイテ、タライタゾ。
孟子抄、一、三五　牛馬庶畜ヲ切タヽイテモ、用ナシ。
廻國雜記、まりこ川、俳諧、　鈴かけの、鮎を上て、まりこ川、おひ綱かいつ、けふ
　は暮さん。
眞宗御文章、二、三三　コノウヘニヲイテ、ナヲ、身ノフルマヒニツイテ、コノム
　チヲ、ヨクコヽロウベキミチアリ。
閑吟集、　たゞおいて、霜にうたせよ、夜ふけて來たが、にくい程に。
太秦、牛祭祭文、　牛に鞍を置き、大鬧をすりむいて、かなしむもあり。
運歩色葉集、(甲)　逸人、スイタルヒト、　窈窕、ナマメイタル、
節用集、(甲)　就、ツイテ、　於、ヲイテ、
狂言記、萩大名、　打開いた景のよい庭でござる。　同、釣狐、　彼者が、犬など
　を飼ふて置いたらば、

江戸時代

徒然草抄、下、　禹ニ命ジテ討ゼシム、禹ユイテ、兵ヲカヘシ、云々、

醒睡笑、一、　きやつを、馬の丞とつけたれば、いさみて、はや、いな、いたよ。
　同、八、　鐘をば、てんき〳〵やとたゝいて、笛を、ひよりやひよりとふいた
　もの、
太閤記、二、四四　大氣者におひては、天下無雙の男なるべし。
犬子集、十、冬、　右も左もきいたうでさき。
油糟、雜、　口あひた、人を繪にかく、渡し船。
正章千句、一、螢、　うつぶいて、どうぞめされよ、船遊。
吾吟我集、二、ゆり、　つぼめるや、帽子きせたる、鹿子ゆり、ひらいた花は、いふ
　にをよばず。
小栗の判官、二、　鬼鹿毛、云々、只、ゐなゝいて、八方八つのくさりを、しつと、
　のし、
後撰夷曲集、九、老人、　雀ほど、ちひさく老の、身はなれど、ういたる人は、をど
　り忘れぬ。
○「き」の「い」となつたもの、(「ひとある」も「い」である、)

平安朝時代

【一〇三】　動詞　凌いで　防いだ等

大智度論(近江石山寺藏、文德帝天安二年)次第、
類聚名義抄、接、ツイデ、班、ツイヅ、
童蒙頌韻、疼、ヒイライデ、磨、トイデ、
伊呂波字類抄、諧、ヤハライデ、
梁塵秘抄、二、雜、うかゐ(鵜飼)は、くやしかる、なにしにいそいで、あさりけむ。
寶物集、上、人々の、しりさはひで、物のあはれも、さむるほどなり。

鎌倉時代

平家物語、二、座主流し、兜をぬひで、ほうしばらにもたせ、同、二、新大納言死去の事、はるゝと、多くの波路をしのひで、行ところなり。
定家假名遣、しのいで、凌、
砂石集、四、一五 鼻ガウツヤイデ、オカシキゾ。
假名論語、鄉黨篇、みたび、かひでたつ。(三嗅而作)

室町時代

義經記、三、賴朝謀叛の事、櫓の柱に、馬をつないで、源氏をまちかけたり。
曾我物語、一、かはづの三郎うたれし事、つるのもとじろにてはいだる、しらこしらへのしらや、
幸若、入鹿、一つの鋒をあたへよ、ふせいでみんとの宣旨なり。三年があひだ、塞いだる兩眼を、くわつとみひらき、
狂言記、宗論、愚僧もいそいだ。同、素襖落、ひらに、ちようと注いで下されい。
節用集(丁)仰而唾、アホヒデ、ツバキヲハク。

江戸時代

醒睡笑、七、代二百、つないで懷中せし。
西翁十百韻、奥州へ遣はす、いそいでまゐれ、沖の魚舟。
雜兵物語、下、草履取、柿、一つ、ひんもひだれば、がひに面白いきざしがでた。
○サ行五段活用の動詞を「て」「た」につゞける時、「指して」「出して」「崩して」「濟して」などと、「文語のまゝに云うわ、關東、奥羽、山梨縣、長野縣、新潟縣であつて、それから西、畿内、四國にわ、稀に、「指いて」「崩いて」「濟いて」などをませて云う、「し」の子音が失せて、母韻ばかりになつたのである、助詞の「たら」(四七一)「たり」(四七七)につゞける時も、同じである、(京都、大阪にわ、「指いて」の一語あるばかりで、其外わ、皆「して」

【一〇三】動詞 指いて 出いた等

と云う)中國、九州の處々にわ「いた」又わ「えた」と云う所が多いけれども、サ行五段活用の動詞が殘らず、そうでわない、語に因つてわ「した」と云うのもある、つまり、一つに定まつてわ居らぬ、それに「指した」「咲きた」共に「さいた」さいた」となり「出した」「抱きた」共に「だいた」だいた」となつて、紛れやすいから、すべて「した」ときめた、文語とも一つになる。

武藏、南足立郡に「消いて」「押いて」「群馬縣、群馬郡に「消いて」と云う所がある。

滋賀縣にわ「指いさ」出いさ」と云う所があり、和歌山縣の新宮、安藝、山口縣邊にわ「消ひた」流ひた」など云い、佐賀縣、熊本縣にわ「指あた」出あた」落えた」殘えた」離あた」流あた」暮あた」殺えた」潰いた」延あた」など云い、大分縣にわ「指えた」出えた」など云い、宮崎縣にわ「指ちた」出ちた」殘いた」など云い、鹿兒島縣にわ「指たて落たて」離たて」殺たて」濟たて」など云う所がある。

○「し」を「い」と云つて居たもの、(「ひ」とあるも「い」である)

平安朝時代

神樂歌、早歌、巾子、於止以津。(落しつ)

宇津保物語、菊の宴、おぼしめいて、のたまはするにこそはあめれ。

落窪物語、一、物引きかづきて、ふい(臥し)たらむ。

源氏物語、浮舟、見あらはいたるを、同、手習、姫君の、おはしまいたる、

更科日記、冬になりて、ひぐらし、雨ふりくらいたる、

阿吒薄倶元帥大將上佛陀羅尼經修行法儀軌、(石山寺藏、堀河帝、嘉保二年)

放

大慈恩寺三藏法師傳、(興福寺藏、鳥羽帝、永久四年) 乾

高僧傳、(石山寺藏、二條帝、長寛元年) 攝

香藥鈔、(田中光顯藏、二條帝、永萬元年) 果

梁塵祕抄、二、二句神哥、須磨のうらに、ひきほい(乾し)たるあみの、

鎌倉時代

平家物語、一、鵜川合戰の事、寺僧ども、湯をわかひてあびける。同、一、內裏炎上の事、てんでに、まつ火をともひて、京中をやくとぞ、人々のゆめにみえけり。同、四、橋合戰の事、大長刀のさやをはづひて、はしのうへにぞ、すゝんだる。同、十一、弓流、美尾屋十郎は、小太刀、大長刀に叶はじとや思ひけん、かいふいて(掻伏)逃ければ、

【一〇三】動詞 指いて 出いた等

南北朝時代

太平記、二十三、土岐頼遠、參會御幸狼藉、被死刑事、（神田男爵藏本）　往來ノ貴賤、群リヲナイテ、タチ留マリテ、云々、

室町時代

義經記、六、忠信最後の事、　此刀をすてたならば、云々、ひざの下にをしかくいて、きず口を引あけ、

幸若、富樫、　寫しもうついたり、かきもかいたる繪かな。　同、百合若、　蒙古がまなこを、射つぶいたり。

史記抄、十、二二　管仲ガ、欺テタライタレドモ、鮑叔ハ、其ヲモ、ナニトモ思ワヌゾ。　同、十、三三　桃ヲ食テ、アマリ甘イトテ、食イサイ（殘し）テ、君ニマイラセタレバ、

孟子抄、一、一九　百姓ノ耕作スル物ヲ、カリダイテ、園囿ヲ作リナドシテ、

閑吟集、　鎌倉へくだる道に、竹へげの丸ばしをわたいた。　戀の中川、うつかとわたるとて、袖をぬらひた。

狂言記、墨塗、　一段と、でかいた。　いや、思ひだいた。　同、吃、　あ、ゆるいてくれい。　往ないて下されい。　同、釣狐、　此間、狐を釣る程に〳〵、某の類を、悉く釣り絶やいて御ざる。

伊曾保物語、　又、叱らるゝに、肝をつぶいたれば、　同、　わが腹中をひるがへいて、御目にかけう。

江戸時代

醒睡笑、二、　われは、日本一の事をたくみだいたは、といふ。　同、七、　なに、狸の王ぢや、王ならば、射ころいてくれうず。

昨日は今日の物語、　何より、めいわくいたい。

犬子集、十四、雜、上、　ほそ谷川で、すそをぬらいた。

油糟、雜、　はなれし牛を、誰もどいたぞ。

正章千句、二、花、　ひめをく閨に、さかりすごいた。

天狗羽打、二段、　馬に白あわはませ、馬の貳しやう引まはいて、三べんのり、

古今夷曲集、五、　正直の、神のちかひの、かの字にし、濁をさいた、身をいのるなり、

○文語のタ行四段活用の動詞を「て」たり」につゞける時、文語でわ「打ちて」勝ち

【一〇三】　動詞　打つて　勝つた等

たり」など云うを、口語でわ、全國、皆「打つ」て「打つ」た「勝つ」て「勝つ」た」と云う、助詞の「たら」(四七二)「たり」(四七七)につゞける時も、同じである。

富山縣の下新川郡に「打て」た」と云う所があり、宮崎縣に「勝つち」た」又わ「勝ち」た」と云う所もある。

○「ち」の「つ」となつたもの、

平安朝時代

源氏物語、帚木に「盃もて出で」、同、若紫に「僧都、きんを、みづからもてまゐりて」など「ち」を省いて云つたのもある。

今昔物語、廿五、源宛平良文合戰語、各ノ弓ヲ取テ、箭ヲ放ッテ馳セ違フ。

寶物集、上、百千の劒をもつて、さきわるがごとし。

鎌倉時代

平家物語、七、實盛さいごの事、光もりこそ、きいのくせ者と、くむで、うつて、參つて候へ。同、九、小宰相の事、戒をたもつて、主の後世をぞとぶらひける。

古今著聞集、十、久清、丈尺にてうつて見れば、桙、例よりも、一丈あまり、遠く立たりけり。

假名論語、子路篇、ざんにかつて、さつをすつべし。(可以勝殘去殺矣) 同、泰伯篇、天かを三ぶんし、そのふたつをたもつて、もつて、ゐんにふくじす。(三分天下有其二以服事殷)

室町時代

義經記、二、鬼一法眼の事、ことばをはなつて、仰有ければ、同、四、義經都落の事、ふねのへさきに、つゝたつて、人にむかつて、物をいふやうに、

曾我物語、六、和田よしもり酒もりの事、まかりたつて、かさねて參るべし。同、七、矢たてすぎの事、合戰するに、なんなくうちかつて、歸りのぼりぬ。

幸若、百合若、雲の上に、光をはなつてつくるべし。同、入鹿、親子わりなき中ならば、れう王をうつてたべ。

史記抄、十、四八 我ヲアザムクカト思テ、バラダッタリ。

孟子抄、一、一四 國ヲモッタ者ハ、人ノ國ヲ取タガリ、

狂言記、宗論、愚僧は、其樣に待つてはならぬ。同、酢蕁、何方なりと、云勝つた者が賣物の司を持たう。

【一〇三】 動詞 打つて 勝つた等

伊曾保物語、熟柿を持つて來て、主人に捧ぐれば、

江戸時代

醒睡笑、二、うつけもの、これを見つけ、手をうつてかんずる。

雜兵物語、下、矢箱持、棒におとつた弓をもつて、捨てべいかと思つたれば、

○文語のラ行四段活用の動詞を、「て」たり」につゞける時、文語でわ、「取りて」切り」たり」など云うを、口語でわ、全國、すべて、「取つて」取つた」切つて」切つた」と云う、助詞の「たら」たり」につゞける時も同じである。

富山縣の下新川郡にわ、「取て」取た」と云う所があり、宮崎縣にわ、「取つた」又わ、「取た」と云う所がある。

○「り」の、「つ」となつたもの、

平安朝時代

將門記、(名古屋眞福寺藏、堀河帝承德三年)　瑤、

童蒙頌韻、彌、ワタツテ、群、ムラガツテ、蹲、ウヅクマツテ、飄、ヒルカヘツテ、遶、サヘキツテ、

鎌倉時代

平家物語、一、禿童の事、十四五のわらべを、三百人すぐつて、かみをかぶろにきりまはし、同、一、願立の事、しゆと、おほく、きずをかうぶつて、まいりてうつたへ申。同、二、あしずりの事、僧都、舟にのつてはおり、おりてはのつつ。同、十、だいり女ばうの事、人に、くるまかつて、つかはされにけり。

遊仙窟、隔、ヘダヽツテ、

字鏡集、澗、ニゴツテナガレズ、

古今著聞集、二、あみだ和讃をつくつて、自他をしてとなへしめける。

砂石集、序、時ニアタツテハ、光陰ヲオシマズ、

前に擧げた將門記に、「瑤、チブテ」(ねぶりて)平家物語に、「何になて」(成りて)船にのて」(乘りて)遊仙窟に、「奉、ウケタマハテ」、「横、ヨコタハテ」、「透、ホドバシテ」、吾妻鏡、元暦二年正月六日、頼朝の狀に、「佐々木三郎、筑紫へは下さがりたるによて、下して備前兒島をば責落たるなり」。沙石集、一、に、「マコトニハ、事スギテ空シキノミニアラズ、時ニアタテ(當りて)モ、自性ナキ故ニ空也、故ニ、生ニアタテ不生ナリ」。同、三、に、「世ニアテ(在りて)ハ、人ニモシラ

【一〇三】動詞　取つて　切つた等

レズ、名利モナキ人、遁世門ニ入テハ、云々、」 同、四、に、「眼アテ(ありて)朋ノ中ニアルガ如シ」 孟子抄、一、三七に、「田横ハ五百人デ一島ヲコシラヘテコモテイテ(籠りて居て)なと(り)を略して言つたのもある。

假名論語、先進篇、 せんせうのくに、たいこくのあひだにはさまつて、くわふるに、しりよをもつてして、(千乘之國、攝乎大國之間、加之以師旅) 同、子路篇、 せう人は、おごつてゆたかならず。(小人、驕而不泰)

室町時代

義經記、一、吉次おうしう物語の事、 わたのきよひらと申候ひし、兩國を手ににぎつて候し。 同、四、義經都落の事、 たゞ、帆の中をやぶつて、風をとをせとて、 同、五、忠信、都へしのび上る事、 欲にふけつて、合戰に忠をいたしたるとても、云々、

曾我物語、五、吳越のたゝかひの事、 三冬にうづくまつて、一陽來復の天を待つ。 同、八、仁田がしゝにのる事、 猪のしゝ、云々、大きにたけつて、はせまはる。

幸若、和田酒盛、 おうぢ伊藤の入道よりつたはつたるさかおもだかのはらまき、 同、敦盛、 異國の樊噲が、わたつて乘つたりとも、あれほどの小舟に、何程のことのあるべき。

謠曲、高砂、 梅花を折つて、かうべにさせば、 同、田村、 北にあたつて、入相の鐘の聞え候は、

史記抄、六、二四 上ヘカエツテ讀ム例ガ、イクラモアルゾ。 同、六、二九 ホリヲホツテ、河水ヲ引テ、要害ヲ守ルゾ。

孟子抄、一、三 周ノ幽王ノ時、犬戎ノエビスニ破レテ、東周ニナツテ、洛邑ヘウツツテカラ、周ガ衰ヘタゾ。 同、一、四 壅底ハ、ウチフサガツタ體ゾ。

辨慶物語、上、 にやく一わうじへ參り、いのられければ、云々、御むさうにあづかつて、

倭玉篇(甲) 仍、ヨツテ、

狂言記、ひめ糊、 紺屋へ遣つたる肩衣は、張つて參つたか。 同、伯母酒、 毎年、酒を作つて、商賣致さるれ共、殊の外、吝い人でござつて、何時參つても、酒、一つ飲め、と云はれた事がござらぬ。

伊曾保物語、 柿を預かつた者共、思ふ樣は、 食しをはつて後、 大きな荷

があつたを、エッポ、それを持たうといへば、

江戸時代

徒然草抄下、語ガアヤマッテ、想夫憐ト云タ事ヂャ。

醒睡笑、一、寺院を、他人に、誤つても不讓を法とするまゝ、同六、海老を

いつて、(炒りて)河へはないたやら、お知りあつたかと、

太閤記、或問、よき人も、尋やうによつてあらんか。

犬子集、春、上、子日、松根に、腰をさすつて、ねのび哉。

小栗の判官、二、只今の玉づさを、ものをしつて、やぶらせ給ふか、又は、しら

いで、御やぶりあつてましますか。山中の大瀧がたぎつて、さつ〳〵と

落るがごとくなり。

雜兵物語、上、持槍擔、馬、云々、芭蕉毛のところを、かばと突いたれば、先へ五

間斗つんぬいて、すべつてころんだが、仕合と、鎗を持つてねまつた、云々

乘人も、まつさか樣に落て、ふんぞつた。

○文語のハ行四段活用の動詞の「言ひ」買ひ」を、口語でわ「言い」買い」と云い、それ

に「て」た」が附けば、「言つて」買つて」となるわ、靜岡縣、山梨縣、長野縣から東が、大抵

そうであつて、愛知縣、岐阜縣、新潟縣でわ、「言うた」買うた」をませて云い、それか

ら西わ、九州まで、大抵、「言うた」買うた」と云う、助詞の「たら」たり」にも同じように

續く、初わ、兩立させようと、案を立てたが、決議の末に、「言つた」買つた」とするこ

とになつた、(「言うた」買うた」わ、語根まで變わる事となる) 但し、「請い」問い」給い」

わ、「請うた」問うた」給うた」とする。

武藏、群馬縣、青森縣に、「笑うた」言うた」など云う所があり、伊勢、攝津、丹後、鳥取

縣、島根縣、佐賀縣、宮崎縣にも、「笑つた」戰つた」など云う所もあるが、誠に少い。

京都、大坂、和歌山縣の新宮でわ、「拂て拾た」など云い、宮崎縣に、「言ちた」拂ちた」拾ちた」

など云い、鹿兒島縣に、「拂てた」拾てた」など云う所がある。

○「ひ」の「う」となつたもの、(「ふ」と書いてあるのも「う」である)

平安朝時代

宇津保物語、俊蔭、加茂に詣でたまうたりしかば、

催馬樂、酒飲、酒をたうべて、たべ惠宇天、(醉ひて)

法華義疏、(石山寺藏、一條帝、長保四年) 嘆、

狹衣、一、うちすてたまうつ、

【一〇三】動詞 言うて 買うた等

今昔物語、二十二、高藤内大臣語、　御狩衣指貫ナト、炮干サムト云ウテ、取テ入ヌ。

將門記、(名古屋眞福寺藏、堀河帝、承德三年)　繕、

大慈恩寺三藏法師傳、(興福寺藏、鳥羽帝、永久四年)　候、遂、

童蒙頌韻、　裨、ヲギヌウテ、　伺、ウカヾウテ、　詢、トブラウテ、

高僧傳、(石山寺藏、二條帝、長寛元年)　倩、

寶物集、下、　いそぎかへりて、長者にむかふていひけるは、

鎌倉時代

平治物語、一、信頼信西不快の事、　伏見源中納言師仲卿をかたらうて、彼在所に籠り居り、

平家物語、一、妓王事、　今様一つぞ、うたうたる。　同、二、　有王が島くだりの事、　片手には、魚をもろうて、もちあゆむ。　同、七、　實盛さいごの事、　わか殿原にあらそふて、さきをかけんも、おとなげなし。

遊仙窟、　通、カヨフタル、(向、ムカテ、とばかりもある)

古今著聞集、六、　めしにしたがふて參候。　同、八、　水干の袖に、むばらこきに、雀の居たるをば、ぬふたりけり。

砂石集、二、　井ノ底ヨリ、此ノヲサナキ者オフテ、出給ト見テ、　同、三、　只、名バカリ、受戒トイフテ、云々、大小ノ戒相モシラズ。

室町時代

義經記、四、土佐房、義經の討手に上る事、　おのれは、手を負ふたるか。　同、五、判官、よし野山に入給ふ事、　しらびやうしも、一番まふてぞ入にける。

曾我物語、五、呉越のたゝかひの事、　馬のいきの、きるゝほどぞ、おふ(追ひ)たりける。　同、八、すけつねが屋かたへゆきし事、　さかづき取りあげて、云云、そのかはらけ、すけつねこうて、(請ひて)かたゞゝは、何と思ひ給ふらん、云々、

幸若、和田酒盛、　あさいながめてのわきに、さいたる刀、ひんばうて、(奪ひて)ねだのこゝろもとに、さしたて、」　よしもりがぞんじには、ばつくんちがふて存ずる。　同、夜討曾我、　妻戸がなつて、きりゝとひらいた、兄弟の人々さうのわきにひつそうて(添ひて)すまひて、ものを見給へば、

史記抄、五一五　諸侯ガ、モシ、シソコナウタラバ、　同、十二、五　蒲伏ハ、ハラバ

【一〇三】　動詞　言うて　買うた等

イニハウタゾ。

孟子抄、九、二五　羊ノ皮五枚ニ、身ヲ賣テ、ソレカラ、牛ヲカウテ、秦ノ穆公ニ取入タト云。

田村の草子、上、　いそぎ、としむねにむかふて、したがへよとのせんじ下りければ、　同、下、　只今、なんぢが、うつてむかふたるものを、いかなるものとか、おもふらん。

辨慶物語下、　此程は御ざうしに、矢ちがへの法はならふつ。

狂言記、宗論、　世間に、事足らうた御方もあり。　同、抜殼、　さあ飲め、はあ、いかう酔うたかな。

狂言記、苞山伏に、「鳶がくたか、鳶がくたら、蓋がせずにあらうに、誰がくたぞ、」など丶、「食うた」が「くた」ともある。

梅津長者物語、　夜もすがら、うたふつ、まひつ、しゆゑんなり。

詠歌之大概、　先達の詞にて、みえたるも、隨分の人の、取あつかふたるが好也。

伊曾保物語、　其熟柿をば、何と思うて、取つてくらうたぞ。

江戸時代

昨日は今日の物語、　心得申たると、うけごうて、さて、方々、げんぶつしてかへり、

醒睡笑、一、　けしからず、饂飩をすく者あり、さすが、買うてはくひともなし、

太閤記、二、　取々に、爭ひ合ふて、氣を取失ひし者もあり。

犬子集、六、冬、雪、　雪のよは、竹もかこうて、ねざ丶哉。

犬子集、一、春、上、春草に、「たんぽ丶の、あへ物くてや、舌つゞみ。」　同書、四、秋、上、葛に、「くてほめぬ、人はうらみよ、葛だんご。」など丶、「食うて」を「くて」とも用いてある。

油糟、冬、　さむさにや、千はやふるふて、たてるらん。　同、雜、　慰に、たゞ土佐駒を、かふてやれ。

小栗の判官、一、　うつくしうしたゝめたる文、一つう、ひろうて有。

諸國盆踊唱歌、駿河、　しつてをれども、人にまたとふて、母のさしづで、むかひとれ。

諸國盆踊唱歌、長門、「こいとゆたとて、ゆかれるみちか。」など丶、「云うた」を「ゆ

【一〇三】　動詞　言うて　買うた等

た」とつかつてある。

西翁十百韻、一、朝手水、つかう‖てはきく、ほとゝぎす。

○「ひ」の「つ」となつたもの、

平安朝時代

童蒙頌韻、遵、シタガッテ、歌、ウタッ‖テ、償、ツクノッ‖テ、

寶物集、上、夜ことに、五つづゝ、子をうみ、うむにしたがつ‖て、みな、みづから

くふなり。

鎌倉時代

平家物語、一、清水炎上の事、高きも、いやしきも、肝魂をうしなつ‖て、四方へ、

みなたいさんす。同、二、座主流し、あざわらつ‖て、申けるは、同、十二、女

院御出家の事、秋の月、雲にともなつ‖て、かくれやすし。月をゐいせし

夕には、雲おほつ‖て、光をかくす。

古今著聞集、七、田園を損亡する事、年をおつ‖て、はなはだしきなり。

假名論語、先進篇、くわいは、それ、こいねがつ‖て、しば〳〵むなし。(回也、其庶

乎、屢空、) 同、憲問篇、あぢかをになつ‖て、こうしのかどをすぐる物あり。

(有荷蕢而過孔氏之門者)

神代紀、下、に「衢神問曰」假名論語、顏淵篇に「あひこうゆうぢやくにとつ‖

ていわく、」(哀公問有若曰) 同、季子篇に「いつをとつ‖て、さんをえつ、」(問一、

得三) などゝ「問ひて」を「とつて」とあるわ、めずらしい、奥州本、義經記、(改定

史籍集覽、安永八年の奥書がある、) にも「今日のうつ手は、いかなる者ぞ

と、とつ‖たれば、やすひらが家の子に、長崎太郎大夫といつたアげだ、」な

どともある。

室町時代

義經記、一、かゞみの宿にて、吉次宿に、がうどう入事、をつ‖ゝ、まくつゝ、さん

〳〵にたゝかひ、同、四、義經都落の事、人にむかつ‖て、物をいふやうに、

かきくどきて申やう、

曾我物語、五、吳越のたゝかひの事、したがつ‖ては、臣下、心ざしをほうせざ

るこそ、むねんなれ。

幸若、文覺、法性隨妄の雲、あつくおほつ‖て、十二因縁の峯にたなびき、同、

百合若、敬つ‖て申すと、書きとめて、

【一〇三】動詞 言つて 買つた等

醒睡笑、二、日本左衛門とつきたきよし申しけり、東堂、あざわらつて、さやうの大なる名は、めづらし過て、云々、

太閤記、三、小屋を、小路〳〵、もやつて、作りならべ、

雜兵物語、上、鐵砲足輕小頭、刀を抜て、敵の手足をねらつて、切りめされい。

同、下、矢箱持、馬に負はせた箭、かた〳〵の箱に、貳百筋せおつた。

雜兵物語に、「痛手を負んだ」、とあるわ、めずらしい。

○「ひて」「ひたり」を、音便に、「うて」、「うたり」とも云い、「つて」「つたり」とも云うわ、動詞に因つて、何か區別があるかと見るに、寶物集、上に、「夜ごとに、五つづゝ、子をうみ、うむにしたがつて、みな、みづからくふなり、」とあるに、古今著聞集、六に、「めしにしたがふて參候」、とあり、寶物集、下に、「いそぎかへりて、長者にむかふていひけるは」、平家物語、一、清水炎上の事に、「武士、けんびいし、西坂本にゆきむかつて、ふせぎけれども」、平治物語、一、信頼信西不快の事に、「伏見源中納言師仲卿をかたらうて、彼在所に籠り居り」、平家物語、二、座主流しに、「居なをりあざわらつて申けるは」、五、咸陽宮の事に、「よき兵をかたらつてこそ、まいらせめ」、同、五、伊豆院宣の事に兵衛のすけ殿、あざわらふて云々」、砂石集、三に、「只、名バカリ、受戒ト云フテ、云々、大小ノ戒相モシラズ」、假名論語、鄕黨篇に、「きう、いまだたつせず、といつて、あへてなめず」、(曰、丘未達、不敢嘗)同、憲問篇に、「はくしのへいゆう三はくをうばつて」、(奪伯氏駢邑三百)幸若、和田酒盛に、「あさいながめてのわきにさいたる刀、ひんばうて」、幸若、烏帽子折に、「烏帽子をたまはれ、小結を結ふて參らせん」、同、高館に、「直垂のくゝりを結つて、しめたりけり」、などと、同時、同一の書に、どちらも、つかつて居るから、二つながら、勝手に、ませて用いて居たものと見える。

しかし、今の口語にわ、西國わ、「うて」「うた」で、東國わ、「つて」「つた」と、大凡に別れて居る。

○ナ行變格活用の動詞の「死に」「往に」の、「て」「た」に續く時わ、「死んで」「往んだ」などゝなること、全國の口語に、皆同じである、助詞の「たら」、「四七一」「たり」、「四七七」に續くにも、「だら」「だり」となる、但し、「往ぬ」と云う語わ、東國でわ、つかわない、九州にも、つかわない所がある。

○「に」の、「ん」となつたもの、

鎌倉時代

【一〇三】動詞　死んで　往んだ等

假名論語、鄉黨篇、　ほうゆうしんで、よらんところなし。(朋友死、無所歸、)　同、泰伯篇、　しんでのちにやむ、又、とをからずや。(死而後已、不亦遠乎、)

室町時代

幸若、鞍馬出、　牛若殿の御はかせひらめくとみえしかば、手のうらいまだかへさぬまに、六人死んで、三人は、痛手負うてぞひれふしける。

史記抄、六、二二　此劒ハ、飛デインダト云。

孟子抄、一、一四　宜臼モ、申ノ國ヘ走テインダソ。　同、九、二六　ソレカラ、戀テインダレハ、案ノ如ク、昏カラ虞ヲ取タゾ。

狂言記、抜殼、　彼の清水へ行て、身を投げて、死んでのけう。　同、聟貰、　夜前女ぢや者と言葉論を致したれば、ついと出てござるが、其邊を尋ねますれども居りませぬ、定めて親の所へ往んだ者でござろ。

江戸時代

昨日は今日の物語、　あるもの、久々そひたる女ばうを、にはかにいやがり、そなたをみれば、むねがわるい、がてんづくにて、いんでたもれ、と云ふ。

油糟、雜、　しんだかと、おもへば死なぬ、酒の酔。

懷硯、一、　案内知つて、昔の寢所、　一年近く、知れざれば、愈、死んだに疑なく、云々、

○バ行四段活用、又わ、マ行四段活用の動詞の「呼び」遊び」又わ「飲み」賴み」讀み」などに、「て」た」を續ける時に「呼んで」遊んで」飲んで」讀んで」と口語に云うわ、東國一圓から、西わ、中國、四國まで、大抵、同じである、しかし、富山縣、石川縣、美作、備中、出雲等にわ、稀に、「飲うで」賴うで」など云う所があり、廣島縣、山口縣、石見、高知縣にも「飛うで」遊うで」飲うで」賴うで」讀うで」など云つて、又「飲んで」賴んで」などませて云う所もある、九州でも、大抵、二つをませて用いて居て、「んで」ばかりなのわ、福岡縣で、「うで」ばかりなのわ、熊本縣である、今わ、用いるところの多いのに因て、「んで」に定めた、そうして、是等が、助詞の「たら」(四七一)「たり」(四七七)に續くにも、「だら」だり」となる。

千葉縣の山武郡でわ、「飲んた」と、清音に云う。

大分縣でわ、「飛うで」遊うで」飲うで」讀うで」なと云い、宮崎縣にわ、「飛だ」遊だ」飲だ」讀だ」と云う所がある。

○「び」の「ん」となつたもの、「む」とあるのも、「ん」である)

【一〇三】　動詞　呼んで　飲んだ等

平安朝時代

阿吒薄俱元帥大將上佛陀羅尼經修行法儀軌(近江、石山寺藏、堀河帝、嘉保二年、)喚(ヨバ)

童蒙頌韻　咍、ヨロコンデ、飛、トンデ、呼、ヨンデ、遨、アソンデ、覃、ヲヨンデ、

鎌倉時代

平家物語、一、二代后の事、世、げうきにおよんで、人、けうあくを先とするゆへ也。同、二、座主流し、おめきさけんで、咒詛しける。同、二、新大納言死去の事、あかの水をむすんで、父の後世を弔ひ、同、四、高倉宮園城寺入御の事、大衆、大にかしこまりよろこんで、法輪院に御所をしつらひ、

遊仙窟　雙ナラムデ、哽咽、ムセンデ、

假名論語、述而篇、そのよきものをゑらんでしたがふ。(擇其善者而從之)

同、泰伯篇、そうし、やまひあり、もんていしをよんでいわく、(曾子有疾、召門弟子曰)同、衛靈公篇、なむぢ、われをもつて、おほくまなんで、しれる人とするか。(女以予爲多學而識之者與)

室町時代

義經記、三、辨慶、洛中にて人の太刀取し事、太刀をぬいて、とんでかゝる。

曾我物語、六、ふつしやうこくの雨の事、夏の蟲、とんで火に入。

幸若、文覺、岩泉、むせんで、布をひき、嶺猿、さけんで、枝にあそぶ。同、百合若、吉日をえらんで、都出とぞ聞えける。

謠曲、大原御幸、左右の脇にはさみ、云々、海中に飛んで入る。

狂言記、吃、胸で、しやんと結んで、

江戸時代

醒睡笑、一、くんづ、ころんづ、藺次なかりつるが、同三、暮におよむで、座を立つ時、

懷硯、三、水浴せば涙川、誰が娘を呼んだといへば、

雜兵物語、上、持槍擔、先へ、五間斗つんぬいて、すべつてころんだ。

近年の口語文に、上一段活用の動詞にまで用いて、「色が黑みを帶んで居る、」「足利氏が亡んでから、」「着物がほころんだ」などゝ見えるわ、許されぬ。

○「び」を「う」と云つて居たもの(「ふ」と書いてあるも「う」である)

【一〇三】動詞　呼うで　飲うだ等

平安朝時代

香藥鈔、(田中光顯藏、二條帝、永萬元年) 呼、

鎌倉時代

平家物語、二、新大納言死去の事、 大納言の北の方は、都の北山雲林院のへんに、しのふ(忍び)でおはしけるが、御返事を書て、給う(給び)だりければ、

同、十一、さかろの事、 海上に出うかふ(浮び)だるとき、風こはければとて、とどまるべきか。

室町時代

幸若、和田酒盛、 虎、なゝめによろこふで、十郎のかたへ、つかひをたつる。

同、鞍馬出、 山科の寺のかたはらに、ふかく忍うでいたりけり。

謠曲、海士、 御前にて、そと、學うで、御目にかけ候へ。

史記抄、三、五〇 春秋ノ魯トナラウ(並び)デ、魯ハ南ニアリ、齊ハ北ニアルゾ。

同、十、三二 魯君ノキゝヲヨウデ、疑テ吳起ニカウ云ワレタゾ。 同、十四、二一 食物ヲ、モチハコウデ、行戍スルモノニ、云々、

孟子抄、十、二 善惡ヲエラウ(擇び)デ、用ガナイゾ。

狂言記、墨塗、 こちへよう(呼び)で、逢ふてもよけれど、こなたも、よろこふで下されい。 同、萩大名、 是は、聞き及うだよりは、打開いた景のよい庭ぢやなあ。 同、二千石、 御暇を申上たりとも、とても、下さるまいと存じ、忍うで、京内參りを致してござる」。疊の縁につまづいて、轉うでござれば、伊曾保物語、 躍りつ、跳ねつ、喜うで道をあるいた」。主人、旅せらるゝに及うで、下人共に、荷物を負はせちる。

江戸時代

小栗の判官、二、 あれ〳〵、御らん候へや、あれに、むねかどの、二けんならふ(並び)だるは、五人のきんだちの御家かし。

鹿の卷筆、二、にせ八島、 兄の三郎兵衛はおはさぬか、とひそかに呼うで通りける。

○「み」の「ん」となつたもの、(「む」と書いてあるのも「ん」である)

平安朝時代

類聚名義抄、 歟歟、ハナス爪リシカナシムデ、(「爪」わ、古體の「ス」の假名である。)

土佐日記、 手をきる〳〵、つん(摘み)だる菜を、

【一〇三】 動詞 呼うで 飲うだ等

神樂歌、蟋蟀、　木の根を保利波牟天、(掘り食みて)　催馬樂、老鼠、　西寺の老鼠、若鼠、於牟裳都无川、介左川牟川。(御裳嚙みつ、袈裟嚙みつ)　神樂歌、大宮、　大宮の西の小路に、菖蒲己牟太利。(込みたり)

史記、(狩野亨吉藏、後三條帝、延久五年)　盜

法苑珠林、(法隆寺藏、崇德帝、長承三年)　裏

今昔物語、二十二、大織冠始賜藤原姓語、　大臣、此レヲ聞テ、驚キ泣キ悲ンデ、今ハ、世ニ有リトモ、何ニカセム、ト云テ、　同、二十八、越前守爲守付六衞府官人語、　心カラ、物ヲ惜ムデ、其達ニ、此ク被責申シテ、恥ヲ見トハ、何デカ可思ヤ。　同、五十、白井君銀提入井被取語、　白井ノ君、此レヲ惟ムデ、寄テ見ケレバ、云々、

童蒙頌韻、　罷、ヤンデ、　孜、ツヽシンデ、　呑、ノンデ、　蹂、フンデ、　臨、ノゾンデ、　斟、クンデ、

鎌倉時代

平家物語、一、二代后の事、　深淵にのぞんで、薄氷をふむにおなじ。　同、二、新大納言ながされの事、　軍兵、前後左右をうちかこんで、　同二、康賴のつとの事、　つヽしんで、もつて、うやまつてまふす。　同三、有王がしまくだりの事、　白雲、あとをうづんで、ゆき來の道も、さだかならず。　同三、醫師もんだうの事、　思愛のわかれ、家のすいび、かなしむでも、なをあまりあり。　同、五、朝てきそろへの事、　驚、云々、せんじぞ、とおほすれば、ひらん(平み)でとびさらず。　同、十二、判官都落の事、　すみよしの神官、是をあはれんで、乘物共をしたてヽ、みな、京へぞおくりける。　同、十二、はせ六代の事、人のすんだる所とも見えず。

遊仙窟　徒倚、タヽズンデ、　步、アユンデ、　睦々然、ホヽエンデ、　惻愴、イタンデ、

假名論語、述而篇、　かならず、事にのぞんでおそれ、はかりごとをこのんで、なさん物也。(必也、臨事而懼、好謀而成者也)　ふばきをいつして、すヽんでいわく、(揖巫馬期而進之曰)　同、泰伯篇、　つヽしんで、れいなきときんば、すなはちしす。(愼而無禮則葸)　同、先進篇、　なんぞ、かならずしも、しよをよんで、しかうしてのちに、まなぶことをせん。(何必讀書、然後爲學)　同、季氏篇、　くるしんでまなぶるは、又、そのつぎなり。(困而學之、又其次也)

【一〇三】　動詞　賴んで　讀んだ等

假名論語、憲問篇に「まづしうして、うらみなきことはかたく、とつて、おごることなきはやすし。」(貧而無怨難、富而無驕易)の「富みて」を「とつて」としたわ、めずらしい。

室町時代

義經記、三、書寫山炎上の事、ゆん手のかいな、差しのべ、かうをつかんで、忽いと引く。同三、辨慶、洛中にて、人の太刀取し事、八尺の壁をふんで、天にあがりしを、同、三、義經、辨慶と、君臣のけいやくの事、ひいつすゝんづ、打合ひける間、同、三、賴朝謀叛の事、弓馬の名をうづむで、星霜をおくり給ふ。同、四、土佐房、義經の討手に上る事、土佐、つゝしんで申けるは、

曾我物語、一、おなじく、すまふの事、足をとりてみよ、組んでは、かなふまじきぞ。同、九、すけなりうち死の事、幕をつかんで投げあげ、御侍所にはしり入。

幸若、夜討曾我、太刀、脇ばさんで、敵のやかたのけこを、靜に見て通る。同、和田酒盛、あらめづらしの御さかづきやと、もつて、三度ぞくんだりける。きうちやうの藤が、松をからんで、同、劔讃歎、じゆず、さら〳〵とおしもむで、同、烏帽子折、鬢の毛は、ちゞむだり。

謠曲、大原御幸、二位殿、云々、ねり袴のそば、高くはさんで、云々、船ばたに臨む。

孟子抄一、二〇 桀ヲ亡シタイト思フヤウニ惡ンデハ、何ガタタマラレウゾ。同、一、三六 車ニ薪ヲッン デ、車輪ノ折ル、程ッン ダ。同、五、二九 是カラ以來、ッ、ンデ、捨ッ、ウヅンッヅ、ナンドスル事ガ始タゾ。

狂言記、柿山伏、柿を盗んで食らう山伏を、云々、同、伯母酒、酒、云々、とてもの事に、ちと休んでたべう。

伊曾保物語、二三人程、立ちかゝり、忽ち打擲せうとするに臨んで、主人の足元にひれふし、吃り〳〵、つつしんで申すは、上に產んだか、下に產んだか、存せぬ。

江戸時代

醒睡笑、一、頭をくはせ、くんづ、ころんづ、蔦次なかりつるが、

正章千句、九、初冬、落葉、奇麗に炭を、くんで出せり。

【一〇三】 動詞 賴んで 讀んだ等

小栗の判官、しみづの段、くんだるしみづを、かたにかけ、
諸國盆踊唱歌、下總、どばし板なら、よかろもの、どんとふんでは、めをさます。
雜兵物語、上、鐵炮足輕小頭、どろのすんだ上水でも、すゝつて居なされ。
同、下、荷宰料、其繩をひつきざんで、水に入れ、こねまはせば、其上水をのんだがよい。同、下、若黨、手負振をたしなんで、弱みをみせまい。同、下、草履取、鐵炮鞘の小尻へ入れ、その上へ、鐵炮をつゝこんだ所で、折ふし、すむばこがおこつて、細腹がいたんで、ねまつたれば、
雜兵物語、上、鐵炮足輕小頭の、「半分づゝは、玉藥をこんだ」は、下二段活用のようであるが、やはり四段活用の他動である、近頃の文に、「飛んでもない入閣を夢んで」などゝあるのを見たが、よろしくない。
○「み」を「う」と云つて居たもの、（「ふ」と書いてあるのも「う」である）

平安朝時代

梁塵秘抄、二、雜、　聟の冠者の君、何色の何摺か、このうだう（好みたぶ）である、「たぶ」は「給ふ」と同じである）着まほしき。

鎌倉時代

平家物語、四、大衆そろへの事、風うへに、火をかけ、やきあげ、一もみもふ（揉み）で、せめんには、同、五、くはんじん帳、くはんじんちやうをひきひろげて、たからかにこそ、よふ（讀み）だりけれ。同、九、忠度さいごの事、六彌太をつかふ（握み）で、弓長ばかりぞ、なげのけらる。同、十一、なすの與一の事、馬の左のむなかひつくしを、はずのかくるゝ程にぞ、いこう（射込み）だる」。殘りの四騎は、馬をおしふ（惜み）でかけず、けんぶつしてぞゐたりける。

室町時代

義經記、二、鬼一法眼の事、頭巾、耳のきはまで、引こふ（込み）で、大手鋒を杖につき、同、三、賴朝謀叛により、義經、奥州を出給ふ事、御ざうしのらうどうには云々、三百よき、云々、もみにもう（揉）ではせ上る。同、五、忠信最後の事、烏帽子引たて、をしもう（惜）で、ぼんのくぼに引いれて、
幸若、小袖曾我、おほくの人をほろぼし、あけにそふ（染み）だるうち物を、弓手の肩になげかけ、同、烏帽子折、不動明王、云々、劍をのう（呑み）だるところ、同、馬ぞろゑ、廻文をまはし、たのふで見んとの御諚なり。

【一〇三】　動詞　「賴うで　讀うだ等

史記抄、二、一〇　隱括ハ、モノ、ユガウダヲタムル心ゾ。同、二、三八　カラカサノヤウナモノヲ、兩方ニハサウ(挾ミ)ダラバ、同、三、二三　御トモヲ申サフトノゾウ(望ミ)デ從タゾ。同十一、七八　目攝トハ、ニラウ(瞰ミ)デ、アレヲシタヽメウト、シタホドニ、同、十三、二一　少カラ、醫藥ヲコノウ(好ミ)デ、シタレドモ、同、十四、八　鞠躬、云々、事ヲツヽシウ(愼ミ)ダル者ゾ。

孟子抄、一、三三　豚、云々、時失トハ、ハラウ(孕ミ)ダヲ殺スヲ云フ。同、二、六　天ノ正路ヲタノウ(賴ミ)デ居ゾ。同、三、七　惡政ニクルシウ(苦ミ)ダ民ヲ、善政ヲ行ハヾ、

狂言記、墨塗、酒ばかり飲うで、小脇にきつと挾うで、同、萩大名、臑はぎの、延びての、かゞう(屈み)での、と仰らるゝ。私の賴うだ者が、同、太刀奪、綴りとなぐさう(慰み)で歸らうぞ。同、花子、とろ〳〵とまどろうだれば、鳥がかあかあと、夜が明けた。同、すね薑、片手で、なせ拜ましやる、いや、兩手で拜うだも、片手も、心、同じ事でござろ。

伊曾保物語、シャント、怪しうで言はるゝは、

江戸時代

醒睡笑、四、これで、ざつとすう(濟み)だ。同、五、たゞ、よみたくば、歌よふ(詠み)で、同、五、いきしなに、つぼふ(答み)だ花が、きしなには、ゑじかつたりや、桶とぢの花。

小栗の判官、一、てるてふみの段、みづからよう(讀み)できかせんと、まづ文の紐をとき、

○「びて」を、「んで」とも、「うで」とも云うようになつたのわ、平安朝時代の末から見え、「みて」を、「んで」と云うは、平安朝時代の早い時から始まり、「うで」と云うは、同じ時代の末から見えることは、右に擧げた例の通りである、此二つの言い方を見るに、動詞にも、時代の前後にも、何と認めるべき區別はないようで、假名論語に、「ゑらんで」呼んで」及んで」喜んで」、幸若に、「えらんで」などとあるに、幸若に、又、「喜うで」とあり、史記抄に、「及うで」孟子抄に、「擇ウデ」、狂言記に、「呼うで」喜うで」及うだ」とあるから、同時に、打ちませてつかつて居たようである、そうして、江戸時代になつて、「びて」も、「みて」も、どちらも、「んで」の方に一定して、今でわ、全國、大抵、そうなつて、「うで」は、西國の方に、處々、少しばかり殘つて居るのである。

○カ行四段活用の動詞の「行きて」行きたり」に限つて、「いつて」いつた」「たら」たり」と

【一〇三】動詞　賴うで　讀うだ　行つて

なつたわ、不思議である、是れは、室町時代からのようで、同時に「いて」「いた」とつゞめたものをまぜて、後には「いて」「いた」とばかりになつた、(今でも、畿内、西國では、そうであるが、東國では「つて」「つた」である、)是れは「因りて」を「よて」と云い、「以ちて」を「もて」と云うと同じであろう、けれども「いて」「いた」わ用いぬがよい、又「かようになりゆいたのわ、心がらである」、などゝ云うこともある。

○「行きて」「行きたり」の「いつて」「いつた」となつたもの、

室町時代

史記抄、四、七　ドコヘイッテモ、驕テ、人ヲアナドリテ、同、九、八　荆蠻ニ奔テイッタホドニ、同、十、三九　其屬ヲツレテイッタゾ。同、十、五九　他國ヘイッタナラバ、必アタヲナシテ、ワルカラウズ。同、十一、七七　イッツ、カヘリッ、シタゾ。

○「いつて」「いつた」の「いて」「いた」となつたもの、

史記抄、六、二九　秦軍ノニグルヲ追テイタゾ。同、六、三九　數千人デ、南陽ヘイタゾ。同、十六、一二　生ケドリテ、モッテ、イテ、ニガイテハ大事ゾ。孟子抄、一、二六　穆公ノ、アノヨヘッレテイテ、ツカワレウト云テ、ニクンデシタゾ。山崎宗鑑辭世(天文中)宗鑑は、いづくへいたと、問ふならば、用が出來たで、あの世へといへ。狂言記、靱猿、あれへいて、御禮を申せ。同、墨塗、暇乞にいたものであらうか。同、伯母が酒、早う出ていて下されい。同、右近左近、身共も行く、左近もいた。江戸時代、醒睡笑、一、福は、よいから、よそへゐたものを、諸國盆踊唱歌、大和、梅と、櫻と、よしのへいたら、梅はすいとて、もどされた。同、肥前、おばごのかたへ、かたびら一枚、かりにいた。

【一〇五】熟語で名詞となる事も多い、「讀み切り」「動め續き」などである、又一音の動詞わ、多くは、熟語で名詞となる、「心得」「往來」「晴着」「空似」「花見」などがそれである。

○第二活用形を、「讀み物」「落ち葉」などつかうのは、名詞形と名詞とが、熟語になつたのである、又「泣き〳〵」話す」「重ね〳〵」難儀する」などと云うのわ、動作の繰返されるのを云うので、熟語となつて、變わつて、副詞となる、一音の時わ、「顔を見い〳〵」挨拶する」などと、母韻を引く、又「懲り〳〵する」「延び〳〵する」「晴れ〳〵する」(受身の助動詞に「追われ〳〵して」、使役の助動詞に「讀ませ〳〵する」)などと云うのわ、意味を深く云うので、「する」と熟語となつて、動詞となる。

○又、第三活用形の、名詞となることがある、古今集、春、上に「やよひに、うるふ(閏)月のありけるとし、よみける」、「陽炎(かぎろひ)角力(すまひ)人の名などに、「(黨實)」「(登渡)」

【一〇六】 萬葉集、二「佐田の岡邊に侍宿爲に行く」後撰集、春、上「君のみや、野邊に、小松を、引きにゆく、我もかたみに、つまむ若菜を」。「本を讀みわしたが、字を書きわせぬ」、飯を食いもしたり、茶を飲みもしたり、」

【一〇九】 すべて、文語の動詞、形容詞、助動詞の連體形を、口語には、終止形に用いる、かようになつたのわ、いつ頃から始まつたか、平安朝時代の靈異記、上の訓釋ニ「負、マクル」類聚名義抄に、「去、イヌル」「晧、ヒノイヅル」「熟、ニユル」新撰字鏡に「吠、犬乃保由留」「醯、魚乃曾己禰」「太々禮留」などゝ、連體形でも書いてあるが見える、

○連體形の、終止形となつたもの、

平安朝時代

今昔物語、廿六、下、觀硯上人在俗時値盜人語、 今ハ可敎ニ、此ク遙ニ將行ハ、何ト心モ不得思ユル、見返テ、恐々見レバ、云々、(何の掛りを、連體形で結んだのでもあろうか、) 同、廿六、下、東小女與狗咋合互死語、 此狗ノ爲ニ、被咋敎ナントスル、病无クシテ、人ノ見時、云々、 同、廿八、上、祇園別當威秀被行誦經語、 良久ク、否尋子會ヒ不奉ズトテ、使、返リ來ヌル、而ル間、云々、 同、三十、夫死女人後不嫁他夫語、 祖、亦、他ノ夫ヲ合セムト爲ルニ、云々、父ノ云ク、云々、尙合セムトスル、娘父母ニ云ク、云々、

寶物集、上、 心ある人は、この世をば、さらに、うつゝとはおもはざるとなん。 同上、 五百由旬のやまかゝちは、ちいさきむしのためにくはるゝ、蒼海の魚は、くらきをいとひて、出離をもとめ、云々、 同、上、 されば、ちくしやうとは、生をたくはふるとかくなり。 同、中、 たとひ、人、われをころさむとするとも、われは、人にうらみをなすべからず、あたをば恩にて報ずるといふ事あり。 同、中、 よろづの物を見て、ほしきと思ふ、云々、心に物をあんじて、思ひ出し、ほしと思ふ。 同、中、 紫式部、そらごとをもつて、源氏物語をつくりしゆへに、地ごくにおちて、苦患をうくるはやく源氏をやきすて、云々、 同、中、 かやうの事をも、しりながらも、酒をこのむものもおほく侍る、よく〳〵つゝしみ給ふべきなり。 同、中、 愚しやの作るつみ、すくなけれども、地ごくにおつる、と弘法大師は仰ける也。 同、中、 只

【一〇六】【一〇九】 動詞 連體形が終止形となつたこと

今、鳥べ野へ、をくりまいらせぬるといふをきゝ云々、」

鎌倉時代

平治物語、三、頼朝被ㇾ定ㇾ遠流事、今日斬ルヽ、明日失ハルヽ、ナド聞ヘシカドモ、其日モ延ケレバ、云々、(下に、語を略したものか)

平家物語、一、妓王の事、たとひ、みやこを出さるゝとも、云々、岩木のはざまにてもすごさん。

古今著聞集、九、扨、頼光は、其より歸りける。

吾妻鏡、元暦二年、四月十五日、其氣ニテヤラン、是ハ、イタチニヲヅル。

砂石集、二、馬ヲヒカヘテ、物語スル、弋瀬河ニテ死ベカリシ身ノ、云々、同、

三、アハレ、マケヌルトキコユル人モ、云陳ジ申習ナルニ、云々、

室町時代

曾我物語、一、かはづの三郎うたれし事、天のあたへをとらざるは、かへつて、とがをうるといふ。

幸若、入鹿、諸卿殘らず參内ある、鎌足、憚り御不參なり。同、百合若、御勢は三十萬騎と記さるゝ、その外、以下のつはものども、云々、申さんとすれば、泪落つる、申さずば、知召さるまじい」。飯をまるめてそなふる、この鷹、嬉しげにて、飯をくはへ、云々、岩間に、鳥の羽、少し見ゆる、大臣、怪しく思召し、筑紫の博多に吹き着くる、ありがたしとも、なか〳〵に、申すばかりもなかりけり。

幸若、敦盛、船を招き寄せうず、ものと思召し、同、和田酒盛、十郎がさゝうず、男ならば、取て呑まうず、同、烏帽子折、太刀を取らせて行かうずか、史記抄、六、七〇、太后ノ喜マウズホドニ、などは、却て、終止形を、連體形につかつたのである。

史記抄、十、五三　馬車ヤ、女ヤナンドガアル、ト云モ此心ゾ。同、十、七八　掠ハ、カスムルトヨムゾ。

孟子抄、七、一四　一人ノ心得ガ惡ケレバ、内輪が破ルヽ、ソコデ、他カラミカケテ、伐テトルゾ。

閑吟集、かわ柳は、水にもまるゝ、ふくら雀は、竹にもまるゝ、都の牛は、くるまにもまるゝ、野べの薄は、風にもまるゝ、茶うすは、引木にもまるゝ、げに、まこと忘れたりとよ。新茶のちやつぼよ、なふ、いれてののちは、こちや

【一〇九】動詞　連體形が終止形となつたこと

しらぬ〳〵。我おもひ、うちにある、色や、外に見えつ覽。

狂言記、宗論、同道致さうと存ずる。其方に、ちと意見をしたい事がある。

同、ひめ糊、六七騎にて追かくる。同、酢蕪、いかにも、辛き物にて候、と申上ぐる。同、伯母が酒、七つ過ると、いかめな鬼が出まする。同、生捕鈴木、重家、こての繩を免し、云々、御前にひきすゆる、又、其時、頼朝、云々、同地藏舞、あれに、火の光が見ゆる、さらば、あれへ行て、宿を取らう。同、墨塗、身共は知らぬ。

江戸時代

徒然草抄、上、莊子等ヲ以テ書タル、トミヘタリ。

おきく物語、夫ゆえ、茂介妻の恩をば忘れぬ、と高虎申され候由、

醒睡笑、一、有時、行脚の比丘來るに、件の旨を語りきかする、卽、我ゐてみんといふ。彼聖、年月を經て後、頻に入定せんと披露する、各、涙を流して、名殘ををしむ。人くらひ犬のある處へ、云々、虎といふ字を、手の内に書て見すれば、くらはぬ、とをしゆる、後犬を見、云云、同、四、歌の點を望みて參らせあぐる、兎角、よろしからねば、云々、同、七、酒宴なかば、舞舞の出たりし、上座より、其方は、なにがかりぞと問ふに、同、七、忍びて起出る、小人、聞つけ、後より、そと行く。

戲言養氣集、お天神ぢやとて、うしろを、ほとほとと打たれば、八幡、なしそ、しやだんが破るゝ、と云た、

あづまの道の記、熱田の宮に、古井あり、弘法ほられたるとなり、猶、其奥に、清水あり、是は、本社の内より流れ出るとや。

東海道名所記、舞坂、誠に、世の中に、鬼はない物ぢやと、樂阿彌もかんじておる、されば、云々、

鎌倉時代以後わ、「落つ」「受く」「寢來」「爲」「被」などの終止形わ、殆ど、亡びたといつてもよいくらいで、すべて、連體形を用いて居る、殊に、江戸時代以後わ、「落ちる」「受ける」「ねる」「れる」などとなつて、全く、連體形となつた、今でも、九州にわ、古い形で、「落つる」「受くる」などゝ云つて居る所もあるが、やはり、「落つ」「受く」わ、亡びて居る。

○文語の終止形わ、他動四段活用も「解く」、自動下二段活用も「解く」、自動四段活用も「立つ」、他動下二段活用も「立つ」であつたが、今の口語の終止形わ、他動に「解く」、自動に「解ける」、自動に「立つ」、他動に「立てる」となつて、區別わよくなつたしか

【一〇九】 動詞 連體形が終止形となつたこと

し、終止も、連體も、「解ける」「立てる」となつたので、紛れる事が起つて、一得一失である。

○今の口語で、ワ行五段活用の動詞の語尾の上に、アの段の音のあるものゝ終止形、連體形を、元のアの段の音のまゝに、「たゝかう」(戰)「やしなう」(養)「わらう」(笑)「はう」(這)「まう」(舞)などと云うわ、關東、奥羽、靜岡縣であつて、愛知縣、山梨縣、長野縣、新潟縣、から西わ、九州までわ、アの段の音を、オの段の音に變へて、「たゝこう」「やしのう」「わろう」「ほう」「もう」と云うのをまぜてつかつて居り、其内に、「かう」なう」「らう」などとばかり云う所もあり、(京都、大阪わ、アの段の音である)又「こう」のう」「ろう」などとばかり云う所もあり、又、稀には、終止形の時にわ、「かう」「なう」「らう」と云い、連體形の時にわ、「こう」「のう」「ろう」と云う所もある、今わ全國に多い「かう」「なう」「らう」などの方にきめた。

東國の方でも、武藏、群馬縣の處々、栃木縣の那須郡、足利郡の中部、并に、北海道の松前などに、「こう」「のう」「ろう」と云ふ所があり、茨城縣、福島縣の平、會津、宮城縣、岩手縣にわ、兩方まぜて云つて居る所もある。

又、千葉縣の海上、安房二郡、福島縣の白河、二本松、福島、相馬、島根縣の仁多郡などに、「かあ」「なあ」「らあ」などゝ云う所もある。

但し、第二活用形を、「て」「た」に續ける時わ、關西でわ、一般に、「たゝこうて」「やしのうた」「わろうて」「ほうて」「もうた」と云い、關東でわ、「たゝかつて」「やしなつた」「わらつて」「はつて」「まつた」などゝ云う。(此邊りかわりの事わ、前の五段活用の「て」「た」につゞく所(一〇三)で說いた)

【一一〇】連體形わ、重ねても用いられる、「食のすゝむ力のつく藥」、「雨の降る路のぬかる日」

【一一四】前に、第何活用形わ、助動詞の何に續くと云つて、其助動詞の意味わ、助動詞の處で、說くことにしてあるから、こゝの第四活用形も、助詞の「ば」に續くとばかりで、其意味わ、助詞の「ば」の處で說く筈であるが、其意味わ、動詞と「ば」と續いた上で出來るのであるから、こゝわ、少し異例となる。

【一一五】【一一六】【一一七】既に定まつた意味に云ふにわ、「思えば〳〵悔しい」、「見ればまだ年の若い人」、「年わいくつかと聞けば、十五と答えた」などゝも云う、又、「一同でした事であれば、一人の功でわない、先生であればこそ、敬うのである」、「などわ、「故に」の意味ともなり、「親があれば、子がある」、「一人がよいと云えば、

一人が惡いと云う」などわ、既に定まつた意味にも「故に」の意味にも、事柄を並べる意味にも取られる。

文語でわ、動詞の各種活用の第一活用形に「書がば」落ちば」受けば」來ば」せば」（助動詞の中にも、こうなるのがある）と「ば」を附けて、將然の意味に云うが、口語に わ亡びて、（稀に「毒食はば皿まで」殺さば殺せ」言はゞ何々」申さばかよう〳〵」などゝ云うわ、文語の委の殘つて居るのである）第四活用形に「ば」を附けた已然の形を、將然の意味にも已然の意味にも用いる、但し、形容詞、助動詞に稀に用いる、「無くば」嬉しくば」行きたくば」來なくば」（「無ければ」嬉しければ」行きたければ」來なければ」に對する）助詞の「たら」（ば）「なら」（ば）などわ、文語の將然の面影である。

「書けば」落ちれば」受ければ」來れば」すれば」などを「かきゃあ」おちりゃあ」うけりゃあ」くりゃあ」すりゃあ」などゝも云うが、言葉が下品に聞えるから用いぬがよい。形容詞の「善ければ」嬉しければ」助動詞の「讀まれゝば」書かせれば」見たければ」行かなければ」接尾辭の「男らしければ」などを「けりゃあ」れりゃあ」せりゃあ」などとも云うも同じである。

【一一八】未來形、推量形わ、それ〴〵の意味を云つて、終止形となる。

文語の四段活用で、未來、推量の意味を云うにわ、「書かむ」指さむ」立たむ」言はむ」など云うを、今の口語でわ、「かこう」さそう」たとう」いおう」と云うこと、全國、大抵、その通りである、（京都大阪邊でわ、未來に「書こう」指そう」、推量に「書くやろう」指すやろう」と言分ける）「む」の子音がなくなつて、母韻の「う」ばかりとなつたので、次の上一段、下一段活用、カ行變格、サ行變格活用、受身使役等の助動詞のも、同様である。

稀にわ、「あらむ」限りの力を出して」、此世のあらむ」限りわ云々」など云ふこともある。

武藏の處々、岡山縣の赤磐郡、宮崎縣の處々に「かかう」ささう」と云う所があり、三河、出雲の處々に「かかあ」ささあ」と云う所があり、山形縣の東田川郡、富山縣、福井縣、岐阜縣、滋賀縣、三重縣の南部、京都、大坂、丹波、兵庫縣、宮崎縣の處々に「かこ」さそ」とばかり云う所があり、島根縣の簸川郡に「かか」ささ」とばかり云う所がある、第二の音まで「か」さ」と云うわ、文語の音の殘つて居るのである。

○「む」の「う」となつたもの、（「ふ」とあるのも「う」である）

【一一八】動詞　五段活用の未來形推量形

平安朝時代

四段活用の未來、推量を、音便に云うようになつた起りわ、源氏物語の竹川に「はちらひておはさうずる、いとをかしげなり」。同、槇柱は「うちひそみて、なきおはさうず」。大鏡の序に「いさ給へ、むかし物語して、此おはさう人々に、云々、きかせ奉らん」。などで「おはさうする」わ「おはさむする」「おはす」と云う動詞に、四段活用のものがある、と見て云う。)の音便である、是れは、竹取物語に「さる所へまからむずるも、いみじくも侍らず」。などから變わつたもので、「罷らむとす」、「おはさむとす」を約めて、音便に濁らせたのである。

鎌倉時代

平家物語、二、少將こひうけの事、しばらく、少將をあづからうと申に、云々、

同、二、敎訓の事、胸板の金物、すこしはづれて見えけるを、かくさうと、しきりに衣をひきちがへ、同、四、競の事、まつさきかけて、いのちを奉らう、とこそ存せしかど、同、七、實盛最後の事、名乘れ聞かう。」寄れ組まう」わかやがうと思ふなり。

室町時代

曾我物語、おなじくさかもりの事、年よろふ人のさかづき、云々、たき口殿よりはじめよ。

幸若、百合若、助けて、さらば、戻らうずるか。同、烏帽子折、太刀を取らせて行かうずか。

史記抄、五、二〇　義理ヲ云ワウトスレバ、云々、同、五、二三　大ハヂヲカヽウゾ。同、六、二四　餘人ノ、沛ノ主ニナラウト云モノガナイゾ。

孟子抄、一、五　後代ニ、名ヲノコス事ヲシテヲカウ、ト云心ゾ。同、一、一四　我家ヲ取ヲイテ、人ノ家ヲトラウトシ、

閑吟集、なるこをかけて、花のとりおはう」。わごれうは、かへらうか。

狂言記、釣狐、いそいで參らう」。何しに僞り申さうぞ。同、宗論、身延參りをいたさうと存ずる」。夫れがようござらう。

伊曾保物語、宛がはうずと思定め、同、大きな荷があつたを、エソボ、これを持たうといへば、そちを買はうと思ふが、何とあらうぞ。

江戸時代

昨日は今日の物語、よきむすめをもつ、よき所へきもをいらふ、といへば、

いかほどの身上ぞ。

徒然草抄、上、イカヤウニ、ソシリワルクイハウトモ、クルシカラヌ也。

醒睡笑、一、江州六角佐佐木四郎と、三好家と、とりあひ、云々、時に、世の中をしらふ〳〵(知、四郎)といひけれど、云々」、其代りに、われが仁王經をよまふぞよ。

犬子集、二、春、下、櫻　心ぼそや、ちらふとおもふ、いと櫻。

吾吟我集、九、こゝも又、それといわうが、島なれや、數のそとばを、波にながせば。

正章千句、二、花、雨と露、ばかりで花が、ひらかふか。

東海道名所記、水口、ひらにとまらせられい、餡汁をいたさうか。

諸國盆踊唱歌、播磨、かみをしまだに、いはうよりおかた、心しまだに、もちなされ。

末の「う」なしで云つたものわ、狂言記、相合袴に、「案内をかを(請はう)物も、(物もうそう)お案内、これが一段でござろ」。同、烏帽子折に、「まづ、烏帽子を持つて、いそいでまゐろ」。同、釣り女に、「釣ろよ〳〵、おかつさま釣ろよ」。諸國盆踊唱歌、伊豆に、「じつにそふなら、なまづめはなそ、おれは五つの、ゆびをきろ」。同、阿波に、「雨がふろ」とて、おきからくもる、むすめさろとて、むこがこぬ」。淋敷座の慰、のほゝんぶしに、「戀てしんきや、身はかげろうの、いつかめぐりて、君にあを」。などと見える、今も、滋賀縣、京都、大阪、兵庫縣あたりで「書こ」指そ」と云つて居ると云う事わ、前に云つておいた。

○文語のナ行變格活用の「死なむ」往なむ」を、口語に「死のう」往のう」と云うわ、全國、皆、同じである。

室町時代

史記抄、十、三　老子ノ、イナウトセラルゝゾ。同、十一、二九　民百姓ハ、上ヲハナレテイナウゾ。同、十一、五三　思キリテ死ナウトスルハ、勇ナリ。同、十一、九八　死ナバ、我モ死ナウ、生キバ、我モ生キウズ。

孟子抄、八、一七　死ナウ處デハ死ナヌ、死ヌルマイ處デ死ヌレバ、惡ゾ。同、九、二四　ソコデ、イナウトテ、隱レテ、微服ト云テ、キタナイ服デ、イナレタゾ。

狂言記、釣リ女、めん〳〵に、脊に負ふていなう。同、文山だち、書置をし

て、死なうではあるまいか。同、附子、附子を喰うて死なうと思うて、

江戸時代

醒睡笑、七、かつゑ死なうかと思ひ、ふびんさに、泣いたよ。同、七、まちと、こらへられたらば、殺さずとも、かたきが死なうものを。

西翁十百韻、岩城にて、花の陰、宿をかさずば、出ていなう。

松の葉、一、葉手、まつにござつた、いとしのきみや、のう、こんやござらざ、かれしのう。

○ラ行變格活用の「あらむ」居らむ」を、「あろう」おろう」と云うわ、全國の口語、すべて、同じである。

室町時代

幸若、信田、承る事も、ありあらうず。

史記抄、四、三九 上ニアラウズ勢ハ、下ニクダリ、同、六、四七 サアラウニハ、ナントセウゾ。

孟子抄、一、三 機ヲ截テステ、此如クニアラウゾ、男子ノ學問セヌハ、ト云タゾ。

狂言記、宗論、何と、聞いた事があらう。同、相合袴、あまが崎から、聟が來るやら、かさをさいて居らうぞ。

狂言記の二千石に、「しざり居ろ」、夫へ出て聞き居ろ」、などゝ「う」を約めて云つたのも見える、但し、是れは、命令につかつたのである。

伊曾保物語、其咎めのあらうずる時は」、何の仔細があらうぞ。

江戸時代

醒睡笑、二、そち體さへ、知りたるゑびを、我が知らいでをらふか。同、五、あの松は、男松であらふか、妻松であらふか。

西鶴五百韻、あの松原に、寺があらふか。

好色五人女、五、金銀も持あまつて迷惑、是は、なんとしたものであらふ。

雜兵物語、下、玉箱持、夫を證據にするであらふ。

○文語でわ、上二段活用の未來、推量を、「起きむ」落ちむ」と云うを、口語でわ、東國、松前、一圓から、西わ、播磨、但馬、和歌山縣、香川縣、あたりまで、大抵、「起きよう」落ちよう」と云い、(京都、大阪も、そうである、)丹波、德島縣、愛媛縣でわ、「起きよう」落ちよう」に、「起きょう」落ちょう」をませ、高知縣では、「起きゅう」落ちゅう」をませ、岡山縣

鳥取縣から西は、山口縣まで「起きゅう」落ちゅう」で、尙「起きよう」落ちよう」起きよう」落ちょう」をませ(島根縣)九州わ、大抵「起きゅう」落ちゅう」で、稀に「起きよう」落ちよう」(佐賀縣處々、宮崎縣處々)「起きよう」落ちょう」(福岡市)をまぜて、つかつて居る、今は「起きよう」落ちよう」に定めた。

和泉に「强ゆう」試みゅう」など云う所がある。

尾張、岐阜縣、福井縣、丹波に「起きよ」落ちよ」など云う所があり、富山縣、三重縣の南部、京都、大阪、丹波に、きょう」落っちょう」と云う所があるが、アクセントがちがう)など云い、宮崎縣「起きよ」落ちよ」(命令と同じであるが、アクセントがちがう)など云い、宮崎縣に「起きゅ」落ちゅ」など云い、又、山形縣の庄内、越後、佐賀縣に「起きろう」落ちろう」と云い、美作に「强いろう」などと云う所がある。

鎌倉時代

延慶本平家物語、二、石橋合戰事、股野ハ、云々、下ニナル、云々、ヲキフ〳〵トシケレドモ、佐奈多、上ニ乘居タリケレバ、叶ワジトヤ思ケム、云々、

室町時代

幸若、烏帽子折、一期のうちを、らく〳〵と過ぎうずる事の嬉しさ、

史記抄、三、二四　死デ、以前ノナサケニムクユウズルゾ。同、四、三九　上ニアラウズ勢ハ、下ニクダリ、黨與ガ、下ニデキウゾ。(「デコウ」ともある、次のカ行變格活用の未來、推量の處を見よ)同、七、二　其人モ、骨モ、朽チウズルゾ。同、十、七二　齊ヘ深入ラントト思ドモ、云々、韓魏ガ、ウシロヅメヲカセウズラウト思テ、ヲヂウ(怖)ゾ。同、十、七九　木ヘ上テ、ヲリウカ、上ラウカト、二端ノ心ノアルモノヂヤゾ。同、十一、九八　死ナバ、我モ死ナウ、生キバ、我モ生キウズ。

孟子抄、五、一八　ソレヲ一人シテセバ、只、天下ハ何トシテスギウゾ。

狂言記、抜殼に「酒、云々、も一つ喫んませう、過ぎすげうがな」と「過ぎう」を過ぎょう」と云つてあるわ、中國邊で「落ちう」を「落ちょう」とも云うと同じである。

江戸時代

醒睡笑、六　物を、いかにも、ちとづゝくれらるゝ、おほくくふたらば、喉にろができうか、とおもうてやら、

○文語の上一段活用でわ、未來推量を云うに「着む」見む」など云うを、今の口語

【一一八】動詞　上一段活用の未來形推量形

でわ、東國、松前、一圓から、西わ、播磨、但馬、四國、一圓まで「着よう」見よう」と云い、(京都も、大阪も、そうである、)岡山縣、鳥取縣から西わ、山口縣までわ「きゅう」みゅう」で、稀に「着よう」見よう」きょう」みょう」をませて云い、(島根縣)九州わ、大抵「きゅう」みゅう」で、稀に「着よう」見よう」(福岡市、小倉市、佐賀縣處々、宮崎縣處々、)をませてつかつて居る、今わ「着よう」見よう」にきめた。

富山縣にも「射う」着う」又わ「きょう」みょう」と云う所がある。

三重縣の南部、和歌山縣の新宮、丹波に「着よ」見よ」(命令と同じである、)と云う所があり、青森縣、山形縣の庄内、越後、筑前、佐賀縣、熊本縣、大分縣、宮崎縣に「着ろう」見ろう」と云う所があり、又、宮崎縣、鹿兒島縣に「着ろ」見ろ」とばかり云う所もある。

室町時代

幸若、烏帽子折、　この冠者が着うずる烏帽子は、　同、和田酒盛、　座には、云々、九十三騎、くるま座に、ばらりと居ながれ、すけなりがゐうずるざしきはなし。

史記抄、十、七三　東周ニ、ヒッコウデ、イウ(居む)ズホドニ、　同、十二、一〇　思案シテミウト云ゾ。

孟子抄、一、一〇　孟子ヲミフト志ス者多ケレ共、　同、四、一七　似フズ事デモナイ。

閑吟集、　ふて丶、一度いふて見う、いやならば、われもたゞ、それを限り、

狂言記、釣狐、　そと見うと存ずる。

江戸時代

昨日は今日の物語、　さらば、それを見う、とおほせければ、

醒睡笑、八、　眦、眉目よし、ま一度、顔見う、と世話にいふ。

○文語の下二段活用の未來推量の「受けむ」捨てむ」を、口語でわ、東國、一圓から、西わ、畿内、和歌山縣、播磨、但馬あたりまで、大抵「受けよう」捨てよう」と云い、佐渡、富山縣石川縣、福井縣、岐阜縣、愛知縣、和歌山縣の一部、丹波、丹後、四國でわ、「受けよう」捨てよう」と「受きょう」捨ちょう」がまざつて居り、(京都わ、「受けよう」で、大阪わ、二つまざる、)岡山縣、鳥取縣から西わ、專ら「受きょう」捨ちょう」で、稀に「受けよう」捨てよう」がまざる、(島根縣)九州でわ「受きゅう」捨ちゅう」で、稀に「受けよう」捨てよう」(佐賀縣處々、宮崎縣處々、)「受きょう」捨ちょう」(福岡市、大分縣の一部、宮

崎縣の西臼杵郡)がまざる、今わ「受けよ」「捨てよう」に一定した。
福井縣、丹波に「受きよ」、など云う所があり、三重縣の南部、山城、丹波、和歌山の新宮に「受けよ」「捨てよ」(命令と同じである)など云い、宮崎縣に「受きゆ」「兼にゆ」など云い、山形縣の庄内、越後に「受けろう」「捨てろう」など云う所がある。

平安朝時代

源氏物語の若菜、上に「ねう〳〵」と、いとらうたげになければ、云々」とある「ねう〳〵」わ、猫の聲である、同じ若菜、下に「戀わぶる、人の形見と、手ならせば、なれよ何とて、なくねなるらむ」とある歌を、契冲阿闍梨が「人ノ形見トテ、手ナラセバ、吾心知リガホニ、汝ヨ、何トテ、寐ウ〳〵トハナクゾト、思フ人ノ、吾ト寐ン」ト云ヤウニ聞ナセル也、なくねなるらむ、トイフニ、意ヲツクベシ」。と解いた、此頃に、もう「寐む」を「ねう」とも變えて云つたのである、木工權頭爲忠朝臣家百首の中の源頼政の歌と見える幾見戀の「猫の緒に、かゝりし簾の、はさまより、ほのみし人を、ねう」とこそ思へ」と云う歌の「ねう」も「寐む」で、猫の聲に言ひかけたのである、數年前、京都の建仁寺中から堀出した、經筒か何かの中から出た極樂願往生歌四十七首わ、以呂波四十七字を歌毎に、首尾に置いて詠んだもので、片假名書きで、末に「康治元年壬戌六月廿一日壬午日」(近衛天皇御宇)とある、其中に「ウシャウシ、イトヘヤイトヘ、カリソメノ、カリノヤドリヲ、イツカワカレウ」、とある歌わ、首尾に「う」の字のある歌で、此末の「ワカレウ」わ「別れむ」の變わつたものである。

鎌倉時代

平家物語、二、西光がきられの事、當家かたぶけふとするむほんのともがら、同、二、敎訓の事、これへまれ、御幸をなしまいらせう、とは候へども、同、五五節のさたの事、惡盜二人、にげこもりたりしを、よつてからめふ、と申もの、一人も候はざりしに、同、九、一二のかけの事、西の手へ寄て、一の谷の、まつさきかけうといひければ、同、十二、壬佐房切られの事、津の國、渡邊にて、逆櫓、立てふ立てまじの論をして云々、

平家物語、七、實盛最後の事に「寄れ、組まう、手塚、とて、はせならぶる所に、手塚がらうどう、主をうたせじ、と中にへたゝり、齋藤別當にをしならべて、むずとくむ、齋藤別當、あつはれ、己れは、日本一の剛の者と、くむで、うずよなうれとて、我が乘りける鞍のまへわに、をし付て、ちつともはし

【一一八】 動詞 下一段活用の未來形推量形

たらかさず」。とある中の「くむでうずよなうれ」わ、解しがたい語として
あるが、眞字本平家物語、(木村正辭藏)七、にわ「己組日本一甲者汝等、「よな」
わ、感動詞「うれ」わ「己」ノ轉、人ヲ賤メテ呼ブ語、神武紀六、爾、此云飫例)と書
いてある、「組みて」が、「組んで」となり「てむ」が「でう」となつたのである。
古今著聞集、十九、かいもちぬ、くれうといへば、云々、

室町時代

義經記、ころも川合戰の事、あづまのかたのやつばらに、手なみの程をみ
せてくれうず。
幸若、鞍馬出、その馬を捨てゝ、御通候へ、あつたら馬を捨てうより、やあ、下
りて引け、との御諚なり。同、烏帽子折、烏帽子、云々、やがて、折つて參ら
せう。御身が名をば、京藤太とつけうぞや。汝が牛には、草を苅りてか
けうぞ。盜人どもが、云々、夕去の八つの比に寄せうぞ。きやつばらは、
掾の下に隱れうぞ。
史記抄、三、三三　涯分、扶持ヲクワヨウナンド、云フ。同、四、五八　秦ノ地
ヲ全シテ、フマエウゾ。同、四、六一　一ツニナツテ、秦ヲヨワメウトスル
ゾ。同、四、六四　六國ト云ハ、ドレ〳〵デアラウゾ、六國ニ、ドレヲソナヘ
ウゾ。同、五、三一　楚ハ破レウトスルカ。同、六、一一　皆燼テ失セウゾ。
同、六、一三　責メウトモセヌゾ。
孟子抄、一、二　何トシテ義理ヲツケウゾ。同、一、六　行迹ノ高キ事ハ、天ノ
浮雲ニモタクラベウゾ。同、一、二〇　何トシテガナ、百姓ヲタスケウト
思フ心ガ有タゾ。同、二、一六　其樣ナ無道ナ物トハ、中ヲタガウテ、ステ
ウマデゾ。同、三、三八　善ヲ勸メウ爲デハアルマイ。
閑吟集、いとおしがられて、あとにねうより、にくまれ申て、おそくねう。
狂言記、鞠猿、どれへぞ、野遊山に出うと存ずる。同、宗論、廿日、三十日、手
間も取れうも知れぬ。先へも行かぬ黑豆を數へうより、愚僧が弟子に
ならしめ。同、萩大名、御意なうても、申上げうと存ずる所に、一段でご
ざりませう。いかほども褒めうもの、夫れならば、御目に掛けうほど
に、かう御通りなされい。同、ひめ糊　此度、折檻の加へうずれども、かさ
ねて折檻の加へうずる。
伊曾保物語、わが腹中をひるがへいて、御目にかけう。あれこそ、其熟柿

【一一八】動詞　下一段活用の未來形推量形

をばたべたれと、はねかけうずるに」、買うてから後に、逃げうと思ふは、何と、

江戸時代

昨日は今日の物語、大なゆ(大地震)がゆりまして、御きもつぶれうと申」、なんばんかうやく、云々、其かうやく、申うけう。

飛驒組、(慶長三絃組唄)明日は出うずもの、舟が出うずもの、思たげもなく、お寢る殿御よ。

醒睡笑、二、此ぞうすいに、胡椒はいらぬか、それならば、ちとたべうと、同、六、くふて、ひだるさをわすれう。同、六、聲の高きに、目がさめうずらう。

正章千句、七夕、若後家も、是非たてふとや、おもふらん。

小栗の判官、せみやうの段、おぐり殿、云々、鬼かげが、のせふ(乘)けしきと、見えてけり。同、三、かつべきいくさに、まけふでなし。

諸國盆踊唱歌、越前、相生みよより、かいじやうみやれ、こびんなでふ(撫)より、櫂なでふ。

後撰夷曲集、七、題知らず、子をすてふ我身は若き後家なれば、同、九、曉鶏、はた〳〵と、關の戸ならぬ、羽をたゝき、こゝあけうよと、鳴か庭鳥。

鹿の卷筆、一、筆屋のじゆりやう、そなたの名は、つぎのぶとつけうとて、松の葉、一、葉手、はでかたばち、われらも、さまにやつれ、いのちすてうずもの。

松の葉、二、長歌、さんやをどり、きみがねみだれがみを、いつかわすりよぞ。

○文語のカ行變格活用の「來む」を、關東、奥羽、靜岡縣、山梨縣、長野縣の口語にわ、大抵「こよう」と云い、尙、尾張、岐阜縣、京都府、奈良縣、大阪府の豐能郡、島根縣の簸川郡、佐賀縣、宮崎縣の處々にも、そう云う所があり、又、武藏、群馬縣、栃木縣、茨城縣、福島縣、山形縣、青森縣、松前、山梨縣、長野縣、遠江、尾張の津島、岐阜縣、京都府の綴喜郡、河内、香川縣、大分縣、宮崎縣の處々に、「きよう」と云う所があり、又、武藏の入間郡、群馬縣の新田郡、山形縣の庄内、西田川郡、飽海郡、新潟縣、それから、富山縣、石川縣、福井縣、滋賀縣、愛知縣から西わ、中國、四國の處々に「こう」と云う所があり、(京都わ「こう」で、大阪わ「こう」きよう)九州でも、福岡縣、熊本縣、大分縣、宮崎縣に、そう云う所がある、しかし、命令にも、未來、推量にも、「こう」と云う所があつて

【一一八】 動詞 カ行變格活用の未來形推量形

紛れやすくもあるし、上一段、下一段活用と、語路を一つにして、今わ「こよう」に決めた。

未來、推量にも、命令にも「こう」と云う所わ、越後の處々、富山縣、石川縣、福井縣、滋賀縣の蒲生郡、京都府の船井郡、和歌山市、攝津の東成郡、岡山縣の都窪郡、香川縣の高松市、香川郡、仲多度郡、高知縣にある。

佐賀縣、長崎縣、筑後、熊本縣、大分縣、宮崎縣にわ、未來推量に「くう」と云う所があり、鹿兒島縣でわ「きゅう」、又わ「くう」である。

室町時代

幸若、烏帽子折、來うずる八月十五日に、宇佐八幡の御前にて、御放生會と申す事を執行はせ給ふべし。同、文覺、來うずるかた八十日、過にしかた八十日を占はせ給へば、云々、

史記抄、六、四九　イカニ、天子ハ尊ト云ヘドモ、父ガナウテハ、ドコカラデコウゾ。（「デキウ」ともある、前の上二段活用の未來推量の所を見よ）同、十、三一　ヤミノ夜ニ、馬陵ヘコウズト知タリ。

孟子抄、八、八　人ノ惡事ヲ、アナグリ求テ云ハ、後ニ、惡イ事ガデコウゾ。同、

八、一七　師匠ノ罪ハ、何カ有ゾ、後ノ惡ノデコウハ、兼テハ知レテコソト思フゾ。

狂言記、花子、　雨の降る夜に、誰が濡れて來うずらう。

江戸時代

古今夷曲集、九、　いかにねて、起る朝のへんがへぞ、昨日はこふと、今日はこまひと。

西鶴五百韻、　朝顏のはなのすけさま、貰てこう。

○文語のサ行變格活用の「爲む」を、口語で「しよう」と云うわ、靜岡縣、山梨縣、長野縣、越後から東一圓で、尙、愛知縣、岐阜縣、三重縣、滋賀縣、富山縣、山城、丹波、奈良縣、和歌山縣、河内、和泉、攝津の豐能郡、兵庫縣、島根縣、香川縣、佐賀縣、宮崎縣の處々にもある、又「しよう」と云うわ、愛知縣、岐阜縣、富山縣から西（京都も、大阪も「しよう」である、）中國、四國までゝ、尙九州の筑前、大分縣、宮崎縣にもある、其外の九州わ、大抵「しゅう」と云う、今わ「しよう」に定めた、上一段、下一段、カ行變格活用と、語路が一つにもなる。

東京でも「どうしょう、こうしょう何としょう」しょうことなしに」などゝわ、

【一一八】　動詞　サ行變格活用の未來形推量形

云う。

武藏、群馬縣の處々、山形縣の飽海郡にも「しょう」と云う所がある。

山形縣の庄内に「そ」又わ「そう」と云い、愛知縣、岐阜縣に「せよう」と云う所があり、滋賀縣の愛知郡と、膳所に「しょ」と云い、鹿兒島縣に「しょ」と云う所があり、三河の西尾でわ「しろう」と云う。

平安朝時代

和泉式部續集、上の歌の題に「おとせうといひたる人のおとせねば」とあるわ、(丹鶴叢書)「おとせむ」の音便で、これらが、古く、物に見えるものであろう、源俊頼の散木奇歌集の十、雜、下、隱題の中の拾遺抄(しふゐせう)の題の「しとねには、しういせうとぞ、思ひつる、したり顔にも、積る花かな」とある歌を、松屋筆記の七十一に解いて「小兒に、小便をせさするに、シイヲセヨと云ふ俗語あり、此歌は、下根を通はして、しとねといひ、それに、尿音をよせ、しふゐせうに尿せんといふよしをよせ、したり顔に、尿をしたりがほとよせたる也、尿をしふゐといへるは、その尿するおとの、シユウといへば也、然て、シイヲスルなどいふも、これ也、シトといふも、尿をしとゝ垂出す音よりいへる名也、古くは、シトといひ、さて轉りては、シフキともきゝ、シイともきくは、その垂出す音によれる也、花木の下根に立よりて、尿をせんとおもひつるに、はやくもしたり顔に、花がちりつもりたるよしの歌也」とある、これも「せむ」を「せう」と云つたのである。

室町時代

義經記、忠信吉野山の合戰の事、中差參らせて、現世の名聞とぞんせうずるに、云々、

幸若、烏帽子折、末世の衆生を罰せうずるにて候。同、富樫、勸進をせうずる聖が、勸進帳持では、如何候べき。

史記抄、五、二三　天下ヲバ、并呑セウトハ思フ上ニ、同、六、二三　ナントシテ、權柄ヲ專ニセウゾ。同、六、二七　秦ノ地ヲコソ、略セウズレ。同、六、四四　士卒ノ心ヲ安ゼウタメニ、同、七、一四　王者ガ、利ヲ本ニセバ、大夫モ、又、家中ニ、何トカ利ヲセウトセウゾ。

孟子抄、七、七　何ヲ手本ニセウゾナレバ、堯舜ヲ手本ニセウゾ。同、十二、一八　王者ノ出ラレタラバ、必、魯國ハ、如昔成ウ程ニ、損ゼウゾト、下心ニ思テ、損

【一一八】動詞　サ行變格活用の未來形推量形

ゼウ歟、益セウカト問ル、ゾ。

閑吟集、扇のかげで、目をとろめかす、ぬしあるをれを、何とかしようか、しようか〳〵しよう。

狂言記、宗論、御齋咄をせうより、法文を說かしめ。同、相合袴、盃、云々、さらば、智殿に進せう。同、鞍馬參、夜前、宿坊へ寄らなんだに因て、直に下向せう。

伊曾保物語、身が賞翫せうと思切つて居た其熟柿をば、

江戸時代

昨日は今日の物語、つえにせう、ばしらにせうと申され、

醒睡笑、五、にくいやつかな、あいつに、今度から、せうやうがある、とたくみ、

正章千句、七、自害をせうとすれども、えもせず。

後撰夷曲集、九、我心、鬼のこぬ間に、せんたくせう、欲垢ありて、隱れ期はうし。

西翁十百韻、獨吟、花ちらす、志賀の山風、何とせう。

諸國盆踊唱歌、和泉、かせがもの云や、ことづてしよもの、かせは諸國を、吹きまはる。松の葉、一、本手、うきよぐみ、とてもたつなに、ねてざれ、ねずともあすは、ねたとさんだんしよ。

○未來形、推量形を、名詞に續けるにわ、「成ろう事なら、こうもしたい、」あろう事か、あるまい事か、」なども云うが、用いることわすくない。

○上一段、下一段、カ行變格、サ行變格活用の未來推量の末を、畿內邊から東で わ、口語に、大抵「よう」と言うと云うことわ、前に云つて置いた、かような言い方も、室町時代からある。

室町時代

狂言記、柿山伏、人と鳥と見違へやう物の樣に、同、萩大名、今日、何方へぞ、出やうと存ずる」。歌、云々、一首、詠うでも見やうか。同、烏帽子折、賴うだ人の國と名を申して、囃事で尋ねやうず。同、伯母酒、甘いをすく衆へは、甘いで進じやうず、辛いをすいて參る衆へは、辛いを進じやう。同、惡坊、傘をかたげて、頭陀に出やうよ。同、鞨猿、私の方より申上げやうと存ずる。同、伊勢物語、其儀ならば、今一度寐やう程に。同、連歌毘沙門、梨、云々、此鋒で割らう、但し、錆びやうか。

【一一八】動詞　未來形推量形　よう

續狂言記、入間川、　向に、人が見ゆる、尋ねて見やう。

詠歌之大概、　かたいとを、かなたこなたに、よりかけて、こなたも、かなたも、あはひで、何に、玉のをにして、かけてゐようぞ、との心也。

江戸時代

醒睡笑、三、　坊主、いつも、鮎の名をかみそりとつけ、云々、彼僧、河をわたるに、云々、小者、うしろより、云々、かみそりがありくに、足をきり給ふな、といひければ、坊主、今は、八月なり、かみそりが、いかほどあると、さびようほどに、足はきれまい、とぞいへり。　同、五、　下臈一人、走り來り、さかばやしのもとにより、たゞ一重きたるもめん帶を解き、手に持ち、うへにきやうか、したにきやうか、下にきやうか、上にきやうかと、ひとりごといひしが、わざくれ、したにきよや、といふまゝ、内に入り、酒にかへ、よきかんにあつらへ、云々、

古今夷曲集、八、　年たけて、又きようとも、おもひきや、命なりけり、さやのお小袖。

後撰夷曲集、七、　ゆびきりや、地獄の釜へ、ほつたりと、おちようといふ、二世の契約。

諸國盆踊唱歌、越前、　相生みよより、かいじやうみやれ、こびん撫でふより、櫃なでふ。

○動詞の未來推量の形は、次のように變わつたのである。

四段活用	書かむ	書かう(かこう)	書こう
上二段活用	落ちむ	落ちう(落ちちょう)	落ちよう
上一段活用	見む	みう(みよう)	みよう
下二段活用	受けむ	受けう(受けきょう)(受きゅう)	受けよう
カ行變格活用	來む	こう(くう)	こよう(きよう)
サ行變格活用	爲む	せう(しよう)(しう)	しよう

受身の助動詞の「打たれむ」打たれう」打たれよう」可能の助動詞の「書かせむ」書かせう」書かせよう」過去の助動詞の「指したらむ」指したらう」指したろう」なども同じである。

「む」の「う」となつた初にわ「書かう」受けう」せう」と發音して居たのが、後にいつか、「かこう」うきよう」しよう」となつたのであろう「む」の子音のだまつて、母韻の「う」となるわ、通例であるから、「書かむ」の「書かう」となり、「落ちむ」見む」受けむ」來む」爲む」の「落ちう」見う」受けう」來う」爲う」となるわ、道理である「受きゆう」來う」爲う」わ、「落ちう」見う」の口調から出來たものであろうし、「落ちよう」みよう」わ、「受きよう」しよう」の口調から出來たものであろう、殊に、下二段活用の動詞わ、數が多いので、「受きよう」失しよう」捨ちよう」兼によう」止みよう」隱りよう」加よう」添よう」數よう」代よう」覺よう」据よう」など、末が「よう」となる口調が移つて(四段活用も、末わ、オの段の音となる)終に「落ちよう」見よう」受けよう」しよう」となり、此口調で「來う」が「こよう」となり、「しよう」の口調で、又「きよう」となつたのであろう、それであるから、「落ちやう」受けやう」などと「やう」と書くわ、道理のない事である。

○動詞の未來推量の形に、一つ變わつて居るのがある、それわ、愛知縣の名古屋市邊で、「行かあず」落ちいず」見いず」受けえず」來うず」爲えず」「打たれえず」助けられえず」と云い、三河、靜岡縣、山梨縣の一部、長野縣の西南部でわ、これを約めて「行かず」落ちず」見ず」受けず」こず」せず」「打たれず」助けられず」と云う、是れわ、平安朝時代の初の竹取物語に「彼のもとの國より、むかへに、人々、まうで來むず」土佐日記に「此歌ぬし、又、まからずといひて立ちぬ」「ら」の下の「む」の省かれたので、打消とまぎれる)などゝ見え、其外、諸書に「行かんず」取らんずものを」可からんずれ」あらんずらん」など見えて、是れわ「來むとす」まからむとす」行かむとす」など云うべきを、約めて音便に濁らせたもので、それがまた「來うず」行かうずる」あらうずる」などゝなつて、名古屋邊で「行かあず」うけえず」こうず」など云うわ、それから、また變わつたものである、然るに、それを、又約めて「行かず」うけず」など云うわ、打消と紛れて、未來、推量とわ、うらはらの、意味に解せられる。

○又未來推量を、關東の處々、(駿河の富士郡、伊豆)福島縣、宮城縣、山形縣、岩手縣、青森縣でわ、「書くべい」押すべい」起きべい」落ちべい」受けべい」捨てべい」見べい」着べい」こべい」きべい」すべい」しべい」などゝ云う。

或わそれを略轉して「書くべ」押すべ」書くべ」押すべ」起きべ」落ちべ」起きんべ」落ちんべ」着べ」見んべ」受けべ」捨てんべ」こべ」きべ」くるべ」くんべ」こんべ」すべ」しべ」すんべ」などゝも云う。

受身可能の助動詞の「打たれべい」助けられべい」、使役の助動詞の「書かせべい」建てさせべい」なども、右の例と同じである。又「見たんべい」など過去の助動詞にも「是れだんべい」だんべ」だべ」などゝ、指定の助動詞にもつかわれる。

右の「べい」わ、助動詞の「べし」又わ「べき」の音便であるが(子音がなくなつて、母韻ばかりとなつたのである、)連體形の「べき」で「そうしべい」もんでもない」おれも行くべいか」などゝもつかわれるけれども、多くわ、終止形の「べし」の音便につかわれて居る。

平安朝時代

平安朝時代(室町時代)にも「べい」が見えるけれども、すべて、連體形の「べき」の音便で、指定の意味のものである。

源氏物語、朝顔、はしたなくもあ(ら)べいかな。同、胡蝶、思へば、うらめしか(ら)べい事ぞかし。同、みをつくし、命こそ、かなひがたか(ら)べいものなめれ。

紫式部日記、おのが心を用ゐむことは、難か(ら)べいわざを、

室町時代

史記抄、五、二〇　漢王ノ出ヅベイ方へ、サシムケテ置タゾ。同、十四、七二

我ガ職ノスベイ事ヲシテ、理ノアルベイ樣ニ行ホドニ、治ハナニカアラウゾ。

孟子抄、四、二五　齊王、云々、王道ヲ行ヒッベイ人デ有ゾ、一タビ變ジタラバ、仁ヲスベイ人ヂヤ、ト思ハレタゾ。同、八、七　悅ベキニ當テ悅、怒ベイニ怒ルハ、和ゾ。

江戸時代

江戸時代の「べい」わ、終止形の「べし」の音便のもあるし、連體形の「べき」の音便のもあつて、指定、未來、推量の意味にもつかわれてある、いつ頃から用いて居たか、古い書物に見えぬから分らぬ、此終止形の「べい」わ、東國に限るようでもあるが、次に擧げる九州の豐後、肥後の盆踊唱歌にも、寶永の京都の唄

【一一八】　動詞　一種の未來形推量形　書くべい等

にも、延享の頃の京都の話にもある。

慶長十五年、名古屋城建築中の流行唄（如蘭社話、二十四）ゑいゑい、ゑいさう〳〵と、石を引、ゑいゑい〳〵といふて引間は、夢だんべいな。

醒睡笑、六、東（かう）にて、都の若き商人と、其宿なる中居の女房に相馴れ、云々、ほどなう、かへる頃になりぬ、云々、一しゆの三味線をつかはし、立わかれんとするに、「かたみとて、緒つけの板をば、さつくれて、けさいくべいか、あぢきなの身や」。

東海道名所記、西坂（日坂、野州生れの女の詞）、旅の殿さ、お草臥であるべいに、」夢にて、夜をぶちあかし給ふべいよな。

後撰夷曲集、六、手を出せろ、折てくれべい、ばか面め、（「一三〇」の末の「ろ」の所を見よ）

諸國盆踊唱歌、豐後、くんくるべいと、まつよはなくて、またぬよはきて、ちよんきりちよんかいな。同、肥後、つまよないけの、どんがめならば、くんくるべい、ヅボンボへ。

ト養狂歌集、上、關東の、雁や越路に、かへるべい、さらば〳〵の、いとまごひして。

雜兵物語、上、鐵炮足輕小頭、若、火もきえたんべいならば、替の火繩が澤山なほどに、云々、」眞甲をぶてば、なまくらものは、なべつるのやうになるべい。

松の葉、一、葉手、そもじと、われとは、いちごちぎるべいぞ、よもさ、しらがにこえだのさくと、ちぎるべいぞ、よもさ、

京都の六孫王社の寶永の祭の唄に、「寶永祭はみごとな事よ、誰も見にゆけ、ゆきなばいさ、ちと又此夜は、うさはらしの、上戸のおもひはこれなんべ、」一話一言の十一に、中村かしくといふ京都の舞臺役者の美少年があつた、招く客が大勢つかへて、まだ客があるといへば、跡から來た客は、それなら待つべい〳〵といふからして、自然と、松兵衛と名づけたとある（延享の頃）

○尙「べき、べし」の事わ、後の助動詞の末にも云う。

【一二二】本書の「一人わ、刀で切りかゝる、云々、」の例わ、過去の事を、目の前に見るように云うのである。「一昨年わ、水が出る、云々、」の例わ、「一昨年わ」昨年わ」と云

【一二三】動詞　現在の語を過去にも未來にも用いること

う過去の意味を持つて居る副詞句で、過去の事に聞えるのである、又「二三年、不仕合がつゞく、」「昨日から、風が吹く、」「雨が昨日今日降つて居る」など云ふわ、作用の引續いて居る場合に云うのである。

○本書の「私わ、花の咲く頃に行く、」などの例わ、未來の意味の副詞句に伴うから、「行く」が未來になるので、「來る三日に、演說會を開く、」「次の日曜日にわ、早く起きる、」「あの人は、明後日、出立します、」などもそれである、それのみならず、これわ、慥にきめて云う心もあるので、これを、「行こう」「開こう」「來よう」「起きよう」「休もう」「出立しましょう」と云つてわ、不定の意味になるからでもある。

○駿河、山梨縣、長野縣、越後から東でわ、「書いて居る」「讀んで居る」「受けて居る」などを約めて、「書いてる」「讀んでる」「受けてる」(過去に、「書いてた」「讀んでた」)と云て、進行現在に用いることがあつて、近畿邊でも、そう云う、それから西にわ、「書いて居る」「讀んで居る」「受けて居る」などを約めて、「書いとる」「讀んどる」「受けとる」と云う所があり、尙、近畿から西には、それを轉じて、「書いちょる」「讀んちょる」「受けちょる」などゝも云い、又、「書き居る」「讀み居る」「受け居る」を轉じて、「書きよる」「讀みよる」「受けよる」などゝも云う所があるが、どれも用いぬがよかろう。

【一二五】命令わ、その意味を云つて、終止形となる。

【一二六】五段活用の動詞の命令の形わ、文語の四段活用のと、變わりはない。

【一二七】上一段、下一段活用の動詞の命令を、駿河、山梨縣、長野縣、越後の一部から東でわ、口語に、「起きろ」「落ちろ」「着ろ」「見ろ」「受けろ」「捨てろ」と云う、尙、富山縣、三河、三重縣にも、そう云う處があり、九州の筑後、肥前、熊本縣、宮崎縣にも、「ろ」をませて云う處がある、其外わ、遠江、愛知縣、岐阜縣、富山縣、佐渡から、京都府、大阪府、和歌山縣、香川縣までは、大抵「起きよ」「落ちよ」「着よ」「見よ」「受けよ」「受けい」「捨てよ」「捨てい」をませでつかい、(京都大阪わ、「起きい」「落ちい」「着い」「見い」「受けえ」「捨てえ」)それから西わ、九州まで、大抵わ、「い」である、しかし、上一段活用にわ、「い」の着かぬのもあるから、今わ、「ろ」「よ」の二つに定めた。

「受けい」「捨てい」を、「受けえ」「捨てえ」と云う所が多い。

群馬縣の吾妻郡に、「着よ」「見よ」と云う處があり、武藏の兒玉郡、群馬縣の多野郡、佐波郡に、「着い」「見い」と云う處がある。

上一段活用の命令には、奈良縣、河內、丹波、宮崎縣に、「起き」「落ち」とばかり云う

所があり、石川縣に「起きよ」と云い、遠江、三河に「起きょう」と云う所があり、富山縣に「起ッきょ」「起ッき」「起ッきゅ」「落ッちょ」「落ッち」「落ッちゅ」と云い、丹波、播磨に「起きゃあ」など云う所がある、又、奈良縣に「起きろう」など云い、京都、大阪、尾張、播磨、長崎に「起きんか」「落ちんか」なども云い、(「起きぬか」「落ちぬか」の反語から、遷つたのである)秋田縣、山形縣の庄内、越後、佐賀縣、熊本縣、宮崎縣、鹿兒島縣に「起きれ」「落ちれ」など云う所がある。

河内に「着似」とばかり云う所があり、富山縣に「きょ」に「ょ」とばかり云う所があり、三河に「お着り」「お見り」と云う所があり、名古屋市、播磨、長崎に「着んか」「見んか」と云い、青森縣、秋田縣、山形縣の庄内、越後、筑前、佐賀縣、大分縣、宮崎縣、鹿兒島縣に「射れ」「着れ」「似れ」「見れ」と云う所がある。

下一段活用の命令にわ、遠江、三河に「受きょう」「嚙みょう」と云う所があり、(未來推量を、命令に用いることがあるから、變わつたものであろう)尾張、美濃富山縣、石川縣に「受きょ」「捨ちょ」「嚙みょ」と云う所があり、奈良縣、河内、丹波、熊本縣、鹿兒島縣に「受け」「任せ」「嚙め」などゝばかり云う所があり、筑前、大分縣、宮崎縣に「受きい」「捨ちい」「任しい」「兼にい」と云い、宮崎縣に、又「受き」「捨ち」「任し」「兼に」「嚙み」又「受きょ」「兼によ」と云う所があり、奈良縣に「受けろう」と云い、秋田縣、山形縣の庄内、越後、佐賀縣に「受けれ」「嚙めれ」と云い、尾張、播磨、長崎縣に「受けんか」「捨てんか」と云う所がある。

【一二八】「くれる」と云う動詞わ、下一段活用であるから、その命令わ「くれろ」「くれよ」「くれい」であるが、(醒睡笑、七「おのれが腰にあるめしを、われにおくれよ。」)又、五段活用の命令のように「茶をくれ」「菓子をくれ」とばかりも云う。

「くれよ」わ「與へよ」の意味でなくて「自分の爲にせよ」と求める意味にもつかつて「貸してくれ」(狂言記、萩大名「某をも、よい時分に、引合はいてくれさしめ。」)など云う、是れわ「自分の爲めに貸せ」と云う心で「貸してください」などゝ丁寧に云うも此心である。

○「よ」の「い」「え」となつたもの(「へ」とあるも「え」である)

室町時代

孟子抄、一、二七　穆公が、三良ニ、死ニ殉ヘイト遺言シタ。同、二、一六　妻子モ、何カ只、ハ有フゾ、跡デ過イ(過シ)テクレヘト云心。同、二、一七　チト、氣ニチガヘバ、徒ラ物ヂャ、截テスステイ、ナド云ル、ゾ。

【一二八】　動詞　上一段下一段活用の命令形

狂言記、萩大名、太郎冠者、これへ出い‖。ゆるりと見物せう、床机をくれい‖。同、相合袴、さあ〳〵こゝへ足を入れい‖。同、抜殻、御酌、云々、さあ〳〵、受けい‖〳〵。同、惡坊、一飯の、云付けい‖。早う拵へい‖。同、かくすい、かの内々云ふたる高札をあげい‖。同、法師物ぐるひ　くどい事をいふて行かぬか、出て失せい‖。同、素襖落、今一つ飲うで、風味を覺へい‖。

江戸時代

醒睡笑、八、御所、風呂に御入ありつるを、蜂屋伯耆守、御垢にまゐらんとて、ふかれけるやう、知行くれい‖〳〵〳〵と、云々、

【一二九】文語のカ行變格活用の命令の「來よ‖」を、口語に「こい‖」と云うわ、東國一圓から、西は中國、四國、それから、九州の大半にまで及んで居る、しかし、又「こう‖」と云う所も、關東、奥羽の大半から、山梨縣、長野縣の一部、三河の豐橋、越後、富山縣、石川縣、福井縣、滋賀縣の蒲生郡、丹波、大阪府の一部、和歌山縣の和歌山市、新宮、岡山縣の都窪郡、廣島縣の御調郡、香川縣の一部、高知縣にある、そうして「こい‖」「こう‖」をませてつかつて居る所もあり、其一つをつかつて居る所もある、（京都わ「こい‖」で、大阪わ「こい‖」「こう‖」をませる、今わ「こい‖」の一つに定めた。

群馬縣の利根郡、長崎縣、沖縄縣に「こよ」と云う所があり、青森縣、山形縣の庄内、福井縣に「こ」とばかり云う所がある。

茨城縣に「きろ」と云う所があり、秋田縣の龜田でわ「ころ」と云い、山形縣の庄内、越後、富山縣、岡山縣の川上郡、山口縣の大島郡に「こえ」と云い、奈良縣に「きよ」と云い、高知縣、豐前に「きい」と云い、大分縣に「きい〳〵い」と云い、長崎縣、筑後、熊本縣に「けえ」と云い、佐賀縣に「けえ」又わ「け」と云い、宮崎縣に「きよ」「きい」〳〵「けえ」「けよ」と云い、鹿兒島縣に「けい」「け」と云う所がある。

○萬葉集、七に、「白玉寄せ來、沖つ白浪」。同、七に、「雨ぞ降るてふ、歸り來吾が兄」。古今集、二十に、「すゑさへ寄りこ、しのび〳〵に」。榮華物語、月の宴に、「尋ねて訪ひこ、きなばかへさじ」。などゝ、古くわ、命令に「こ」とばかり言つて居たが、中世から、「よ」を添えて云うようになつたのである。

○「こよ」の「こい」となつたもの「ひ」とあるも、「い」である）

室町時代

史記抄、十一、二八　コチヘコヒト云フ。同、十一、一〇五　與期旦日ノ出トハ、明日、トヲク、日ノ出ル時分ニコヒト云フ心ゾ。

【一二九】動詞　カ行變格活用の命令形

孟子抄、十四、一三　哀レ、馮婦ガコイカシト思タレバ、折節、ソコヘ來タ處デ迎テ取テ給ハレ、ト云ゾ。

狂言記、萩大名、　追付て行かう、さあ〳〵、こい〳〵。　同、相合袴、　やい、冠者、行て呼びましてこいや。

江戸時代

おあん物語、　親父、ひそかに天守へまいられて、此方へ來いとて、母人我等をも、つれられて、

諸國盆踊唱歌、長門、　こいとゆたとて、ゆかれるみちか、みちは四十より、夜はいちや。

淋敷座之慰、のほゝんぶし、　でつちもてこい、すり鉢笠を、こゝさかぶさろ、獄門へ。

狂歌鳩杖集、　大阪へ、やがてこいとの、地黄煎、あまいことばに、ちよいとの

る船。

西鶴置土産、五、都、もさびし朝腹の献立、　前々の銀もつてこいと申ました物か、

【一三〇】　文語のサ行變格活用の命令の「爲よ」を、口語に「しろ」と云うわ、靜岡縣、山梨縣、長野縣、越後から東、一圓で、尙、三河、三重縣、富山縣、佐賀縣、熊本縣、宮崎縣にも、そう云う所がある、又、富山縣、石川縣、福井縣、滋賀縣、三重縣から西わ、九州まで、大抵「せい」と云い、長野縣、遠江、愛知縣、岐阜縣にわ、「しよ」又わ「せよ」と云う所があり、そうして、此「せい」「しよ」「せよ」をませてつかつて居る所があり、其中の一つをつかつて居る所がある、(京都、大阪は「せえ」である、今は「しろ」「せよ」の二つに決めた。

東京で「何しろ、安心わ出來ない」など云うを「何せよ」と云うこともある、是れわ、それにまかせる意味である。

山形縣の飽海郡に「せい」と云う所がある。

「しろ」せよ」をませてつかつて居る所が、武藏の入間郡にあり「しろ」しい」をませるのが、群馬縣の多野郡にあり「しろ」しよ」をませるのが、武藏の入間郡、群馬縣の邑樂郡、山形縣の東置賜郡にあり「しろ」せい」をませるのが、武藏の浦和、川越、兒玉郡、神奈川縣、群馬縣の佐波郡、岩手縣、青森縣、越後にあり「しろ」しよ」せよ」をませるのが、靜岡縣、長野縣にあり「せい」せよ」しよ」をませるのが、三